副業持ちの艦娘達

maple sugar

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品はただの艦娘というだけでは物足りなくなった作者が唯々書き連ねるだけの話

しかし！深海棲艦はズルを許しません。必ず艤装で戦いましょう

設定上でご不明な点がありましたら感想まで。

目次

プロローグ ―― 1
さあ、提督になろう ―― 5
学校に行こう ―― 10
講義の時間だオラ!! ―― 14
艦娘と一緒 ―― 18
とりあえず作戦会議 ―― 22
ドラマチックは突然に ―― 26
おお、勇者よ!! ―― 30
時雨は可愛い ―― 34
変態は2隻あった!! ―― 40
そういえばこいつも狼だったな・・・ ―― 46
青葉の言の葉 ―― 54
これより合同訓練を開始する!! ―― 59
訓練中だけどゆらゆらしてきた ―― 65
忘年会シーズンだから忘れちゃおうね ―― 71
叢雲の努力 ―― 78
若葉、お前・・・ ―― 84
夜なのだからお静かに ―― 90
多いに、歓迎しよう ―― 96
エロ本は、時に青春の象徴になりえる ―― 103
私、若葉。今あなたの・・・ ―― 112
これって犯罪じゃないよな? ―― 119
幸せっていいな ―― 124
妹、妹、妹だ!!! ―― 131

君の好きにすればいいんじゃないかな？ ―――― 137
後日談というか・・・うんぬんかんぬん ―――― 143
卒業できると思ったかダボが!! ―――― 148
故郷へ帰ろう ―――― 157
くまののこのこげんきなこ ―――― 162
迷子の時は動かない事!! ―――― 168
ケーキは一日1ホール ―――― 175
白露型のエロ担当・・・いや、人それぞれか ―――― 180
ハーレム主人公が女子寮に侵入するイベント的な奴 ―――― 189
海に行くときは日焼け止めの上から防護服を着ること ―――― 195
運はしょうがないとしてその他のことはどうにかなるのでは？

プロローグ

皆さんは運命を信じるだろうか？
例えば・・・吸血鬼の足に引っかかってつまずいたりだとか、邪神が突然やってきて住み着いたりだとか、ガチャで自分の欲しいキャラが出なかったりすることとかだったりである
そしてここにも運命の出会いがあった。

なんで俺だけ出ないんだよ！ん？チラッ
魔法のカード「カキン・・・スリュ？」
「すりゅうううう!!!!おっと！」「あっ！」
「すまんな前見てなくて・・・」
「・・・」
「大丈夫？」
「ええ、大丈夫よ」
「それじゃあな」
「あっ・・・・・・・司令・・・官？」
そしてこの運命をきっかけに・・・ある男の運命は狂い始めた・・・
彼は提督となり・・・

「わが娘達を嫁にしたいというのならこの私を倒してからにしろぉぉぉ!!」シンケンフリオロシ
「おい、話聞いてたのかよクソジジイ！嫁じゃなくて艦娘だって言ってんだろぉぉぉぉ!!」シンケンシラハドリ
「父さん！やめてよ！」
「やめてください！お父様！」
「那珂ちゃんアイドルなのにお嫁さんなんて・・・だめだよ♡」

「あんたみたいな役立たずあたしは知らないよ！戦場でも海の底でもどこでも行きな！」ドンッ

「キャッ！」ドサッ！
「全くなんだよあのクソババア・・・ほら、立てるか？」
「あなたは・・・どうして私にやさしくしてくれるのですか？」
「みんながみんなあんな風にお前に厳しいわけじゃないさ、ほら、歩けないんだろ？背中乗れよ」
「・・・Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ・・・Ｍｙ　Ａｄｍｉｒａｌ．このご恩は一生忘れません・・・」

ダダダダダダダダ！！！！
ドカッーーーン!!
シニサラセェェェェェェ!!
「ポーラ!!・・・私・・・会いたかった!!」
「ザラ姉様・・・・・・ポーラもです!!」
「いや感動の再会はいいんだけどイタリアのギャング同士の抗争のど真ん中でやるのはやめてくんない!?」
「いやそれよりもなんなのあいつら!?おでこ燃えてるやつらと超能力者が戦ってるんだけど!?」

「提督・・・私ずっとまた会いたかった・・・今度こそは提督の一番目指すよ・・・」
「いや、俺らはじめて会ったよね？」
「ううん、一巡前と2巡前と5巡前の宇宙で深海棲艦が現れて白露と提督はめぐり合ってる」
「お前いくつだよ!!」
「歳はあまり教えたくないけど私は白露、７９３２兆１３５４億４１５２万３２２２個のと、４９２５兆９１６５億２６１１万０６４３個の、合わせて一京２８５８兆０５１９億６７６３万３８６５個のスキルを持つちょっとすごい艦娘だよ。親しみを込めて「いっちばんさん」と呼びなさい。・・・なんてね」

「それで・・・君は？」
「明石と申します」
「私は夕張と申します」
「君達、元の仕事辞めてきたんだって？」
「はい、元は私達、ＳＴＡＲＫ　ＩＮＤＵＳＴＲＩＥＳに勤めておりまして」
「えっ！あのアイアンマンの!?」

艦娘たちを集め・・・
行くぞ！陸奥！主砲一斉射！てぇーーーー!!
提督ぅ！勝てたら鈴谷達の事うーんとほめてね！

いや、うちら過剰戦力だよね。なんで深海棲艦に負けちゃうの？
だって私達の最新兵器もスキルもあいつらに全く効かないですし・・・ボロボロ
ホントに？結構うちいろいろできるけど・・・
試したが駄目だった・・・やはり奴らに通用するのはこの艤装だけのようだな・・・ボロボロ

深海棲艦と戦い・・・

「提督ぅーーーー!!レベルカンストしたヨーーーー!!」
「提督は逃亡しました」
「なんでレベルカンスト艦が出たら毎回逃亡するんだよ!!」

「済まないなイムヤ」
「わかってる。ここならバレないからしばらくここにいたら？」
「ありがとう。・・・て何してんの？ちょっと？ねぇ!?助けて!!イムヤ

に襲われるーーーー!!!」
「見つけましたヨ」ニコッ
艦娘達と絆を結ぶそんな提督のお話・・・

さあ、提督になろう

提督……待ってろよな……もうすぐちゃんとした形で会えるから……

俺は昔から変な夢を見ることがあった。
みんなが言うところの悪夢を見る時必ず青い髪の小さな女の子が現れて助けてくれた。
だから基本的に俺は悪い夢で目が覚めたことはないのだが、今回の寝覚めはすこぶる悪かったし、目が覚めたと気付いた後もあまり気分のいいものではなかった。

「お目覚めですか？　提督」
「うん？　俺は……えっと買い物に出たらなんか車に押し込まれて……それで？」
思い出せないええっと何だったか
「……ねぇ、ええっと、お姉さん？」
「大淀といいます。これからよろしくお願いしますね」
「これからあなたには提督となり艦娘達とともに深海棲艦と戦っていただきます」
「いやそんなこと言われてもよくわかんないんだけど。ねぇ、なんで俺拉致られたの？　出るとこ出てやろうか？」
「あら、さっそくセクハラですか？　まあ、あなたほどの適性があれば簡単に出すとこ出せると思いますが？」
「そういう意味で言ったんじゃねぇよ！　訴えるって意味だよ！　何？　頭の中にラブホでも建ってるの？　そりゃあ、そんなスカート人前ではけるんだもんな！」
「……訴える？　こっちは軍ですよ？」
「組織ならなおさらふんだくってやれるな」
「あなたが徴兵に応じなかったからです。入隊命令の手紙を見なかったのですか？」

「いや、最近何かと物騒だから外に出られなくてな。ポスト見てないんだわ」
「……まあ、最後まで聞いてください。貴方には提督として高い適性が見られました。人類は様々な手段で深海棲艦を打倒しようとしてきましたが、全く歯が立ちませんでした。深海棲艦を倒すにはやはり艦娘を集める必要があります」
「適性？　俺なんも知らないんだけど？」
「彼女がその証拠です」
　部屋に一人の少女が入ってきた……うーん、目つき悪いな」

「……あんたが司令官？　私のこと覚えてるかしら？　４日前に街で貴方にぶつかったんだけど」
「覚えてない」
　嘘、ほんとは覚えてる。とてつもなく印象的だったからだ、でも面倒に巻き込まれたくないなら知らんふりが一番だ
「なんで覚えてないのよ！　それでもあんた私の司令官になる自覚あるの!?」
「あら、ごめんなさい提督。この子は叢雲といいます。まだ人見知りみたいで……代わってをお詫びします」
「いや、歩いてた俺を突然拉致ったお前らが俺に失礼を詫びろよな。それで……この子が何だって？」
「ですから、彼女がこうやってあなたに話していること、そしてあなたのことを司令官と認めていることが何よりの証拠です。わかります？」
　分からん。というか一般人の俺にもっと説明するべきじゃないのか？　深海棲艦については知っている、テレビでやってるし
「彼女は特別意識が強いのです。彼女の名前のもとになった先代の艦が日本初の駆逐艦だったからでしょうか？　まあ、推測は良いのですが彼女はあまりにも周りとコミュニケーションを同じ艦娘としか取ろうとしませんでした。しかしそんな中彼女が唯一関心を示したのが貴方だったんですよ。」

「どんなに嫌がってもやらざるを得ません。因果みたいなものですよ」
「……あのな。いくら深海棲艦が来て困ってるからってこんなことしていいと思ってるの？」
「……まだごねるつもりですか？」
「いいから聞け。これはサラリーマンだとかのただの仕事じゃない。俺は初心者だからよくわからんが少なくとも危険な仕事だということはよくわかる。それこそあいつらが攻めてきたら一発なんだろ？
　俺は親を深海棲艦に殺されたとかじゃないから深海棲艦に対してそこまで強い感情があるわけじゃない」
「……」
「いいか？　俺はお前たちに俺の命を預けなきゃいけないんだぞ。それこそ今日会って拉致られて突然こんな場所に連れてこられたお前たちにだ。お前俺が死んだらどうしてくれんの？　ん？」
「それは……」
「他に適性の高い奴は絶対にいる。軍事関係に詳しくて深海棲艦打倒を強く考えてるやつがお前らを引っ張ってくれる。だから、俺のことは……諦めてくれないか？」
　……どうだ？　ここまで言えば考え直してくれるか？　まあ正直ここまで言うつもりはなかったんだが……
「……申し訳ありませんでした。あなたの気持ちも考えずに勝手なことをしてしまいました」
　そうそう、わかったら俺をもとの場所に……
「……ですがご安心くださいあなたより先に私の命を差し出します」
　……ん？
「私とて艦娘です。叢雲ちゃんではわかりにくいかもしれませんが私もあなたと出会えてうれしかったんです。まるで、心の足りないピースが埋まったような動かなかった歯車が動き始めたようなそんな気持ちになったんです。どうか……今だけは私達を信じてください。もし危ないと思ったら真っ先にあなたが逃げてください。私達艦娘はあなたを守る事が務めなのですから」

うぅ、くそぉ！　諦めてくれないぞ！　どうすればいいんだ！
「……やっぱりだめだ」
「……やはり信じていただけませんか？」
まさかここまでの覚悟があるとは思わなかったでも……
「お前の覚悟はわかった。でもやっぱり俺はお前たちのその覚悟を背負えるほどの男じゃない」
「そう……ですか……」
よしいいぞ、このまま押し切れば……
「あああああぁぁぁぁぁもう！　ごちゃごちゃうるさいのよあんたは！　こうなったもんはしょうがないでしょ！　負ければどうせ内部まで攻めてこられてあんたは死ぬの！　わかる？　覚悟を背負えないなら背負える男になればいいの！　私達が信じられないなら……私の力が信じられない!?　だったらあんたに私の力見せてやるわ！」

突然隣で聞いていた叢雲が大声で説教？　発狂？　して俺に主砲を向けてきた。
「ちょっと叢雲ちゃん！　落ち着いて！」
「どうするの!?　私達と一緒に戦うか、ここで私に殺されるか選びなさい！」
そんなの答え一択じゃないか……あともう少しだったのに……ガッデム！
「……ああもう、わかったよ」
「……わかればいいのよ」
叢雲は落ち着きを取り戻すと艤装を下した。
「俺はこれからどうなるか聞いても？」
「まずは他にもいる艦娘を探す事、それから彼女たちを育てる事、そして彼女達と深海棲艦を打倒することがあなたの仕事です」
「お前らが探してくれないの？」
「こちらも協力いたしますが……貴方が自ら会った方がいいと思いますよ？　提督と艦娘はお互いを知らずともスタンド使いみたいにいずれ引かれ合うんです。・・・ですが、まずあなたには提督になるた

めの準備をしていただきます。まあ、要するにお勉強です」

「前言撤回、やっぱやめるわ」

学校に行こう

俺が連れてこられたのは学校のようなところだった。ここはもしかして・・・

「ここは？」

「まあ簡単に言えば士官学校のようなものです。ですがほかの所と違い艦娘とそれを指揮する提督が専門になっています」

やっぱりだ。俺に此処でもう一度学校生活を送れというのだろうか？しかもおもいッきしハードな奴

「なぁ、俺が適性あるなんて実は冗談なんだろ？この士官学校の名前「クロビカリ」だったりしない？笑っちゃいけないやつの」

「深海棲艦と戦争中にそんなこと出来るわけないじゃないですか。冗談ではありません。いい加減諦めてください」

俺の願いはむなしく散ってしまった。大淀のコスプレした藤原寛とかだったらよかったのに

「こちらですよ、提督」

「ハイハイ、ん？」

俺が建物に入ろうとすると入口の所に一匹の猫が座っており、明るめの茶色の毛の猫で首輪をつけていた。

近づいてもほとんどおびえたりせず、かなり人懐っこい所がうかがえる。試しに撫でてみる。

猫は目を細めながらただされるがままに撫でられている。

「何？ここで猫飼ってるの？」

「いえ、野良猫でしょうか？あっ首輪に名前がありますね。ええっと・・・C・H・E・W・I・E？なんて読むんでしょうこれ？」

「チューイって読むんだよ。そうかお前チューイっていうのか」

俺はそのまま顎を撫で始めると猫はゴロゴロと鳴き始め、しまいには仰向けに腹を見せてきたのでおなかもさすってやった。

「ちょっと、いつまでも猫と遊んでんじゃないわよ。さっさと行くわよ」

俺は猫に別れを告げると、俺は案内されるがままついて行った。
それにしてもでかい施設だ、深海棲艦が現れてからまだ数年位しか経っていないにもかかわらず、提督と艦娘の育成のための士官学校にこれだけのものが用意されているというのはやはり深海棲艦には他の所の軍は期待できないということだろう。
まあ、確かこの間宇宙人がアメリカに攻めてきて地球のヒーローたちが戦ったという話を聞いたが彼らがどうにかしてくれないのだろうか？
「それではここに名前をお願いします。それからこちらの書類にもサインを・・・」
「はい！それでは、これであなたも軍に所属する一員となりました。自覚を持って頑張っていきましょう」
「はーい」
とりあえずここは従っておこう。
「あなたの部屋はこちらです。明日からカリキュラムに入るので準備しておいてください」
よし、とりあえずこの部屋に監視カメラ等が設置されていないことを確認してと・・・
大人しくしておこう少しの間だけは・・・

数日後・・・
「今日の訓練お疲れさまでした。明日も頑張りましょう」
はー、終わった終わった。俺は寮に戻るとベッドに入り明日に備えて寝る・・・フリをした。
聞いた話だとここは夜になるとこの寮は施錠されるらしい。
さらに、監視カメラの位置はここに来るまでで大体把握した。
「マルフタマルマルっと、よし、ちょっと遠出するか」
ってなんかここにいる間に時刻の言い方変わってしまった。とにかく俺はこの石造りの海から自由になる！
監視カメラに映らないように施錠された扉の前まで来ると、ここに

来た時にサインを書いたペンから拝借したバネを取り出す。
「これをこうしてこうやって・・・開いた！」
外に出たぞ。よしよし、ここまで順調っと・・・やべっ見回りだ！
俺は草むらに身を隠す。よしよし何とかごまかせそうだ
「ミャー」・・・えっ？
そこに猫が参戦、しかも初日に撫でてた猫だ。おい！お前は色々食わせてやっただろ！俺を裏切るつもりか！
「ん？なんだ？」
警備員が俺の所に注意を向けた。
「おいおいこっちくんなって」
俺は猫を追い払おうとするが、猫は鳴きながらこちらによって来る。
「誰かいるのか？」
警備員までこっち来た！もうだめかも・・・
「あっ、これは！・・・・・・なんだ段ボールか・・・」

「・・・ねぇ？」
「し！静かにして！これ防音効果はまだついてないんだから見つかっちゃう」
間一髪で俺は彼女に助けられた。この段ボールの中に入ったおかげで何とか見つからずに済んだようだ・・・あれ？
「危なかったわね。私がいなかったら見つかってたわよ」
「ねぇ、なんで外に段ボールがあって不思議に思われないの？」
「私さっきから近くにいたんだけど気付いた？」
全く気付かなかった・・・段ボールってすごいんだな
「いやでもこれどうなってんの？中かなり広いけど外から見ると絶対普通の段ボールに見えてるってことだよね？」
「そうよ、すごいでしょ」
「でも何でこんなものを・・・」
「地球ではこれがないとアラームが鳴って射殺されるって知り合いに

聞いて」
「地球では?まるで宇宙から来たみたいな言い方だな」
「そんなことより司令官。久しぶりに会えたんだものもう少しここでこうしててくれない?」
　女の子は俺にすり寄ってくる。俺はそれにつられて少し後ろに引いてしまった。
「えっ?・・・何で?何で離れていくの?もしかして・・・私の事嫌いになっちゃったの?私はあなたの事ずっと・・・ずっと考えて生きてきたのに・・・」
　おっと?少し怖くなってきたぞ?もしかして俺は地雷原に引きずり込まれてしまったのか?
「いや、俺お前の事知らないんだけど?どこかであった?」
「いえ、あなたと話すのはこれがはじめてよ」
「なんなのお前?」
「でも私はあなたの事よく知ってるの、それはもう何もかもよ。あなたは私の事を知らないかもしれないけど、そういうこと言われると死にたくなるの。だからそういうこと言わないで」
　今なんかものすごく理不尽なことを言われた気がするのは気のせいかな?
「ところでお前艦娘だろ?俺が言えた立場じゃないがこんなところで何やってんだよ?」
「私はね、潜水艦娘なの。だからこうやって秘密裏に移動する練習をしてたの。別に司令官に会いに来たら偶然そこにいたとかじゃないからね」
　誰もそんなこと言ってないのだが・・・
「今日はもう戻った方がいいわよ。ほら、明日もあるんだし貴方にはまずちゃんと司令官になってもらわないといけないから」
「・・・お前もそんなこと言うんだな、わかったよ。ところでお前なんて名前は?なんていうの?」
「私?・・・伊168よ。イムヤでいいわ、貴方には特に・・・そう呼んでほしいかな」

講義の時間だオラ!!

「もー、提督。どーしてイムヤを引き寄せちゃうかなぁ。この艦娘たらしめ。でも許しちゃう、だってまたこうして提督としてここに戻ってきてくれたんだからね」

何だろうここ。俺はソファーに座っていた。部屋にはテーブルをはさんでもう一つのソファーが設置されており、そこにはいつも見る青髪の少女……ではなく茶髪の少女が座っていた

とゆうか今俺のこと提督って言ったのか？

「うん、そうだよ。ずっと……会いたかった」

「いや、俺たち初対面だよね？」

「提督は初対面かもしれないけど、あたしはもう何度もあってるんだよ」

私は？

「いいよ無理に考えなくても。まだ艦娘として提督の役に立つのはもう少し後になりそうだけどすぐに向かうからね」

実際、提督になるなんてまだその場しのぎに言ったことだということとは言わないでおこう

「なぁ、一つ聞いていいか？　赤い髪の潜水艦娘はお前の知り合いなのか？　お前と同じようなことを言ってたんだ、「また会えた」って」

「そうだよ「前の提督」の時に一緒に働いてたんだ。まあ、害はないから安心してよ」

「ホントに？　結構危ない感じしたんだけど？」

目のハイライトなかったもん。やばいってあいつ。

「それじゃあ、そろそろあたしはいくからね。提督もそろそろ起きた方がいいと思うよ……ああそうだ最後に」

「なんだむぐっ！」

その少女は俺の顔を両手でつかむと唇をおしつけてきた。

「ぷはっ！　お前舌入れやがったな！」

「えっへへ、いっちばん最初のファーストキスはいただいた！　それじゃあまたね……愛してるよ提督」

茶髪の少女は手でピストルの形を作り俺の額をめがけて撃ち抜いた
「バン!!」

「いってぇ……」
「目は覚めましたか？」
俺が頭を上げると、分厚い本を持った少女が腕を組んで立っていた
「……今その鈍器の角で殴った？」
「はい、あまりにもきれいに眠っていたので提督という職の歴史と大切さを物理的に感じていただこうかと思いまして」
彼女は鹿島……教官である。彼女も艦娘なのだが、今は彼女に提督としてのイロハのようなものを学んでいる。
今はその講義中なのだがどうやら寝てしまったようだ。
「良いですか？　艦娘にも生まれた時から適性がありましたが、それと同じように提督にも生まれた時から適性を持って生まれてきます。貴方はここ最近の中でも特に高い適性を持った方なんです。もっと国を守るという自覚をもってですね――――」
「それは、もう何度も聞いたよ。というかもう昼飯だから座学終わりでいいんじゃないの？」
「そんなもの貴方にありません！　そもそも何であなたは一対一の講義であんなに堂々と眠れるのですか？」
それは教官の授業がつまらな――痛い!!
「気が変わりました。本日の小休止もすべて無しにします」
酷すぎる、まだ何も言っていないのに。こんなの横暴以外に何といえばよいのだろうか、俺を拉致った奴といい艦娘には人の心ってもんがないのか？

「お願いですから前を見てちゃんと講義を受けてください。いいですか？」
「はーい」

「魚雷は主に、潜水艦、駆逐、軽巡、重巡などに装備でき、特殊な例では戦艦にも――――」
「……」ジィー
「6隻編成の場合、主な陣形は最大でも六つあり――――」
「……」ジィー
「……あの、貴方何処見てるんですか？」
「鹿島ちゃんの太もも」
　それを聞くと同時に、鹿島は顔を真っ赤にしながら自分の足を本で隠した。
「ホントに何処見てるんですか!!」
「だってさっき前を見ろって……」
「黒板を見ろって言ったんです!!」
「俺は男として正しいことをしたまでだ。まず第一にあんたみたいな美人が前にいて鹿島ちゃんよりも講義を優先する男がいるだろうか？　いやいない!!　そんな奴は提督である前に人じゃない！」
「えっ！　そんな……美人だなんて……ってそうじゃなくって、提督として正しいことをしてください。」
「女として生まれたお前に男の悲しいサガの何がわかるって言うんだ！　いいか？　ちょっとでも何かあったらやれ痴漢だの視姦だの言われる時代だぞ。そんなときにこうやって、半分許可をもらったような状態ならその状況を極限にまで楽しむものだろう？」
　誰だってそーする。俺もそーした。
「あなたは全国の男性の方々に謝ってください、偏見ですよ！後それは男としても最低です！」
「鹿島ちゃんがそんな格好で俺の前に立つのが悪い。だから、俺は悪くない」

「はぁ、もうわかりましたから。じゃあいったいどうやったらちゃんと講義を聴いていただけるんですか？」
「だったら今良い方法を思いついたよ。鹿島ちゃんが自分の太ももに講義の内容を書けばいいんだ。そうすれば俺は鹿島ちゃんの太ももが見れる。鹿島ちゃんは俺に講義の内容を見てもらえる。お互いにＷＩＮ―ＷＩＮだ！　どうだこの天才的な発想は!!」

思いっきり本で殴られた。一体なぜなんだ・・・？
「なぁ？　今こんなことしたら社会的に問題になるんだぜ。知ってた？」タンコブヒリヒリ
「ならあなたの先ほどのセリフも社会的に問題になるんですよ。知ってました？」
「……知ってますん」

艦娘と一緒

提督と艦娘というのは上司と部下の関係であり、提督の命令に艦娘は従わなければならないのだが、やはりお互いに本物の戦場に出る前にある程度親密になっておくのが望ましいらしい。

それは、俺でもわかる。

お互いに親密になっておけばお互いの事を知りえているということだから初めて戦場に立った時の安心感というもは少し違うだろう。

それが理由の一つ、実はもう一つの理由がありそちらの方が実は案外大事だったりする。

それは、提督が艦娘という存在を正しく認識することであった。

深海棲艦達を打倒するため人類は、目覚ましい力を持った少女たちを集め、組織を作り、より大きな力にする計画をスタートさせた。

しかし、この計画は始まったばかりで世間にはあまりきちんとは認知されていない。

特に艦娘という存在をあまり皆知らないのである。

だから、提督という役職を得る上では知らなければならないのである。

例えば適性を持った者には初対面でもかなりの好印象であり、かなり突っ張ったような娘でも命令を受ければ大体従うという事。

彼女たちは甘いものに目がないという事

そして、彼女達にもこの戦いが始まるまで彼女達には彼女達の生活があったということを知らなければならないのだった。

それは、俺も例外ではなかった……

「艦娘の知り合いは増えましたか？」

「いや全然」

鹿島と食堂で朝食をとっていると鹿島からそんなことを言われた。

別に提督と艦娘が接触を持つことが禁止されているわけではない。

逆に先ほども言った通りこれから共に戦う戦友としてのファース

トコンタクトをここで取るように言われていたりする。
適性がある時点で艦娘からの第一印象はかなり良いらしく中には初対面なのに忠犬の様な態度を見せる艦娘もいるらしいが、やはりここにいるころから仲良くなっておくというのが良いらしい。
あれからというものの、ほぼ強制的につるまされる鹿島以外とはほとんどあったことがない。あとは……あの時の潜水艦娘か
「全く、それではだめですよ。今のうちにたくさんの艦娘達と交流を持っておいてください。そのために此処は提督と艦娘が出会えるようになってるんですから」
「う～ん、でもあんまり会えなくって」
「嘘ですね。あなたほどの適性があれば向こうから来るはずです。それでも来ないということはあなた……艦娘を避けてますね？」
「……ソンナコトナイヨ。ベツニツキアイガメンドクサイトカジャナイヨ」
「わかりました。ではこうしましょう。私の講義をしばらくお休みにしますので、出来るだけ艦娘の知り合いを増やしてください。いいですね？」
そんな……鹿島教官を眺めるという俺のここでの唯一の楽しみが……
「ひどいです！　そんなことをしたら俺は一体何のために此処にいるのかわからなくなるじゃないですか！」
「お願いですから少しでもいいので提督としての自覚を持ってください！」

はぁ～もうダメだこんなところいられるかってんだ。俺のここでの唯一のものを奪うなんてあまりにも血も涙もないのではないか
こんなことをやっているようではきっと他の提督たちの間でも暴動がおこるのではないか？　そうなっては戦争どころではない。人類に勝ち目などないのだ。

なんだもうすぐ人類は終わってしまうのか……。ん？　ということは何をしてもいいということだよな？
俺の中でどうやって鹿島のシゴキの仕返しをしてやろうか考えていた時、叢雲が訓練所にいるのが見えた。
まだ訓練の時間ではないからもしかして朝練というやつだろうか。
俺は階段を下り訓練所に顔を出すことにした

「朝から精が出ますな」
「何よその古くさいしゃべり方は？」
どうやら本当に叢雲はこの朝早くから朝練をしていたようだ。
それと……初めて見るやつがいる。
「ああ、あんたは初めてだったわね。初雪よ。まあ、こんなんだけど一応私の姉よ」
「初雪……です。ねぇ叢雲、もういいでしょ？　帰ろうよ」
「あんたまだ何もしてないじゃない！」
「そもそも外出る気なかったし……」
あっ、なんとなくわかるぞ。こいつは同志かもしれない、俺と同じくここに無理やり連れてこられたタイプだ。
これはもしかしたら、仲良くなっておく価値があるかもしれない
「おいおい、無理やりこういうことするもんじゃないぞ。少しは休んだらどうだ？　無理してこういうことやるとどっかでガタが出るぞ？」
「は？　まさかあんた初雪の味方するつもり？」
「いや別にそういうわけじゃないんだがな。でもほら、厳しすぎるのも考え物だと思うんだよ。人には適材適所あるし、もし俺がまかり間違って提督になることになったら昼休憩以外全休にしてやるぞ」
「あんたそれ仕事したくないだけじゃない」
「私、一生貴方についていく」
初雪は俺の手を両手でつかみ目をキラキラさせていた。ベネ（良し）これで仲間が増えたぞ。

「いや二人してニートキメ込もうとしてんじゃないわよ。ニート同士で結束固めても仕方ないでしょうが、じゃあ誰があんたの食い扶持稼ぐのよ」
「・・・叢雲？」
「ふざけんな！」

「それに私は自分の体調管理くらいしっかりしてるから大丈夫よ」
「そういうやつから無理して倒れていくんだぞ」
「じゃあ勝負しましょう」
「勝負？」
「あなたが勝ったら、休んであげる。私が勝ったらそうね……明日のお昼奢ってもらおうかしら？」
　その賭けは俺にほとんど得がないじゃないか
「じゃあ、俺が勝ったら。相談というか。協力してほしいことがあるんだ」
「ふ～ん、いいけれど。まあ、武術においては戦艦の人達にも匹敵する私に勝とうだなんて１００年早いわよ？　止めるなら止めてもいいけれど？」

とりあえず作戦会議

「どうだ？　休む気になったか？」
「あ……あり得ない……なんで？」
　まあ、見事な負けフラグだったわけだ。確かに強かったけどな。叢雲は最初こそ善戦してたものの俺の龍虎乱舞を食らってはさすがに地面に伏せるしかなかったようだ。
「……ひどすぎる」
　見ていた初雪はドン引きした表情で俺のことを見ていた。
　別に俺を戦争に巻き込んだことへの恨みとかがあったわけではない。断じてない。大事なことなので……
「まあ、高校の修学旅行で神室町に1週間いけばこれくらい強くなるぞ？　まあ、あのときは東城会と近江連合の抗争に巻き込まれたりしたがな」
　あそこの連中はチンピラでも腹にナイフ押し込まれても死ぬ事はないからな。武器も持ってたし覇王翔吼拳を使わざるを得なかったが……
「どうすれば修学旅行の1週間でヤクザの抗争に巻き込まれるのよ……」
「そういうもんなの。それじゃあ約束通り相談に乗ってもらおうかな」
「……わかったわよ。でも、もう訓練も始まるわ。この話は後にしましょう」
「じゃあ、終わったら連絡してくれ」
　そこで俺たちはいったん分かれることになった。

「……なんで俺の部屋なの？」
「私の所はダメ。シェアルームだから……。叢雲の所はダメだったの？　ひとり部屋でしょ？」
マジかよ。こいつそんな贅沢なことしてたのかよ。そりゃこんな目つき悪くていつもキーキーうるさい奴の所にいたがる奴がいるとは思えないが……
「ダ、ダメッ！　絶対ダメ！　私の部屋は絶対ダメだから！」
「……。あっ！　ごめん……」
えっ？　何？　何なの今の微妙な会話は。気になるじゃん。
「叢雲は普段クール気取ってるけど、実はドが付くほどの――」
「あああああああ!!!!」グリグリグリ
「あああああ!!　痛い痛い！」
理不尽極まりない叢雲の攻撃が俺を襲う。
「あんた……聞いてないでしょうね？」
「聞こえなかったよ。とゆうか何で俺を攻撃するんだよ！」
「そう、聞こえなかったのならそれでいいの。それじゃあ、本題に入りましょうか」
この野郎……後で覚えてろよ。

「ふーん、艦娘の知り合いを増やせねぇ」
「そうなんだよ」
俺が先ほど鹿島に言われたのは、これからしばらく講義を休みにするから艦娘の知り合いを増やせというものだった。
「そんなの簡単じゃない、艦娘との交流会みたいなのがあるわ。それに参加すればいいのよ」
「え～、でもそれに参加したらあたかも提督の仕事にやる気のあるやつみたいに見えるじゃん」
「まだそんなこと言ってんの!?」

「うん、わかる。好きでもないのにこんなところに連れてこられて……はぁ、樹海行ってくる」
「行くな行くな」
　後で聞いた話だが、初雪はここに徴兵される前は地方の女子生徒だった。しかしその大人しい性格故あまり馴染めず休みがちだったが、少しずつ友達もできて行ったらしい。その直後徴兵の紙が彼女のもとに届いたのだ。その時の彼女の心境はひどいものだっただろう。そんな奴に人類の敵と戦えなんて無理な話だ。
「そういうのに参加せずになんかこう……その場しのぎぐらいの関係でいいんだよなぁ」
「じゃあ、お前たち以外の吹雪型は？」
「ダメよ。あの子達はもう配属先決まってるんだし。大体初雪だって一緒に行くはずだったのよ。それなのに練習サボってるから一緒にいけなかったんでしょ？」
「……一緒には行きたくなかった。私はあんな風に戦うことに真剣になんてなれない……から……。きっと……向こうでも迷惑かけるだろうし……」
　初雪は膝を抱え始めた。
「私は昔からそう。私は外に出るとひどい目に遭う……だから私はこれでいいの」
　布団にくるまってしまった。それ俺のオフトゥンなんだけど？
俺に風邪をひけということか。
「俺も一緒だよ。お仲間だな」
「えっ？」
「俺も昔から何かとひどい目に遭ってきた気がするし……今回だって歩いてたら拉致られたんだ、ほんとに外に出たらひどい目にしか遭わないよな。だからさ、戦場の前線で戦うなんてかったるい事はやる気のあるやつらに任せて、俺らは近海でも守って過ごそうぜ」
「……いいの？」
「いいんだよ。まあ、お前に戦う理由が出来たら話は別だけどな」
　そういうやつがいてもいいだろう。無理やり連れてこられたとい

う意味ではこいつと俺は同志みたいなものだ。ここに集められてるやつらは志願した奴だけじゃないんだし、自分で進んでこんなことやってるやつらの方がおかしいんだ。うん、そうに決まってる。それに、いつまでも俺の布団を占領されても困る。
「ちょっと、初雪を甘やかさないでよ」
　叢雲が俺を叱りつける。が、そんなこと気にしない。初雪とまあ少し仲間がいれば鎮守府はやっていけるらしい。叢雲みたいなやつは本当なら俺なんかとつるまずにもっと優秀な奴の所に行くべきだ。
「ちょっとくらいいいだろ。そんなことよりほら、どうにかしてやる気を見せずに知り合いの艦娘を増やす方法を考えるんだよ」
「まずどのあたりまで知り合いになればいいの？」
「う～んとりあえず、名前を覚え合って連絡先くらい交換できればいいんじゃね」
「やっぱり、交流会に出た方が早いんじゃ……」
「そんなのに出るやる気の満ち溢れた艦娘はうちには必要ない」
「もうあんたそこまで来ると尊敬できるわね」
　俺は顔も知らない一般市民のために戦うとかいうヒーローじみたことは出来ない。そういうことはそういうことを夢見てるやつらに任せればいい
「う～んだったらさ。ナンパしてみたら？」
「・・・え？」

ドラマチックは突然に

ＣＡＳＥ１　扶桑

「あの……大丈夫？」

俺は雨が上がったばかりのすべりやすい床で思いっきり滑り水たまりに頭から突っ込んだ艦娘の手を引いて起こした。

「あ……ありがとうございます。大丈夫ですこのくらいいつもの事です」

これがいつもの事なのか……。

「それに今日はいい日ですよ。だってこうして抱き起していただける殿方に出会えたんですから。明日はきっと雪でも降るのね。ああ、申し遅れました。私、扶桑と申します」

「あ、ああ……よろしく」

「……あの、もしかして私の事をもしかしてご存じないのですか？」

「え？　なんのこと？」

「皆が噂しているんです。私には関わるなと……」

うーん。それはひどい話だ。

「きっと私、昔からいつも欠陥とか不幸だとか言われている事が原因だと思います。ですから私に近づいては不幸が移るとうわさされているのでしょう」

いや、そんな話は聞いたことがないな。でもそれはひどい話だ、確証もないのにそんなうわさを流すなんて。いったいどこの誰の仕業だろうか？

「昔からこの体質はひどかったのですが両親を早くに亡くしてからさらにひどくなって……私の手の中にあるものはどんどん失っていくのです。後に残されたのはたった一人の妹だけ……もう人生に見切りをつけて妹ともども首を――――」

「あー！　あー！　ストップ！　ストォォォップ!!　大丈夫だって！　いいことあるって！」

これ以上聞いてられない。俺は思わず扶桑の手を握る。冷た！

なんだよこれ！　冷え性ってレベルじゃねぇぞ！　実はもう死んで

るとかじゃないよな？
「あぁ、温かい。人の手のぬくもりを感じられたのはいつぶりかしら。徴兵の資料が届いて死ぬ場所すら選べないのかと悲観していたところでしたが……。あの……出会ったばかりでこんなことをお願いするのもおかしな話ですが……その……抱きしめていただけないでしょうか？」
「ああ、うん。これでいい？」
「あ、あ、あああぁぁぁ。心の底から湧き上がってくるこの感覚。これが……幸せなの？」
なんか最初の目的を忘れているような気がするけれど……ん？
「山城ドロップキィィック!!!」
俺が扶桑を抱きしめていると扶桑と同じ格好をした艦娘にドロップキックをお見舞いされた。顔面にドロップキックを食らった俺はそのまま吹っ飛ぶ。
「姉様に触れるなんて１００万年早いのよ！」
……噂の原因がわかった気がするが言わないでおこう。

ＣＡＳＥ２
「イヤー悪いね。奢ってもらっちゃって」
「いいよ。ちょうど誰かとしゃべりたい気分だったんだ」
彼女は北上。ちょうど空いていた席に座ったら彼女と隣になったので話しかけてみたら、みたらし団子を奢る話になった。
何だろうかこのつかみどころのない感じは。
「フーン最近来た噂の新人提督ってのはあなたの事だったんだねぇ。イヤーお会いできて光栄だよー」
なんだと？　こんなに目立たないようにひっそりと暮らしてきた

俺が噂になっているとな？
「俺のことそんなに噂になってるの？」
「そりゃーそーだよ。歴代でも稀にみる高適性の提督が現れたんだから」
　うーん。そんなことで噂になられても困るんだよな。
「艦娘は女の子だからね噂とか敏感なんだよ。そーゆーのを広めるのが生きがいみたいな子もいるし、ちょっとでも何かしたらすぐに」
「すぐに？」
「干される」
「提督やめるわ」
「じょ、冗談だよー。ジョーク、ジョーク」
「ホントに？」
「ホントホント、北上様ウソツカナイ。ああ、でも教官にセクハラしてる提督がいるって聞いたなぁ」
　何だそいつは。教官にセクハラとは最低な奴だな。鹿島ちゃんにも注意するよう言っておかなくては
「そういえばさ、北上さんはここに来る前何してたの？」
「うーん。簡単に言うと宇宙関係のお仕事って言えばいいかな？」
「ＮＡＳＡとか？」
「いやーちょっと違うかな。こー何というか……バシュン！　バシュン！　って感じでさ」
「ふーん。アベンジャーズ的な？」
「いやもっと秘密裏にだよ」
「……それもしかして秘密を知ったらパシャっとやって記憶消したりする仕事？」
「……なんで知ってんの？　あれ結構秘匿性高い組織なんだけど」
「昔、教えてもらったことあるんだよ。確か中学時代に仲良くなった女の子にな」
「はぁ～あ。案外組織の秘匿性もガバガバじゃん。ダメだこりゃ」
「でも、記憶消されずにこっち来てるってことはなんかやってるの？」
「まあね。ちょっといろいろあってさ……。ねぇ、あのさ貴方提督に

なるんでしょ？　私の事つれてってよ。提督が私の事情知ってるんだったら色々動きやすいし。いいでしょ？」
「ああ、もちろんいいぞ。寧ろそっちを重点的にやってもらってもかまわないから……」
　その時後ろからとんでもない威圧感を感じた。後ろを向きたくても体が動かないのだ。
「ねぇ、誰の許可を取って北上さんとしゃべっているのかしら？」
「あ、大井っち」
「よし、ちょっと待て落ち着け。俺が悪かったからその魚雷を下ろせ」
「北上さんの貴重な５分３６秒を奪った罪を償う方法はひとつ……それは――――死だ」
「うわぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

おお、勇者よ!!

「おお　ていとく!　死んでしまうとは　なにごとだ!」
また俺は茶髪の少女と向かい合って座っていた。
何だろう?　大井に魚雷を振りかぶられてからの記憶がない。
「勘弁してくれ。俺はまだ死んでないだろ」
あの程度で死んでいるようではこれから先やっていけない気がする。
「うーん。まあ実際の所、昏睡状態だし……」
それは俺がここにいるからなのではなかろうか?
「では、復活させましょう。クローン蘇生、狩人の夢、王大人(ワンターレン)、死に戻り、紺珠の薬、好きなものを選んでいいよ」
「おい、ロクなものが一つもないぞ!　ザオリクはないの?」
「残念、MPが足りない。復活の呪文はメモっておいた?」
あの士官学校のどこに神父がいたというのだろうか。
「ま、冗談だよ。さっきも言ったけど提督気絶してるだけだから起こせばいいんだよ。それに私のMPは無限だしね」
ドヤ顔で腰に手を当て胸を張る少女はどこからか魚雷を取り出した
「おいちょっと待てそれで俺をどうするつもりだ?」
「何って、ザオリク(物理)だよ?」
凶器を振り下ろそうとするザオリクなど見たことがない。ザラキの間違いではないだろうか?　確かに夢の中でのザラキ(死)はあちらでのザオリク(蘇生)かもしれないが……
「まあ、ずっとここで私と暮らすのも悪くないとか思ってるんじゃない?　どうなの?　あの時ファーストキスをイッチバン可愛い私に奪われた気分は?　ドキドキしたんじゃないの?」
「めちゃくちゃイライラした」
「めちゃくちゃムラムラしちゃったか~。しょうがないね、イッチバンの私だもんね」
聞いちゃいねーや。とにかくこんなところにいつまでもいられな

い。
「でも、イッチバンのお姉ちゃんは妹達にもちゃんと優しいのです。わたしだけで独り占めしちゃ悪いよね」
お前……妹いんのかよ。できれば会いたくないな
「ああそうそう、もし私の妹にあったらよろしくね。ちょっと個性的で手が付けられないことがあることもあるかもだけど、みんな提督のどんな役にでも立ちたいと思っているし何よりみんな提督の事愛してるんだよ。だから……どうか白露型（私の妹達）をよろしくお願いします」
少女はいつもより少し真剣な声で俺に向かって頭を下げた
「白露からのお願いだよ」
そして、白露と名乗る少女は俺に向かって魚雷を投げつけた

「ん？　うーん……」
知らない天井……俺は……ええっと確か魚雷で……
「ああ、良かった。目が覚めたんだね」
目が覚めると俺はベッドに寝かされていた。恐らく医務室か何かだろう。そして黒髪の少女が俺が目を覚ましたのを見て微笑んでいた……寝ている俺にまたがる形でだが。
「目を覚まして安心したよ提督。てっきりこのまま目を覚まさないかと思って判断を早まるところだったよ」
「……俺の上にまたがってどんな判断をしようとしていたのか教えてもらおうか？」
まず状況を確認しよう、こちらも判断を早まってはいけない。もしかしたら何か大きな勘違いをしているのかもしれない。
例えば、目の前の少女が俺の上着を羽織っていたとしても、俺の顔が何かになめられたようにべたべたしていても、俺の腕に歯形がついていたとしても、俺のズボンが半分脱がされかけていたとしても、それはひょっとしたら不慮の事故ってやつかもしれない。
たとえどう考えても目の前の少女にこれから何か公にできないようなことをされようとしていたとしか考えられない状態だったとし

ても確認は大事なのである。
「何、大したことじゃないよ。ただ、あともう少し提督が目覚めるのが遅かったら僕自身が建造ドックになっているところだったよ。イヤー危なかったね」
　十二分に大したことだった。というか何で襲う側がまるで被害者みたいな言い方ができるんだこいつ……。
「まあ、いいさ。僕が気絶した君をここまで運んできたんだよ。そのお礼位するべきなんじゃないかな」
「そうだったのか、ありがとうな。よければその図々しい態度と俺の上にまたがるのをやめてもらっていいかな？」
「何を言ってるんだい？　君が悪いんだよ提督、他の提督たちより適性の高い君を艦娘である僕に此処まで運ばせるなんてとんだ生殺しだよ。路上で建造を始めなかった僕をほめてほしいくらいだよ」
「……本音は？」
「……僕だってやっぱり初めてはベッドの上がいいかなって」
　なんだこいつ……モラルがなさすぎる上にはじめから俺を助けようなんて気持ちがみじんもないじゃないか。こんな初めて会ったやつに本人の承諾もなく事を始めようとする艦娘もいるなんて世も末だなこりゃ。
「と、言うわけでさっそく続きをしようか。大丈夫だよ十連回せば一回くらいは成功するよ」
　だから大丈夫じゃないって、後それ最悪俺が死ぬじゃないか!!
「はい、赤マムシ（課金アイテム）♡」
「わー、準備いいじゃん♡……じゃねーから!!」
「ちょっと提督暴れないでよ。パンツが脱がせにくいじゃないか！」
「助けて――!!　変態に犯される!!」
「提督！　どうしましたか!?」
　俺の声を聞いた大淀が医務室に飛び込んできた。
「……何してるんですか？　時雨さん？」
　大淀は冷ややかな目で俺の服を脱がそうとする少女を睨みつける。
「いや、違うんだよ。目を覚ました提督がいきなり発情して僕を襲っ

てきたんだ。僕はただ献身的な看病をしていただけだよ」
この状況を見てそんな戯言を信じる奴などいないと思うが、こいつの事がなんとなくわかってきた。
「……時雨？」
「そう、時雨だよ。白露型２番艦時雨……これからよろしくね、提督」
白露型……ああ、あいつの妹か……
もしかしてあの白露が俺に深々と頭を下げてきたのはこの変態の面倒を見てやってくれという意味だったのだろうか。
だとしたら……あいつめ、呪ってやる。

時雨は可愛い

今日は何をするんだい？

うん、君のためなら喜んでやるよ。それが僕の幸せなんだからね

提督♡

「これで少しは反省してくれるでしょうか？」
（私は提督に発情した挙句、提督を襲おうとしたＨＥＮＴＡＩです）
廊下で正座をし、首からプラカードを下げた時雨の姿がそこにはあった。
俺に粗相をしでかした時雨は大淀により罰を受けていた。
「いやいや、さすがにこれはやりすぎじゃない？」
「何をおっしゃいますか、主従関係は大事です。この娘とこれから艦隊を指揮していくのに部下にこんなことをされているようでは提督としての威厳にかかわります」
「僕はこのままでもいいよ。むしろこのまま大衆の目にさらされ続けていれば僕は提督の物だというマーキング行為にもつながるから僕としてはＷＩＮ―ＷＩＮなんだ」
俺にＷＩＮの要素がないんだけど……。というかなんでもう俺がこいつの司令官になる前提で話が進んでいるんだろう。
「いや俺こいつのお守りをするつもりは一切ないんだけど」
「えっ!?」
時雨だけではなく大淀もだった。
「いや、なんで大淀が驚いてんだ？」
「ウ……グスッ……ひどいよ提督。僕の純潔を奪っておいて満足したら捨ててしまうなんて……。俺のペットになれと言ったのはウソだったのかい？」
泣きながらとんでもないことを言い始めた時雨
純潔を奪われたのは俺で奪ったのはお前だ。そもそもお前に純潔なんかなかったじゃないか、あるとしたらそれはこの世で最もどす黒いものだろう
「て、提督……いくら何でもペットになれはドン引きですよ……。こんな娘ですが最後まで責任もってあげてください」
そしてお前はすぐに信じるな。何？　こっちはこっちでピュアな

の？

「コーヒーです」

時雨へのお仕置きが一通り済んで満足した大淀がコーヒーを淹れてくれた。

「それで……俺どうなったの？　しらつ……大井に魚雷で殴られた記憶しか残ってないんだけど……」

なんか寝ても覚めても魚雷で殴られた気がする……いや、やめておこう思い出してはいけない。

「そのことなんですが……はっきり言ってよく生きてましたね。大井さんにやられて医務室へ運び込まれたと聞いたときはてっきり殉職されてしまったのかと……」

「殉職するならせめて敵に殺されたいんだけど……」

つーかなんだ殉職って、まだ提督にもなってないのに殉職してたまるかってんだ。

「全くもう……他の艦娘ならともかくあの北上さんにはじめっから声をかけるなんて無謀すぎますよ。それに扶桑さんにも声をかけたんですって？」

「知らなかったんだよ。扶桑さんや北上さんにあんな凶暴なお付きがいるなんて……」

そもそも何？　俺は適性値高いからいろんな艦娘と仲良くなれるんじゃなかったの？　死と仲良くなってないか？　実は死神との恋愛適性値だったんだろこれ？

「よいですか？　いくら提督の適性値が高いとはいえ女の子の大切なものにみだりに触ったりしてはいけません。他の提督たちも彼女達には暗黙のルールのようなものがあります」

「暗黙のルール？」

「はい、どうしても彼女たちに接触しなければならない場合は信頼できる高練度の艦娘を必ず護衛に付けることなどです」

あいつらは放し飼いにされた飢えた猛獣か何かなのだろうか。
「ですが――」と大淀は続ける。
「流石提督といったところでしょうか。あれほどの自殺行為をしながらあなたの事を気絶させる程度で収めたということにはやはり彼女達も無意識に手心を加えたということでしょう」
「あの方たちは、強力な航空戦艦と重雷装巡洋艦ですが、その分手綱を握る提督もかなり厳しくて……。やはり彼女達もあなたでなくてはならないみたいですね」
「おいちょっと待て、何しれっと俺の負担増やそうとしてんだよ」
勘弁してくれ、姉の方はまだしも妹の方は絶対やだぞ。
「まあまあ、そう言わないで……」
「……」
「お願いします！　あの人達航空戦艦と雷巡になってもこの士官学校から出て行こうとしないんです！　他の提督みたいに半殺しにならなかったのはあなただけなんですよ！　どうか彼女たちを説得してください！」
このメガネ……ただ厄介を俺におしつけたいだけじゃん。すると、お仕置きから帰って来た時雨が会話に入ってきた。
「大丈夫、僕もついてるからね。文字通り大船に乗ったつもりでいてよ。艦娘だけにね」
「お前は間違いなく泥船だよ」
お前がいると絶対にろくなことにならないのはわかってる。
「まあ、いいさ。とりあえず散歩に行こうよ。目が覚めてる状態の提督とも一緒に外を歩きたいな」ガチャリ
そういうなり俺に手錠をかけてきた時雨。
「おい、これはどういうつもりだ？」
「何ってこれから散歩に行くんだよ。飼い犬にはリードをつけるのは当たり前じゃないか」
だが俺は焦らない。といってもこのパターンは実は初めてじゃないからだ。これまでに何度か仲良くなった女の子に「強い絆（物理）」で結ばれたことはある。大抵しばらく家に帰してもらえないパター

ンだ。
　昔から俺は結構かわいい娘が寄ってきたりすることが多いのだが、その多くが何かしら面倒な部分を抱えていることが多かった。
「提督と艦娘は惹かれ合うものなのですよ」と大淀は言っていたが、まさかあの娘達も……いや、考えるのはやめておこう。
　とはいえ、そのおかげもあってか手錠を取るのもお手の物である。
「ああ、それ鍵穴から瞬間接着剤入れてあるからとれないよ」
　なん……だと……。やばいそれは初めてのパターンだ。
「俺を飼うつもりかこの野郎」
「何を言ってるんだい？　心外だよ提督。よく見てみなよ」
　俺は自分の腕に付けられた手錠をよく観察する。そこで気付いた、確かにおかしい。だって、その手錠の鎖は手錠というには1．5Mほどあって長すぎるし、その先端は時雨の首に付けたチョーカーにつながっているからだった。
「ってこれ文字通りリードじゃん」
「だから言ったじゃないか。艦娘である僕が提督よりも上の立場になる事なんてありえないんだよ。さぁ、わかったら散歩に行こうか。僕たちの主従関係をみんなに見てもらうんだ」
「いやちょっと待て」
　そういって歩き出そうとする時雨をリードを少し引っ張って止めた。しかしどうやら力が強すぎたのか、時雨は「ぐぇ」っと変な声を出しながら後ろに倒れこんだ。それを俺は慌ててキャッチする。
「ゴメン、大丈夫？　そこまで強く引っ張ったつもりはなかったんだけど」
　しかし、心配は無用だったようで、むしろ俺に後ろからキャッチされたことに喜びの感情があるようににも見えた
「うん、たしかに犬の散歩には主従関係を示すためにワザと犬のいく方向の逆にいくんだ。それがわかってるなんて流石だよ提督」
　いや、そんなつもりで引っ張ったんじゃないんだが……。というかこいつはどうしてこんな関係を望むのだろうか？
「なぁ、俺ら初対面だよな？出来れば俺はお前の事を普通の部下と上

司として扱いたいんだけど・・・」
そこで、時雨は少し驚いた表情をしたが俺の方に向き直った。
「・・・提督、僕を人間扱いしてくれるのは嬉しいけれどごめんね。そういう扱いにはまだ慣れてないんだ・・・本当にごめんね」
う～ん、これはひょっとしてかなりやばいかもしれない。白露さん・・・白露型の最初からハードル高すぎんよ

変態は2隻あった!!

「クソッ、全然とれねえぞ。この手錠」
「フフフ、それが僕と提督とのつながりの強さ、そして絆の強さだよ」
「あの……大丈夫ですか？」
　大淀が心配する中、時雨につながれた手錠を外すのには困難を極めていた。なんといったって鍵穴がないのである。
　この状況、傍から見れば俺が時雨をペット扱いしている変態の様に見える。しかしながら、実際の所拘束されているのは俺の方である。
　こうなったら、この手錠ごと壊すしかない。
「大淀、これを壊せるものはあるか？」
「確か道具置き場がありました。そこにいけばあります。ですが……」
「ですが？」
「ここに届けなければなりません。ですからその状態でここに隠れられますか？」
「あー」
　確かにここは医務室だから人が来るかもしれない。この状態を見られるのは非常にまずい。こんな状態がバレたら俺が二つの意味で抹殺される。
　だが外に出ればだれかと会うかもしれない。全く、これが外れたらもうお嫁にいけないようなお仕置きしてやる。……いや、それはそれでこいつは喜んで受け入れそうだから怖い
「出来るだけ急いでくれよ……」
「はい、では提督も気を付けてください」
　大淀は医務室のドアに手をかけた。
「大丈夫かい暁？」ガラガラ
「うぅ……このくらいじゃレディは泣かないんだから……」
「あれ？　大淀さん？　大淀さんも怪我したのかい？」
「いえ、ええと……あ、そう記録！　記録を取りに来たんですよ。医務室での怪我人の記録です。はい」

「ふーん、ところで今ここに他の誰かがいなかったかい？」
「え!?　いいえ、誰もいませんでしたよ！」
「それじゃあ、此処で医務室の人が来るまで待たせてもらうよ」
「え!?　それは……」
「なにか困るのかい？」
「い、いえ。そういうわけでは……あ、そうだ！」

「はい、これで大丈夫ですよ」
「大淀さん、ありがとう。私はお礼もちゃんと言えるレディなんだからね」
「いえいえ、これからは気をつけてくださいね」
「はーい」

「……ふぅ、いいですよ帰りました」
「ありがとう、大淀さん」
　危なかった。俺は誰かが来ると分かった瞬間時雨を抱き上げカーテンの閉まったベッドに逃げ込んだ。
　危うくあの無邪気で穢れを知らなそうな駆逐艦たちに教育に悪い不純なものを見せてしまうところだった。
「……提督」
　おっと、勢いで時雨ごとベッドに入り込んだせいで俺は時雨を押し倒す形になってしまっていた。
　時雨は俺の事を見つめながら顔を赤らめている。
「もう、しょうがないなぁ……」
　そういうと時雨はそっと目を閉じ唇を少しとがらせた。
　そんな時雨に頭突きをかました俺は、そっとカーテンの外にいる大淀にアイコンタクトをして医務室を出てもらった。

「いたた……ひどいじゃないか提督」
「おまえな……そもそもこうなったのはお前のせいだからな」
俺たちは大淀が戻って来るまでの間またカーテンの中に隠れていた。そこにいれば誰かが来てもカーテンが閉まっていれば誰かが使ってるように見え・・・アレ？
俺はそのとき失態を犯したのだと気づいた。
医務室のベッドのまわりにあるカーテンが閉まっていたということはそのベッドは誰かが使っていたという事であったという事、そして――――
「ほぉ、従属プレイか悪くない。まだ怪我が治っていないが、そう言うことなら仕方ない私も交ぜてもらおう。何、心配するなリードは持参済みだ」
俺の回りに集まる艦娘は変態揃いだということを忘れていたのだ

「私は若葉だ。初春型の3番艦だな。怪我をしたからドックが空くまで医務室で寝ていたんだ」
「うん、で？　お前は今まさに何をやろうとしてるんだ？」
若葉は俺の前で仰向けになり腹を見せていた。
「何をおかしな事をいっているんだ？　見ればわかるじゃないか」
「わかんねーよ。お前がバカだってこと以外はな」
「全く、自分の無知を恥じずに相手を批判するとは提督の風上にも置けんぞ」
おかしいなぁ。何で俺が悟されてるのかなぁ？
「いいか？　これは服従の姿勢だ。相手にあらゆる急所を見せることで自分が相手に服従することを行動で分かりやすく示すことができ

る。服従の姿勢の歴史は古く、古代ローマ時代からその起源はあったとされている。歴史の授業で習わなかったのか？　義務教育だぞ」
「てめぇはどこの学校で教わったんだ言ってみろ！　俺がその教師全員ビンタしてやる！」
　中学までの間の義務教育でそんな高度なプレイを教える学校などあっていいはずがない
「何？　私の恩師を愚弄する気か？　だったら私にビンタしろ！」
　何でそうなるかな？
「この娘……かなりの手練れだ」
　そんな中時雨は謎の「こいつ……出来る！」感を出していた
「そういえば、お前は誰だ？　見たところ私と同じ駆逐艦娘のようだが……」
　若葉は時雨の方を見て尋ねる。
「ああ、初めましてだったね。僕は時雨、白露型の二番艦だよ。よろしくね」
「……まあいい。では早速……」
　そういいながら紐の付いた首輪をつけ始める若葉。怪我で寝ていたようであちこちに痣や傷があるため時雨とは違う犯罪臭を醸し出している。まあ、やってることは同じだが……
「お前なんでそんなに傷だらけなんだよ？」
「何、戦艦を身を挺して守るのが駆逐艦の役目だ。しかも相手が長門型とあっては尚更私が守らなくてはみなに危険が及ぶからな」
　つまりこいつは長門型の砲撃をすべて受けていたということか。回避もせずに？
「ところで、これは何だ？　手錠か？　なぜこのようなものを？」
　う～ん、やはりそこが気になるか。
「だってこれで提督とは離れずに済むじゃないか」
　すると若葉はまるでやれやれと子供を見るかのように笑った。
「な……何がおかしいのさ」
「主人を拘束する従属が一体どこにいるんだ？」
「だってそうしないと提督が……」

「離れるから寂しいか？　まだまだ、だな焦らしや放置もまた一つの甘美な感覚だと分からないのか？」
「!!」
その時、時雨はまるで電に撃たれたような顔になり、膝から崩れ落ちる。
「負けた？　この僕が……？」
ちょうどその時、大淀が工具を持ってやってきた。
「提督、お待たせしました……どうしたのですか？」
大淀は首輪をつけて膝をつきうなだれる時雨とこちらもまた首輪をつけて勝ち誇ったような顔をする若葉を見た。
そして、鎖を切ってもらった俺はようやく得た自由の尊さを再確認した。

若葉はドックが空いたということで医務室から大淀とともに出て行ってしまった。
「……やっぱり怒ってるのかい？」
「当り前だろ」
突然、手錠をされてあんなプレイに巻き込まれたら誰だって怒る。
「ごめんね、次は手錠無しでやるからさ」
この変態……何も反省していなかった。
というか、こいつは前のめりに来すぎなのである。
時雨には鹿島教官を見習ってほしい、鹿島教官は見られたと気付けば手で隠すし注意もする。隠されているからこそそこに価値が出てくるしそれを見たいという欲が出てくるのだ。
初対面であんなことをするなんてそもそも言語道断なのである。
届きそうで届かないがやはり人間に一番キクのだろう
もしさっきの駆逐艦のような子達が来たのなら、その辺をきっちり教えてあげたい。

そこで俺は気が付く。そういえば今は駆逐艦たちは訓練中ではないのだろうか？
なぜ、こいつがここに？
「なぁ、ちょっといいか？　なんでお前がここにいるんだ？　今、駆逐艦は訓練の時間じゃないの？」
「ああ、違うよ提督。僕はもともと別の鎮守府にいたんだけど解体しちゃって……」
ああ、そうか。それでここに……
「なんか……悪いこと聞いたな」
「いいさ。それに前の提督の命令だったからね。それでも幸せだったよ」
そうか……いい鎮守府だったのかな？　俺はそんな鎮守府を作る自信はないが……
「提督の命令を聞いているときはね、幸せな気持ちになれるんだ。だからね、提督も僕になんだって命令していいんだからね」
そんなことを言う時雨は本当に屈託のない一点の濁りもない目で笑っていた。俺にはその時初めてこの時雨という艦娘を少し怖いと感じてしまった。

そういえばこいつも狼だったな・・・

俺は先日受けた心の傷を癒すべく猫のチューイのもとに来ていた。
いつもいるというわけではないが、たいてい俺が見かける時は士官学校裏のベンチで昼寝をしているのだ。
ああ、やはり猫はいい。自由で気ままで突然発情するようなことがないのが特に素晴らしい。
「待ってましたよ。噂の司令官さん！」
何処からだろう？　突然声を掛けられた。俺は周囲を見たが人の姿はない。
「こっちですよ。こっち！　木の上です」
俺はベンチに心地よい日陰を作っていた少し大きめの木の上を言われるがままに見る。
木の上にはカメラを持った女の子が太めの木の枝に座っていた。
「やっと気づいていただけましたね。士官学校の裏で猫をかわいがる噂の司令官、これは購読者が集まりそうです！」
絶対めんどくさい奴ではあるが、とりあえず聞いておく。
「誰だお前は!?」
「よくぞ聞いてくださいました！」
「私を前に秘匿できるものなし！　貴方の秘密に這いよるソロモンの狼青葉とは私の事ですよ！」
青葉と名乗る少女は木の上に仁王立ちすると高らかに叫んだ。
ピンクの髪に青い瞳、セーラ服に短パンかぁ。
というか下から見るとズボンの隙間から中身見えてるし
そんな恰好で木に登るなんて羞恥心のかけらもないのだろうか
それとも、「見せてんのよ」的なあれだろうか？
「で、お前は何やってるんだ？」パシャッ
「ええ、実は何を隠そうあなたを……今、そのスマホで何を撮りましたか？」
「お前のパンツを撮ろうとしたんだよ。ズボンはいてても下からだと隙間から見えるからな。……緑かぁ。しかも、太ももに食い込んだ

オーバーニーソもいい味出してるな、待ち受けにしよ」
「やめてください!!　お願いですから消して下さい!!」
　上から何か聞こえてくるが、俺はそれを大事に待ち受けにして聞き返した。
「だったら、そんな所にいないで降りてきたらどうだ？　お前は人としゃべるときは木の上にいろって教わったのか？」
「あっ、ええっと……、そのぉ……」
　何だろうか？　何か言いにくい事でもあるのだろうか？
「……あのぉ非常に恐縮なのですが……おろしてもらえないでしょうか……」
　俺は木を思いっきり蹴飛ばした。
「ぎゃあああああ!!　悪魔!!　鬼畜!!　鬼司令官!!　何するんですか!!??」
「何って、降ろしてほしいんだろ？」
「降ろし方ってものがあるでしょうが!!　梯子持ってきて「怖かったかいお嬢ちゃん？」みたいなことすればいいんですよ！」
　なんだその一昔前の少女漫画に出てきそうな妄想は？
「おら！　さっさと落ちろ！」
「ああっ！　今！　今落ちろって言いましたね！　覚えててください よ！　私が死んでも第二、第三の私が必ずあなたが幸せの絶頂の時にどん底に落として――――あっ」ズルッ
　青葉は木から足を滑らせそのままきれいに落ちる。残念！　少女の人生はここで終わってしまった。
「ああああああ!!　……あれ？　痛くない？」
　――――とはならなかった。俺がもうすでにキャッチする準備をしていたからだ。少女は俺にお姫様抱っこされている形になっていた。
「怖かったかいお嬢ちゃん？」
　俺は少し顔をキリっとさせてさっき青葉が言っていたセリフを復唱してやった。
「司令官…」

少女は少し顔を赤らめながら微笑むと自分の持っていたカメラの角で俺の頭を殴った。

「何すんだよ。せっかく助けてやった上にお前の妄想にまで付き合ってやったっていうのに……」
「何が「怖かったい？」ですか!!　マッチポンプもいい所じゃないですか!!」
　青葉は怒りながらもカメラの中身に欠損がないかチェックしていた。だったら殴らなければいいものを……
　俺がベンチに座ると青葉もまた「お隣失礼します」と一言断ってから座るのだった
「全く、折角あの噂の司令官と出会えた上に可愛い一面を見られたと思ったのに……」
「すまんな、俺はこういうやつだ。というかお前は木の上で何してたんだ？」
「はい、実は私、青葉は貴方の名だたる噂を耳にいたしまして、ぜひ貴方にこの噂が本当か否かを伺おうと待っていたんです」
「うん。その噂はいいとして……何で木に登る必要があったんだ？」
「あなたは大体この時間帯はこの辺りにいると聞いたので高い所から見渡したらすぐに見つかるんじゃないかと……」
　それで降りられないんじゃ、仕方ないじゃないか
「そうか。それで？　なんだその噂というのは？」
「実は最近初雪ちゃんがやる気を出して訓練に臨んでいるんですよ。今メキメキ練度を上げているみたいです。」
　へぇ、それは知らなかった。最近忙しかったから、あいつらの事全然見てやれてなかったな。
　あいつがそうやってやる気を出したということはあいつにも戦う目的が出来たということだろう。俺の鎮守府に来なくなったのは少

し残念だがまあ、あいつがそう決めたのならそれを止める権利は俺にはない。
「そのきっかけが貴方だったそうじゃないですか」
「え？俺が？」
「ええ、貴方についていくために貴方の士官学校の卒業に間に合うように毎日訓練してるみたいですよ。なんでも自分の事をちゃんと見てくれた初めての人だったとか。イヤーやっぱり自分の司令官を見つけた艦娘はより艦娘として成長していくんですねぇ。それで・・・どうやってやる気を出させたんですか？」
　青葉は前のめりになって俺に尋ねてくる。こいつは自分が知りたいと思ったことを知らないままにしてはいけないやつなんだろうか？
「俺は・・・そんなつもりなかったんだけどなぁ。ただ俺は戦う目的もないのにあいつの事を勝手に召集してここに馴染めなかったからってのけ者にされてたっていうのが少し許せなかったんだ。あいつにはあいつのしたかったことがあっただろうにさ。あいつだって少し前まで学生だったんだぜ」
　まあ、戦争とはそういうものだってわかってはいるんだけどな・・・
「ああ、そういうことですか。」
　青葉は納得したようにうなずいた。
「つまりあなたは初雪ちゃんの理解者になることで初雪ちゃんを口説いたわけですね？」
「いや、何でそうなるんだ」
　俺は別に口説いたつもりはないぞ。
「いえいえ、私も彼女の素性は大方調べたので知っています。彼女もただの学生だったのに艦娘としてこの世に生を受けたばかりにこんなことに巻き込まれたんですよね」
「あいつが自分の事をそこまでしゃべったのか？」
　あいつが自分の過去を他人にべらべらしゃべるような奴には見えなかったが・・・
「ああ、データベースに侵入して彼女の履歴を洗いざらい調べたんで

すよ。」
　やばいぞ。こいつに関わるべきじゃなかったかも。どうして艦娘はこんなのしかいないんだ！
「ああ、安心してください。警視庁のデータベースにも潜入して少しも痕跡を残したことはないので安心してください」
　何処に安心できる要素があったのだろうか？
「それに当然あなたの事も調べましたよ。かなり変わった過去をお持ちのようですが・・・。私はあなたを気に入ってしまったんですよ。」
「俺は気に入ってないから。お前も俺を気に入らないでもらえるかな？」
「いえいえ、もう遅いですよ。記者としても艦娘としても女としてもあなたに興味津々です！」
「実は私・・・夢があったんです。私昔から自分の知りたいことを知らないままにしておけなくてあまり人から気に入られる人間ではなかったのです。まあ、人の秘密を探ろうとするやつは大抵気に入られませんけどね」
　妖怪の世界でもさとり妖怪は気に入られないからな。俺は好きだけど
「それでも、私が真実を暴くことで世の中が少しだけでも平和になると信じて記者になろうと思っていたのですが・・・。私が艦娘だということがわかって・・・。」
　青葉は少しうつむいて暗い顔になった。
「ですが本当につらかったのは夢をあきらめなければならない事よりも・・・その・・・私の両親が私の事を艦娘として生んでしまったことを私に謝って来た時でしたけどね」
　それは・・・確かにそうだろう。自分の愛娘が艦娘だったせいで夢をあきらめなければならないと分かった時には自分が娘を艦娘として生んでしまったせいだと自分を責めてしまう親もいるかもしれない。
「ですから、正直私が艦娘になった時点で私は海の底で死ぬのだと思っていました。でも、貴方は初雪ちゃんの意思を尊重してくれまし

た。だから、私も貴方の下に行きたいんです！私も艦娘になった今でも夢を追いかけられればせめて私の夢を奪ってしまったと思っている両親も少しは自分を許してくれるんじゃないかと思いまして・・・」
　青葉は少し目に涙を浮かべていた。きっとこいつの両親も自分の娘の夢を応援していたのだろう。だからこそ彼女も諦められないのか。
「あ、貴方のためならなんだってしますよ。ただその・・・たまに何かを調べるために長期休暇を取ることが出来ればいいかなって・・・だめでしょうか」
「いいぞ」
　俺は二つ返事でＯＫを出した。
「ホントですか？何というか自分から頼んでおいてなんですが少し簡単に受け入れすぎでは？」
「俺もお前の夢を応援したくなっただけ、とでも言っておこうかな」
　正直、そこまで言われて断れなくなったというのもあるが・・・。
「ただし、危険なことにはあまり首を突っ込まない事。そういう時は仲間を頼れ。いいな？」
「はい！ありがとうございます！青葉、恐縮です！ではまずは・・・」
　青葉は自分のメモ用のノートを取り出した。
「司令官の不敬な噂をすべてこの場で全てうそであったと証明しましょう」
　ん？急にどうしたのだろう？
「いえ、実はあなたの事を調べて回るうちにいろんな噂を耳にしたんですよ。たとえばーーーー」
　自分メモ用紙に目を落として内容を読み始めた。
「艦娘の鹿島教官に対してセクハラを働いていたり……」
「うんうん」
「艦娘をペット扱いして首輪をつけて遊んでいたりだとか……」
「うん、違うな。それは俺じゃない」
　一体誰なんだそんな、身も蓋もないうわさを流した奴は。全く、心ない奴がいたもんだ。

「そうですよね。まさか司令官がそんなことを・・・」
「あら？　青葉さん、こんにちは」
「あっ！　鹿島さん、お散歩ですか？」
　なぜこんなタイミングで鹿島ちゃんが現れるのだろうか？
「いえ、実は提督を探してて、……あっ提督こんな所にいたんですね。お久しぶりです……ってなぜ目をそらすのですか？」
「いや何でもないんだけど？」
「もう、折角最近いろんな艦娘と積極的に接触してるというからご褒美にいつもの視姦をほんの少しの間だけ許して差し上げようかと思ったのですが……」
「え？　鹿島さん今なんて……」
「ええ、司令官さんたら私の講義中私の事ばかり見てるんですよ。特に太もものあたりを。でも最近講義を中断しているので、その……少し私も寂しいんですよ。待ってますね、提督」
「……」
「……」
「あの……」
「違うからな？」
「何も違わないじゃないですか!!　鹿島さんの事視姦してるじゃないですか。しかもあれ少し目覚めちゃってますよね!?」
　いやいや、あれはただ前を向いて講義を聞いているだけだ何もやましいことはない。よって俺は無罪だ。いいね？
「うるさーい！　そんな噂は全部嘘だから！」
「・・・本当ですか？」
　やばい、疑い始めている何とかごまかさなくては・・・。すると見覚えのあるやつが近づいてきた。
「ここにいたのか司令官と……青葉か。二人で何をしているのだ？」
「げっ、若葉・・・」
「若葉ちゃん……その首についてるものは・・・何？」
「む、これか？　これは司令官との絆なんだ私が何か不祥事をしでかせば司令官がこれを引っ張って私を躾けるんだ」

若葉は自分の首に付けた首輪を愛おしそうに顔を赤らめながら撫でる。

「見たところお取り込み中のようだな。終わったらこちらから向かおう」

それだけ言うと、若葉は去ってしまった

青葉の言の葉

「えー、今日の見出しは「噂の提督、就任前から艦娘を調教」っと」
「ちょっと待ってくれ！　誤解なんだって!!」
「はぁ、あの真面目な若葉ちゃんがあんな風に調教されてしまうなんて……」
「調教したの俺じゃないから！　もともとそういうやつだったから！」
「まあ、知ってましたけどね。最近だと、もう長門型の砲撃では物足りないとか言ってましたし。でもまさかあそこまでだったとは……。この青葉の目を以てしても見抜けませんでした。でもあの感じだとあなたもう気に入られちゃってますよね？　あの子あまり誰かを気に入るような子じゃなかったですし、あなたを自分の司令官だと認めたということなんでしょうか？」
「いやそれだけはマジで勘弁してくれ……」
そんな風に俺のことを認められても何もうれしくないだろう
あの時、時雨に首輪をつけているところを見て「よし、この人についていこう！」とか思った奴なんてお断りだ。断固！　ダメ！　絶対！
「ああ、そうだ。時雨ってやつ知ってる？」
俺にはもう一人どうにかしなければならない問題があることを思い出した。それは白露の妹である時雨の事だった。
白露から頼まれてしまっている以上どうにかしなければならないし。若葉以上に困った奴なのだ。
「時雨……いえ、すみません。私の調べたところには載っていませんね。今度調べてみます」
「ああ、そうなのか……」
そうか、それは残念だ。この情報マニアの青葉ならば何か知っているのでは？　と思ったのだが……。
「あっ！　でも他に知りたいことがあれば何でも教えますよ」
「……なぁ、ちょっといいか？　こういうこと聞いていいのかわから

ないけどさ。艦娘って何なの？」
「何なのとは？」
「俺ここに来ていろんな奴らにあって来たけどさ、何か変な特殊……いや性格はともかくとして普通の女の子と変わらないんだよな。なんかさわざわざ「艦娘」って呼称する意味はあまりないんじゃないかって思えるくらいにさ」
「そう……普通に見えますか……」
「それでは司令官に質問します。私はこの木をどうやって登ったと思いますか？」
　青葉は突然そんな関係なさそうな質問をしてきた。地面からさっき青葉が登っていたところまで４～５メートルはある。どうやって……そりゃあ、よじ登るとかだろうか。昔はよくやったものだ、木に登っては滑って落ちて泣いて帰ったのを思い出す。今ではとある道場で鍛えまくったおかげで手を使わずとも垂直な壁まで登れるようになったが。
「答えはですね……、あっ、このカメラ持っててもらえませんか？」
　青葉は俺にカメラを渡すと少し助走をつけて木の枝目掛けてジャンプした。青葉はそのまま垂直に飛びながら４～５メートルはあった枝の所を通り越しさらにその上にある枝をつかむと先ほど青葉がいた枝の所に着地した。
「どうです？」
「そ、そのくらい俺もできるし」
　俺はウソをついた。本当はその下の枝まで手が届けばいい方であとはそこからよじ登るしかない垂直とびだとこれが限界である。
「じゃあこれいつ飛べるようになりましたか？」
「いつって？」
「私は８歳の時にはこれが出来ました」
「ふ～ん。８歳かぁ……８歳!?」
　いやいや８歳といえば小学２年生か３年生くらいだろう。この高さを小学生の時には飛べてたの!?
「しかも私は当然ですがあなたみたいに鍛えていたわけではありませ

ん。ですが私にとってはこのくらいが普通だったのですよ。登ったはいいものの降りられなくて泣いていましたが……」
　それは今も変わらないのか……。あれ？
「じゃあ、お前そこから降りられるのか？」
「……あ」
　青葉……大丈夫だろうか？

「ぜっ、絶対！　絶対ちゃんとキャッチして下さいよ！　あっ！　そういうフリじゃありませんからね！」
「わかってるって。ほら、来い！」
「なんで構えてもないのに来いとか言えるんですか！」
「てゆうか艦娘は頑丈なんだろ？　どうにかなるだろ」
「艦娘でも痛いものは痛いんです！」
　全く注文の多い奴だ。俺は今回はしっかり青葉を受け止めるとそのまま地面におろして事なきを得た。
　もうこいつは高い所に登らないほうがいいのではないだろうか
「……ゴホン。まあそういうわけで私昔から異常なほどに頑丈だったわけですよ。まあ、今では垂直に3階の窓まで飛ぶこともできますから潜入捜査に使えますが……」
「ですが、こんな奴が普通の人間たちの中にいると……まあ、浮くわけですよ。当然です。ただ強いとか特別な人間だとかでは片付かない位私の存在は異常でしたから」
　青葉はカメラを少し両手で強く握りしめながら話していた。
「私の両親は普通の人間だったはずなんですがね。私と……妹の衣笠はみんなの言う普通じゃなかったんですよ」
「あなたは普通といいましたが……それは違います。私達は謎の多いアンノウンですよ。なぜか現れた深海棲艦に対抗しうる謎の力を持った娘達なのですから」
「ここに来ていろんな人たちに聞きましたが、皆努力してたんです。普通に見えるように、普通の女の子に見えるように。自分の本来の力

を隠して、まるでどこぞの妖怪人間みたいに」
「皮肉なものですよ。私がテレビのニュースで見ていた外国に宇宙人が攻めてきてそれをヒーローがやっつけたり、超能力のような怪奇現象があったり、そういう謎の魅力に少なからずとも引き込まれて真相を解き明かすような仕事を目指そうとしていたのにまさか自分がそちら側の人間だったなんて……」
「知ってますか？　そういう人たちの中にも艦娘って見つかってるんですよ。私達はそういう存在なんです。自分が何者かなんて私が真っ先に聞きたいですよ」
「おっと、話がそれてしまいましたね。……ごめんなさい」
　青葉は俺に視線を向けることなく謝った。どこか少しおびえているようだった。
「……そうですねぇ。今のところ分かっていることといえば現代の兵器は深海棲艦にはほとんど効かないということですかね。衛星での監視は可能ですが赤いもやがかかって観測が難しいんだとか。あと、様々な超能力者やヒーローなんかでも傷一つ与えられていません。有効なのは私達艦娘の艤装だけです」
　それは鹿島先生から聞いた。艦娘が見つからなかったらもう海には出られずに人類は内陸の方に避難せざるを得なかったらしい。
「つまり、うまい魚が食えているのはお前達艦娘のおかげということか、いやマジありがてぇ」
「いえいえ、それは私ではなく今現在戦っている艦娘達に言ってあげてください。……魚好きなんですか？」
「まあな。肉より魚派を自称するくらいにはな。なんでそんなことを聞くんだ？」
「ああ、いえ何でもないです」
　なんかはぐらかされた。まあいいや話の続きを聞こう。
「それで、他にはあるのか？」
「そうですね……ああ、こんなのはどうです？　最初に発見された艦娘の話です」
　最初に発見された艦娘？　何か特別なのだろうか？

「実はですね。最初に発見された艦娘は海に浮いていたんですよ」
は？　海に？　なぜ？
「なぜかはわかりません。自分が何だったのかという記憶もなかったそうです。彼女と最初の提督が今の深海棲艦に対抗するシステムを作ったそうなんです」
「今その艦娘はどうしてるの？」
「うーん、それもよくわかってないんですよ。データが何処にも残ってないんです」
「ふーん、そっかぁ」
まあでも今の俺にそんな昔の偉人の話をされたところでしょうがない。
「それでは、司令官がもっと興味のありそうな話をしましょう」
「興味のありそうな話？」
青葉は手帳をバラバラとめくり始めた。
「はい、球磨型の雷巡姉妹の話です」
「いや、もうしばらくあいつらには会いたくないんだけど」
「何をおっしゃいますか。聞きましたよ、もう北上さんはあなたの所に行くために卒業試験に精を出してるそうじゃないですか」
いやまあ、北上はとっつきにくい所はあるが悪い奴ではないことは確かだ。誰にでも平等に同じ距離感で付き合う彼女は場合によっては男を勘違いさせてしまう魔性さえも兼ね備えているといえよう。
だが問題なのはもう一人の方である。
「というわけでさっそく取材に向かいましょう」
青葉はこれから行く目的地であろう場所を指さしながら元気よく立ち上がった。
「いざ、軽巡の訓練施設へ!!」

これより合同訓練を開始する!!

「なぁ青葉さんや」
「何でしょうか？　司令官」
「お前うちに来て暇みていろんなところに取材に行きたいって言ってたよな？　具体的にどんなところに行きたいんだ？」
「そうですねぇ、軍事関係者になった以上私の身分ではありえない人の所に取材に行ったり……ＵＦＯを激写したり、幽霊をこのカメラで成敗したりしたいですね。他にも未知の生命体とか裏で危険なウイルスを研究してる会社の裏を集めたり……」
　う～ん、このパパラッチ脳め。そんな簡単に見つかるわけないだろうそんなの。俺だって色々やって来たけどそこまでの物には出合わなかったぞ。
　ここで俺は、謎の技術を持った所在不明の潜水艦娘や死にかけた時にしか出てこない駆逐艦娘の事を棚に上げていた。
「ですが、やってみなきゃスタート出来ないですし、やろうと思わなければそもそもスタートラインにも立てないのです。よいですか？　何事も挑戦なのです」
「そのためなら公共の機密データもハッキングすると？　人々を守る艦娘が？」
「夢の実現のためなら多少の犯罪なんて誤差ですよ誤差。それに……」
「それに？」
「バレなきゃ犯罪じゃないんですよ。司令官」
「はい、今のセリフ録音したからな」
　いつかボロを出すんじゃないかとずっとスマホで録音していたのだがまさかこんなに簡単にボロを出すとは。
「あ、ちょっと待って。本当に勘弁してください」
　青葉は俺からスマホを取り上げようとするが俺がスマホを持ったまま手を上げれば青葉は俺のスマホに手が届かない。それでもスマホを取ろうとぴょんぴょん飛んでいた。

「あっそれをダシに使って私に乱暴するつもりでしょう？　エロ同人みたいに！」
「私はそんな安い女ではありませんよ！　若葉ちゃんみたいに簡単にこのソロモンの狼に首輪をつけられると思わない事ですね」
　正直な話をすれば通信機器において青葉には全く敵わないと思われるためこんなの後ですぐに消されてしまうだろう。
　まあ、別に何かしようとしていたわけではないが。

「というわけでやってきました。訓練施設です」
　青葉とそんな話をしているうちに目的地に着いたようだ。
　ここは軽巡専用の訓練施設。駆逐艦の施設と比べると少し小さくはあるが、駆逐艦は数が多いため、まるで学校の様にすべての艦が同じように訓練する施設が多いが、設備の充実性ということで言えば軽巡の訓練施設の方が充実しているのだ。
　そして何より彼女達、軽巡は水雷戦隊を編成されたときに駆逐艦数隻に指示を出しながら戦わなければならない。
「なぁ、青葉」
「はい？　なんでしょう」
「ここでの訓練って見学していいの？」
「もちろんＯＫですよ。気になりますか？」
　気にならないわけではない。だが一つだけ疑問があったのだ。
　さっきも言ったが軽巡洋艦の艦娘達は駆逐艦達を統率しなければならない。
　つまりあの一人相手にするだけでも手に余るような駆逐艦たちを数隻分統率しなければならないのである。
　時には引きこもりで、時には我が強くて、時には自分の性癖を押し付けるような駆逐艦達をだ。
　俺には絶対にできない。いったいどうやってるんだろう？

俺と青葉は軽巡の訓練施設の見学スポットにやってきた。
見学スポットは2階にあり大きな窓がついている。そこから大きなプールの様になっている訓練場を見下ろすことができるようになっている。
俺たちは窓のすぐそばには座るところも用意されており、俺はそこで自販機に飲み物を買いに行った青葉を待っていた。
「司令官。飲み物買ってきましたよ」
「おお、ありがとな」
「お茶とコーヒーを買ってきましたが、どちらがいいですか？」
「コーヒーだな」
即答した俺に青葉はコーヒーを手渡す。
「なぁ、これ危なくないの？　流れ弾とか飛んで来たらやばくない？」
「大丈夫ですよ。防弾ガラスですから長門型の砲弾でも防げますよ」
そっかぁ、なら安心だな。
「あの、すみません」
俺と青葉が軽巡の訓練が始まるまで待っていると声を掛けられた。
「あなたが噂の提督さんですか？」
「ええ、そうです。彼こそ噂の提督さんです」
答えたのは青葉。
「何でお前が答えてるんだよ」
「私は長良型軽巡の由良と申します。お会いできて光栄です」
いつからかお会いできて光栄とか言われるほどの人間になっていたのか俺は。本来はまだ提督にすらなっていないのだが……。
この由良という軽巡艦娘……背は高校生くらいだろうか？　かなり落ち着いた印象を受ける。
だが、早とちりしてはいけない、艦娘はヤバいということをここでイヤというほど見てきた俺は第一印象では判断したりしない。
後からになって本性を見せてくるタイプかもしれない。気を付けなければ……
しかし、何より俺の目を引いたのは腰よりも下まで続いている恐ろ

しいほどにサラサラした真っ白な髪。その長い髪をきれいにまとめているのもまた特徴的だった。
これ私生活に影響出るんじゃないか？　座るときなんか地面に髪がつくぞこれ。
俺は由良に隣に座るよう勧めると失礼しますといいながら俺の隣に座った。
うん、とても礼儀正しい娘だ。
肝心の髪はというと地面から僅か３ｃｍ～６ｃｍの所、つまりスレスレの所で毛先が地面に着かずに済んでいるのだ。
これを計算して手入れしているのならすごいなぁとか思ったが、由良は左手で絡めるように髪を正面に持ってくると膝の上に乗せた。
……まぁ、そうなるな。
「ええっと、何か用かな？」
「はい、実は先ほど大淀さんがあなたをお見かけしたようでして、提督さんの事を案内して差し上げるように言われてきました」
ああ、そういえば大淀も軽巡の枠に入るんだったな。だったらお前が案内すればいいだろうとか思ったが、よくよく考えてみたらあいつは少し役割が特殊だったことを思い出し、忙しいんだろうなぁということで自己解決した。
「それにしても良い時に見学に来られましたね」
「良い時？　何かするの？」
「はい、今日は駆逐艦娘を交えた合同訓練の日なんです」

しばらくするとぞろぞろと駆逐艦娘が集まってきた。中には叢雲の姿もあり駆逐艦娘の中でも特に模範になろうとしていることが窺えた。
その場にはあの初雪もいた。
「一人の軽巡が何人かの駆逐艦をまとめて指導するわけなのですが、合同訓練のたびに代わるんですよ」
軽巡たちが今回担当する駆逐艦娘達を呼んでいく。自分が担当す

る駆逐艦娘は昨日あらかじめ軽巡達が話し合って決めたものらしい。その班分けのようなものが張り出されようとしていた。
　しかし様子がおかしい、その紙が張り出される前なのにまるで駆逐艦娘達は神に祈るかのような。まるで何かにおびえているかのような姿があった。
「なんか駆逐艦達の様子が完全におかしいんだけど……」
「ああ、きっと神通さんですね。彼女の訓練はこの世に生まれてきたことを後悔するほどと聞いています。彼女の訓練は駆逐艦娘にとって何としてでも回避したいものでしょう」
　青葉が代わりに答えた。
「うーん、彼女の訓練は見たことがないのですが普段はとても温厚で優しい人のはずなんです……。そんな厳しい訓練をする方には見えないんですが……」
「いえいえ、青葉の情報によれば彼女の訓練を受けた後に戦場に出た艦娘達は「戦場が天国に感じられた」と口々に言いますよ」
　そして、紙が張り出され今日の班分けが発表された。
　そしてその瞬間、何人かが入り口に向かって全速力で走りだした。それを神通と思われる艦娘が追いかける。恐らく恒例行事なのだろうか、ものすごく手際よく駆逐艦娘達をとらえていく。
　しかし最後まで残って攻防を続けている艦娘がいた。
「って、あれ初雪じゃん」
　初雪は普段のおっとりとした性格からは想像できないほどの俊敏な動きで神通の攻撃をかわしながら入り口に向かって走っていく。
　……が、あえなく御用となった。
　引きずられていく初雪は何かを叫んでいるようだった。
　神通の班であったのにもかかわらず逃げなかった猛者もいたようだ。
　ひとりは叢雲。
　平然とした顔で神通の指示を待っていた。……いや、よく見ると顔は青ざめているし、小刻みに膝が震えている。今にも泣きだしそうだ。

若葉も呼ばれたようだ。
若葉は平然と神通のもとに歩いてゆく。……心なしか嬉しそうだ。
他の艦娘達は安心したようで改めて自分の名前を確認しだした。
おそらく最初から皆神通の欄しか見ていなかったのだろう。まずそこに名前がないことを確認するのが先だったようだ。
こうして、軽巡と駆逐艦達の合同訓練が始まったのであった。
うん、あの駆逐艦娘達を統率できる理由はなんとなくわかった気がする。

訓練中だけどゆらゆらしてきた

俺は担当の軽巡が発表されてから訓練が開始されるまでの間、青葉に新しい飲み物を自動販売機で買いつつ大井についての情報を求めた。

「大井さんの情報なのですがなぜかどこのデータベースからも彼女の存在が見つからなかったんですよ、北上さんも同様ですがね。なんだかワクワクしません？」

あー、そうか彼女たちはちょっと前まで例の宇宙機密組織に属していたからそれ以前のそいつに関わる情報がすべて抹消されてるんだな。

それが逆に青葉の興味をひいてしまったのか。なんという皮肉。

「あー、今青葉の事バカにしましたね！」

「してないよ」

「いいえ、そんな目をしていました！　いいですか？　私の実力はこんなもんじゃないですよ、例えば……ほら！　さっきの由良のデータです！」

青葉は俺にスマホを突き出してきた。そこに書いてあったのは由良の艦としての性能だけでなく出身や家族構成などの個人情報まで調べ上げられていた。

こいつは一回痛い目見せた方がいいんじゃないかと本気で思えてきた。

「なぁ、俺の事もこのくらい調べたのか？」

「いえいえ、そんなわけないじゃないですか」

「そうだよな、そんなわけないよな」

「そうですね。たとえば……白藤　一美さんとかぐらいでしょうか？」

「は？　誰だよそれ？」

全く心当たりがない。俺の親戚の名前……じゃないな。友人の名前でもないし恩師の名前でもない……いったいだれだ？

「この方は提督のお母さまが提督をご出産なさった時に担当された産

婦人科医の名前です」
「気持ち悪いわ!!」
　え？　何？　マジでドン引きなんだけど？
「私の司令官になるお方の事ですから他の艦娘程度の調べ方じゃ私の気が収まらなかったんですよ」
　なんだかだんだん青葉の目から光が無くなってくる。
「えへへ、こんなもんじゃ足りません……もっと司令官の事……もっと知りたいです」
　う～ん、どうしてこんな奴ばかりが俺の周りに集まってくるんだろう？

　俺と青葉が由良の所に戻るともうすでに訓練が始まっており、それぞれの軽巡達が自分の担当の駆逐艦達に対し各々の訓練を行っていた。

「それではこれより輸送訓練を始めます。私の指示通りに航行してください。……ってそんなところで止まってないで私の指示に従ってください!!」
「いや……阿武隈さん。これ……輸送で一人が運べる量じゃ……ないのでは？」
「もう、冗談言わないでください。私はその１０倍を運んでるんですよ」
「は？」
「では、そのまま回避行動を交えながら、航行しまーす」
「ああ、ちょっと……待って……」

「対潜哨戒の仕方はこれでわかったわね」
「質問よろしいでしょうか？」
「何？」
「五十鈴さんはソナーもないのにどうやって潜水艦の位置を見分けてるんですか？」
「はぁ？　そんなの慣れよ、慣れ。ずっとやってれば陸を歩いてる時でも地面の下で何かが動いてるのかがわかるわ。あっ、それができるようになるまで帰すつもりないから、そのつもりでいてね」
（（（この人ヤバい人だ！））））

「俺の名は天龍だ。フフフ、怖いか？」
「わー、こわーい」
「俺の訓練は厳しいぜ、ついてこれるか？」
「大丈夫よ。天龍ちゃんなんだかんだ優しいから」
「……おい龍田、何やってんだ？」
「フフフ、天龍ちゃんが心配で見に来ちゃった」
「お前は早くお前の担当の所行けよ！」
「ハーイ」

個人差はあれど決して楽なものなどではない。それぞれが団結しその生存性を高めるために血反吐を吐くような訓練を行っているのだ。
だが、その駆逐艦達の誰もが同じことを思っていた。

(((((((((((神通(あそこ)さんよりはましだ!!!)))))))))))

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ」

「た、助け、助けて……!!」

「わ、私はもうダメだ……。叢雲、お前だけでも生き残るんだ」

「む、無理よ！　貴方達を置いてなんて……」

「き、来た!!　神通さん来た!!」

「死んだフリ！　死んだフリだ!!」プカー

「す……すごい！　完璧なドザエモンだ！　これなら神通さんも……」

「……一ついいことを教えておきます。ありがたいことに我々艦娘は死んでもドザエモンにはなりません。そもそも、艦娘にはそんな概念はありませんからね。では、どうなるのか？　教えてあげましょう」

「「「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」」」

なんだか恐ろしい現場を見てしまった気がする。これが軽巡神通の訓練……恐ろしすぎる。

決してほかの軽巡達が甘いわけではない、それでも彼女たちの所は何というか……地獄そのものという感じだった。

なんだろう……人がどのくらいやれば死んでしまうのかというものを熟知したうえでそのギリギリを攻めているような感じがする。

「いやはや、あれがあの神通さんの訓練ですか。この青葉も初めて目にしましたが正直自分が重巡洋艦であったことを少し感謝しました……」
　あの青葉ですらそんなことを言っていた。
「ところで由良さんは軽巡なのに訓練でなくていいの？」
「私は今日はお休みさせていただきました。今日は北上さんが久々に訓練に参加する日なんです」
　すると、訓練施設の方から歓声が上がったのが聞こえた。
「ほら、あそこに北上さんがいますよ」
　由良が指さす方を見ると北上が訓練を行っており、北上は個人だけで訓練を行っているようでその周りには人だかりができていた。
　後ろにいる者たちは北上の動きを見るためにぴょんぴょん飛んでいる者もいたが俺たちは特等席にいるためその鮮やかな動きがここからではよく見える。
「久々に北上さんの訓練を見ましたがやっぱりすごいですね。北上さんが訓練に参加されることは少ないので」
「ふーん、でもそんなことしてたら大井が何か言ってこないか？」
「大井さん？　大井さんは優しい方ですよ、私がここに来たばかりの頃も色々と気にかけてくださいました。まあ、北上さんの事になると少し目つきが変わってしまいますが……」
　ああ、由良さんや申し訳ないがそれはきっと人違いだ。大井は凶暴な肉食獣だ。いいね？
「そうか？　由良さんの方が優しそうだし、おしとやかで器量もよさそうじゃん」
「え!?　突然そんな……」
　事実を言ったまでである。由良さんならば大井の様に突然後ろから魚雷で殴ったりはしないだろう。
「それに俺の心の支えになってくれそうだし」
　内の鎮守府に来ることが確定しているのはあのモンスターたちばかりである。そんな中に由良さんという存在がいるだけで俺の心の平穏はかなり保たれるだろう。

だからこれも事実を言ったまでである。
「提督さん……そんなに由良の事を必要としてくれているんですね。……由良すごく嬉しいです。あの、どうか貴方のそばにいさせてください。由良を……どうか貴方のお役に立たせてください」
あれ？　なんか思ったのと違うな。なんだかこれでは俺が由良をうちに引き込んだみたいな感じになっているではないか。
「なるほど！　司令官は沢山の艦娘に同じセリフを吐いて艦娘達を自分のものにしてきたんですね？　青葉には言ってくれなかったのに……」
青葉から心無い言葉が飛んでくる。　おいおい、心外だな。他の奴らは勝手に入れろと言ってきただけだ。
もう流石にこれ以上面倒を増やしたくはない。これどうせあれだろ？　この由良って娘もなんかヤバい部分があるんだろ？　俺は詳しいんだ。
由良を傷つけないようにスカウトする気はないとの旨を伝えれば……。
「あの……提督さん。もし由良がお役に立てたら……提督さんがよろしかったらでいいのですが由良のわがままを聞いていただけませんか？」
「ん？　なんだい？」
俺がそのことを伝えようとしたとき由良が俺にわがままを言ってきた。これはまさか……
「たまに……たまにでいいんですが……その……由良とお出かけしていただけませんか？」
「……」
「あっ、すみません。ダメですよね、人々を守らないといけない艦娘がそんなことに現を抜かすなんて……忘れてください」
うん、やっぱり前言撤回。ようこそわが艦隊に。

忘年会シーズンだから忘れちゃおうね

「あ、由良じゃん何やってんの？」
　すると俺と青葉と由良の元へ北上がやってくる。
「あ、北上さん聞いてください私この提督さんの所にお世話になろうと思って……」
　由良と北上は随分と仲が良いみたいだ。由良は俺の事を紹介したいようだが……
「ふーん、そうなんだ。よろしくね」
「え？　よろしく？」
「あたしもこの提督の所に行こうと思ってたんだ」

「まさかあの北上さんもこの提督のもとに行こうとしてたなんて……」
「うん、まー色々あってね」
「ところでさ、提督はなんでこんなところにいるの？　まさか、見学ってわけじゃないよね？」
「はい！　実はこの青葉がこの司令官の所にあの北上さんが着任予定とのうわさを聞きつけてやってきたわけですよ」
「ゲッ！　青葉じゃんこんなの連れてこないでよ」
　青葉……お前は一体何をしたんだ？　ここまで嫌われるなんてただ事じゃないぞ。
「まあまあ、北上さん。実は司令官が大井さんの事について知りたいっていうんですよ」
　は？　こいつ何勝手なこと言ってんだ？
「まさか、提督が大井っちのことを考えてくれてるなんて思わなかったよ。もしかして由良に続いて大井っちの事も口説こうと……」

「そんなワケないだろ。出会い頭に俺の頭殴ったやつだぞ」
　出来ればもう会いたくないやつだ。
「大井はここには？」
「いないよ」
　よかった、また俺と一緒の所を見られたら、また医務室で目を覚ます羽目になる。そう何度も白露にお世話になりたいわけではないのだ。いやあいつは行けば行くほど喜びそうだが……。
「ですが仲間との協調性は大事ですよ。北上さんが来るのであれば大井さんも付いてくると思います。ですが、お互いにいがみ合ったままで口も利けないままでは艦隊指揮にも影響が出ます。だからどうか、大井さんともせめて口を利けるくらいの仲になってくださいよ」
「本音は？」
「大井さんが男に落とされてメスの顔になるとこカメラで激写したいです」
　青葉は屈託のない純粋な笑顔でそう言ってのけた。ふむ、素直でよろしい。
「北上さん。やっておしまいなさい」
「りょうか～い」
「え!?　ちょっと!!」
　北上は関節をキメると素早く青葉を取り押さえた。
「イダダダダダ!!」
「ほら、これに懲りたら変なこと言わないことだな」
「わかりました！　わかりました！　分かりましたから放してください！」
「あー、北上？　反省しているようだしそろそろ放しても……」
「は？　青葉が反省なんてするワケないじゃん」
「え？」
「ダメだよ提督。こういう時はきちんとわからせないとだめなんだよ。特に青葉だからさ。大井っちの事、二度とそんな風に言えないようにしなきゃね」
　体のあらゆるところから大小さまざまな魚雷を取り出した。

一見何も持っていない無防備な状態に見えたのだが、長袖の裾や襟それにスカートの中から魚雷が出てくる出てくる。

北上さんもしかしてメッチャ怒ってる？

「え？　ちょっと待って？　北上さん、その魚雷で何をするつもり？」

そしてその魚雷を青葉の穴という穴に詰め込んでいった。しかも、真顔で

「北上さん？」

「えい」

「あああああ!!!」

「北上さん!?」

「えいえい」

「嗚゛呼゛嗚゛呼゛嗚゛呼゛ぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

「北上さん!!??」

「えいえいえいえいえいえいえいえいえいえい」

「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛アアアアアアアアアアアア!!!!!!」

「」ピクピクピクピク

青葉はもう動かない。

黒ひげ危機一髪やろうぜ、お前タルな。の状態である。

「あの……北上さんいやあのさ」

「ん？　何？」

「いや、何でもないです」

うん、これはあれだね。大井ほどではないけどこいつも相当だったんだな。しかも、静かに怒る感じかぁ……。

うん、北上を怒らせるのはやめよう。

「でもさ～、ほんとにいいの？」

「ん？　何が？」
「提督はやろうと思えば私達の意見なんか無視して私だけってことも実は出来るんだよ～？　でも提督は大井っちの事もなんだかんだ言いながら連れて行ってくれるみたいだからさ～」
　へぇ、こっちの一存でそんなこともできるのか。やっぱり提督の方が立場的には上なんだな。
　まぁ、俺は別に大井には厳しい上下関係を求めているわけではないし、ましてや好意を寄せてほしいわけではない。俺が鎮守府内でも後ろに気を付けないといけないような状況を作らないでいてくれればそれでいい。
「いや気にするなよ。俺だって怒ってないわけじゃないけれどずっといがみ合ってたいわけじゃないからな。それに、そんなことのせいで自分の姉妹と離れたくないだろ？」
「……うん」
　まあ、やっぱりこれだよな。国からの命令で無理矢理戦わせられる立場になったこいつらに更に提督という立場から姉妹を引き裂かれたくはないだろう。うちの鎮守府にそういうのは無用なのだ。
　でもこいつらはここに来る前から宇宙機密機関で日夜宇宙人たちと戦ってきたんだろうから、まあ少しは慣れてるのか？
「まぁ、私達、別に血がつながってるわけじゃないんだよね～。でもやっぱり私達ずっと前から親友だったからさ、離れ離れになりたくはなかったんだ。……その……ありがとね、気を使ってくれて」
「いいってことよ」

「ってゆうかホントの姉妹じゃなかったの？　姉妹艦なのに？」
「そりゃそうだよ。まあ、そうゆう人もいたみたいだけどさ」
　俺と北上と由良は控室にやってきた。ここにはお茶菓子もあり座るや否やさっそく北上がおせんべいを一枚食べていた。
　由良は俺たちにお茶を淹れてくれていた。

「青葉さんと衣笠さんは本物の姉妹みたいでしたよ。それに、もし全員が本物の血のつながった姉妹だったら駆逐艦の子達なんか大家族じゃないですか」
　確かにその通りだ、たった一組の家族で１０人近く子供作ってるなんて……無理だな。当の本人はまだ気絶したまま放置されている。
「ですが不思議なのはどっちにしろ姉妹艦達は近くにいるってことなんですよね。昔からの親友だったりご近所だったりで絶対にどこかで知り合ってるんですよ」
　それはなんていうかやはり艦娘の運命なのかもしれないな。艦娘になるものは初めからそういう風に計算されて産まれてきたということなのだろうか。
　あれ？　じゃあ提督である俺は？　確かにそういうやつは何人かいた気がするが……。
「大井とはどこで知り合ったんだ？」
「大井っちとはね、いつから一緒にいたのかはよくわかんないんだ。卒アルとか見たらわかるんだろうけどさ。でも、やっぱり私達って普通の人たちからすれば浮いちゃうんだ。だからさそういう人が二人もいれば自然と一緒にされちゃうんだよ。あたしは何言われてようが特に気にしなかったんだけどさ。大井っちは結構そういうの気にしちゃうタイプなんだよ、だから何かと私に突っかかってきてたんだ」
　北上は頬杖を突きながらお茶をすする。なんだか年相応には見えないような年季の入ったしぐさだった
「ねぇ、今失礼なこと考えなかった？」
　おっと、心まで読めるとは……
「それでもね、不思議といやじゃなかったんだよ。初めて同じ境遇の子に出会ったからかな？　わかんないけどさ」
　そして、またお茶を飲む北上。そしてまたお茶菓子に手を伸ばした
　それで、一緒になったのかこの二人は……
「でもね、もっと不思議なのは提督だよ」
　頬杖をついていた北上は椅子に座りなおして俺の顔を見てきた。

「何だよ急に」
「だってさ、こんな話は他の人にはしないんだよ。でもね、あったばかりだったのにまるでずっと前からっ知ってた人みたいに簡単に心を許しちゃうんだ」
「あっ、それ分かります。初めて出会った人なのに私もこの人と一緒にいたいって感じました」
　由良は青葉の看病をしながら答える。由良はやさしいなぁ、もしここで青葉が由良の事をほとんど知らないことはないくらい調べつくしてる事を知ったらどうなるのだろうという考えが浮かんだがすぐにやめた。
「それでね、私考えたんだ。提督ってさ私達の事を自然と受け入れてくれる人なんじゃないかなって、私達艦娘は人とは違うように生まれてきてしまってるのかもしれないけれどでも人と離れたいわけじゃないんだ」
「そのための提督だと？」
「うん、私達の事を自然と受け入れられる提督とは、離れたくない、繋がっていたいっていうのが、艦娘なのかなって思うんだよね。特に適性の高いきみとはね。だから大丈夫、大井っちともきっとうまくやっていけるよ」
　そういうと、お茶を注ぎながら今度はチョコレートに手を伸ばしていた。
　そういえばもう一つ気になることがあった。
「でも何があって大井と一緒に機密組織に入ったの？」
「提督～そういう話しないでよ。一応みんなには黙ってるんだからさ」
「機密組織!?」
　俺の機密組織という言葉に反応して瞬時に復活した青葉が突っかかってくる。こいつ……気絶したんじゃなかったのか？
「今、機密組織に北上さんが所属してたって話しましたよね!?」
　パパラッチ脳の青葉としてはそういうのにとても敏感なのだろう
　そう考えれば北上が青葉をあそこまで嫌っていた理由がわかる。

「何処ですか!?　八咫烏？　ＳＣＰ財団？　それとも……」
　こうなったら満足する答えが出るまで青葉は止まらないだろう。
北上は大きくため息をついて胸ポケットからサングラスを取り出す。
「はい、提督の分」
「ありがと……その、ごめんね」
「も～今度から気を付けてね」
　そして、別のポケットから別の装置を取り出して作動させる。
　ピカッ!!

「そうそう青葉さ、私達にスイーツ奢ってくれるって約束したよね？」

叢雲の努力

艦娘達といえば戦闘だけが仕事というわけではない、自分のコンディションとともに艤装の整備をしたりまた、

なぜか提督も艦隊指揮だけでなく艤装の整備のこと、しかもすべての艦種の艤装まで習わされるのは少し疑問だが、まあ必要なことなのだろう

艦娘の艤装というのは基本的に皆同じではあるものの自分の型などで艤装が変わってきたりもする。

更に、訓練の中で自分の癖に合わせて艤装を調整していくのもまた彼女達がここにいる間にやっておかなければならない事の一つであった。

まあ、さらに精密に彼女たちの癖を分析しデータ化してからさらに細かい調整を入れていく役職にある艦娘もいるようだ。

整備が終われば後は帰路に就き夕食までの時間を自由に過ごすこととなる。

「はーい、みんなお疲れ～」

「うむ、お疲れさまだ」

艦娘達は今日も訓練を終えそれぞれの部屋に帰っていく。

特に駆逐艦娘達は今日の合同訓練により意気消沈していた。なんというかゾンビの群れとでもいうべきだろうか？

「……寝る」

あの初雪ですら、最近は真面目に訓練に出ているため夜に寝るという規則正しい習慣に戻りつつあり、夜に電気の点いていない彼女のプライベートスペースをむしろ不気味がる艦娘も出てきたようだ

それ以外の艦娘は、ほとんどの娘達が夕食までの間、ガールズトークに花を咲かせているのであった。

そのほとんどは、今日も香取姉妹が戦闘中にもかかわらず女子力を振りまいていたとか軽巡の先輩がお菓子くれたとかそんな話ばかりで中には、弾幕が足りないだとか今度こそあのニヤケ顔に喰らわしてやりたいだとか物騒な言葉も聞こえてくるが、それは艦娘あるあるの

ようなものでただでさえ好戦的なものの多い艦娘が本当に戦場に出るのであればなおさらそういった言葉が聞こえてくるだろう。
中にはどう見てもおっとりとしていてそういったことに無縁な娘でも物騒なことを言って周囲を驚かす時もあるようだ。
だがそんなガールズトークの中にもいわゆるタブーの領域があった。
それは、お互いの身の上話である。
艦娘の中にはもうすでに自身の家族が亡くなっている娘やそうでないもの、またあまり表には出られないような仕事をやっていた者たちもいるためそのあたりはあまり会話には出さないのである。
とはいっても、しばらく一緒に寝食を共に生活していればなんとなくわかってきたりもする、例えばどう見ても戦いの世界にいるのが初めてではないものだったりとか。
しかしながら、彼女たちの中にはまるでその出所がわからない者もいた。例えば北上達とかだがそれよりも何というか艦娘としての仕事に異様に執着を持つものがいた。
「叢雲はどーするの？　これからみんなで集まろうって思うんだけど」
「私はやることがあるわ。先に行ってて」
吹雪型駆逐艦叢雲、彼女は秘書艦としての仕事のためにこの寮の寮長を務めていたのだ。

叢雲の主な仕事は艦娘の要望や苦情を受け付けたりと結構忙しい。
「ねぇ、叢雲。隣の部屋がうるさいんだけど、どうにかしてくんない？」
「ああ、川内さんの部屋ね。神通さんに言っておくわ」
「ねぇ、叢雲さん。長門さんが駆逐艦に交ざって枕投げして壁に穴が……」
「業者に連絡しておくわ。それから長門さんは謹慎処分ね」

そして何より大変なのが……
「消灯後ね。さて……見回りの時間ね」
夜の見回りであった。
毎度の事ながら夜にうるさくなるものや夜に寝ないものを注意して回ったりするためより時間がかかる。
そして一番大変な理由というのが……
「……」ガタガタ
「あら、叢雲さん見回りですか？」
「ひぃぃぃぃ!!!」
「だ、大丈夫ですか!?」
「あ、ああ、いえ、大丈夫よ、心配しないで。というかあなた何してるのよ!? 消灯時間よ！」
「いえ、お手洗いに……」
「ああ、そういうことね。ま、まあ、夜は危ないから気を付けなさい」
実は叢雲は夜が苦手なのだった。
もしこんなことが司令官にバレれば示しがつかないため夜を克服するべく夜に一人で歩く練習もかねて見回りを行っているのだ。
始まった当初は夜中にトイレに行くのすら怖がっていた叢雲だったが、最近ようやく他の階まで行けるようになった。だが――
「うう、なんで今日は初雪まで寝てるのよ。川内さんまで……いつもは注意しても起きてるのに……」
それは、夜中に起きている者たちがいたおかげであった。今日は合同訓練があったため皆、寝静まってしまっていた。
そのためいつもなら少なからず感じる人の気配すら今夜はないのであった。
「お化けなんていない、お化けなんていない、お化けなんていない、お化けなんていない、お化けなんていない、お化けなんていない、オバケナンテイナイ、オバケナンテイナイ、オバケナンテイナイ、オバケナンテイナイ……」

夜中の廊下を独りライトで照らしながらいつもよりも時間を掛けて一周を終えた。

マア、ワタシニカカレバコンナモノヨネ。イジョウナシ
モシモシ？　ソコノカタ、ヨウムチャンミナカッタカシラ？
イエ、ミマセンデシタ。
アラ、ソウ。オナカスイタノニドコニイッチャッタノカシラ。

「うん、異常なしね」
「あら？　先ほどどなたかいらっしゃいませんでしたか？」
「ああ、神通さん。いいえ誰もいなかったわ」
「そうですか。それはそうと、今日もお疲れ様です。大変ではありませんか？」
　叢雲の労をねぎらうのは神通さんだった。あの訓練の後も仕事のある叢雲のために神通さんも仕事を手伝ってくれているのだった。
「あら、大丈夫よ。それに訓練が大変でも別の事がおろそかになってやっているようじゃあ。司令官に示しがつかないわ」
「ふふふ、それならもう少し厳しめにしても問題ありませんね。……冗談ですからそんな顔しないでください」
　叢雲は今後の行事予定などの資料に目を通していた時、神通が話し始める。
「そういえば貴方はもうすぐここを去るのでしたね」
「ええ、そうなるわね。その時のために新しい寮長を決めておかないとね」
　叢雲は資料を読み終わると、それをファイルに綴じ棚に戻す。消灯時間までまだ時間があるためお茶を淹れ始めた。
「どんな方を次の寮長に選ぶつもりですか？」
　神通は叢雲に注いでもらったお茶をしばらく冷ましてからすする。
「別に誰だってかまわないわ。やる気のあるやつを志願制にして選べばいいんじゃない？」

「そうですか。貴方が相当この役職を張り切ってやっていたので、何か思い入れがあるんじゃないかと思っていたのですが？」
「そんなわけないじゃない、秘書艦の訓練みたいなものよ。秘書艦になってやることは大体一緒なのよ」
「ですが秘書艦の仕事はあくまで司令官の補助です。しかも、秘書艦としての訓練は着任してからでも遅くはないのでは？」
　叢雲は他のみんなから見ても明らかに頑張りすぎなのであった。他のみんなは着任して戦闘中や艦隊生活の中でみんなに迷惑が掛からないようにするのに精いっぱいのはずなのだが、叢雲はそれ以上のことまで手を出していた。ただ、他の人から手を借りながらやっているところを見ると一人で抱え込んだりしているわけではなさそうだった。
「もしものためよ、私の司令官が艦隊指揮が苦手でも執務が苦手でも対処できるようにしておかないといけないわ」
「そういえば貴方は気に入った司令官がいましたね。彼はどうなのですか？」
「まだわからないわ。司令官としては優秀みたいだけど何分サボり癖があるみたいね」
「それは……本当に良いのですか？　あなたがそんな司令官のもとに行こうとするとは思えないのですが……」
「いいのよ、それにサボってるときは私が引きずってでも連れてくるわ」
　傍から見た叢雲は、常に優秀さを求める艦。その分プライドが高く自分の上司である司令官にはそれ相応の力量を求めているとそう思っていた。
　というか、なぜ叢雲が司令官の成績を知っているのか神通は少し疑問に思ったが、まあそういうものだろうと考えるのをやめた。
「私はね、普通の艦娘とは少し違うのよ。ああ、誤解しないで頂戴、何というかね産まれ方が違うの。私はこの世に生を受けた段階で半分艦娘になるのが決められていたのよ」
「え？　それって――――」

すると突然叢雲の電話が鳴る。
電話を見ると・・・司令官だった。
「ああ、ごめんなさい。ちょっと出てくるわ」

「なによ、こんな時間に！」
「ああ、叢雲か。あのさ、今から用事あるか？」
「ないけど・・・何するのよ？」
「その・・・大事な用があるんだ」
「は？」

若葉、お前・・・

「司令官！　青葉、聞いちゃいました！」
青葉は自信満々で俺に語り掛けてくる。北上から情報を引き出せたのがよほどうれしかったのだろう。
まあ、本当に青葉が欲しがってそうな情報は北上の記憶操作によって除去されてしまったが……
昔の偉い人が言ってた、何かしらの知識や技術を欲しがるのならそれなりの代償が必要なのだと。今回の場合は、青葉が自分がなぜ奢らされているのかもわからず、その場にいた全員分の甘味を奢る羽目になったのだ。
しかも北上さんは、堂々とその店で一番高いのを選んでいた。
とはいえ、青葉が欲しがっているという大井の情報を手に入れることができた。というより北上が甘味を食べながら大井についていろいろ教えてくれたのだ。
大井はああ見えて器用で家事や裁縫に至るまでの事を粗方やれるということ、ここに来る前に自分の周りに自分と同じような悩みを抱えた子がいた時は放っておけないということ、そして……司令官という存在をあまり快くは思っていないということ
大井にも案外良い部分があるということが分かった。大井はただの通り魔ではなかったのだ。
だから少しずつ北上を通して歩み寄っていけばよいのではないのだろうか。うん、それがいい。そうしよう。
「――――というわけで、今日の夜に集合ですね。遅刻しちゃっダメですよ」
「ん？　ごめん何の話？　聞いてなかったわ」
俺が色々考えている間に青葉は何か言っていたようだ。
「で・す・か・ら！　青葉が聞き出した情報によりますと最近大井さんは夜中になると艦娘の寮を抜け出して何処かに行ってしまうそうなんですよ。これは確かな筋からいた話なので間違いありませんよ」
それはそうだ、それも聞いた話だし俺も聞いていた。どうやら青葉

は情報屋ごっこに夢中になっているらしい。
「まあ、そんなことも言ってたなそれでそれがどうしたっていうんだ？」
「ふふふ、それがわからないとはまだまだですね」
青葉はチッチッチッと指を振ると自慢気な顔をする。
「いいですか？　大井さんが寮を抜け出してどこかへ行くようになったのは司令官が北上さんと出会ってから間もなくということが分かりました。つまり、大井さんのこの奇妙な行動は間違いなく司令官が関係しています」
正直なところその部分はあまり聞いていなかった、俺もたまに抜け出しているため艦娘の中にもそういうやつがいるのかと勝手に納得してしてしまっていたが青葉は聞き逃さなかったようだ。
「ですのでそこを狙って取材に行こうかとおもいまして」
俺はそこまで暇ではないのだから、そんなことには付き合えない。
それを青葉が慌てて引き留める。
「ちょっと待ってくださいよ！　これはスクープかもしれないんです！」
さぁ～て、今日も疲れたし帰って寝ようかな。いろんな奴らに振り回されたし、今日の夕食は何だろうか？
「司令官は部下が危険な場所に赴こうとしているのに帰るっていうんですか！　鬼ですか貴方は！」
上司を危険な場所に連れて行こうとしてる時点で鬼はお前の方だよ。
だが、その大井の行動が気にならないわけでもない、あの北上がわざわざ教えてくれたのだからきっと何か意味があるのだろう。
「分かりましたよ！　私一人で行きます！　あとで泣きついても知りませんからね！」
そういうと一人で行ってしまった。
そんな青葉を追うようなことはせず俺は、寮への帰りを急いでいた。
とはいえ、この時間に帰ってもすることがない俺はどのように時間

をつぶそうかと思い悩んでいた。
　青葉には付き合ってられないし、うーん。ああ、そういえばいたではないか俺にかまってほしそうにしてたやつが

「若葉だ、初春型３番艦若葉……特技は、２４時間の強制労働だ」
「お前それブラック企業での過酷な労働を逆に楽しみだした一歩手前の社畜みたいになってるぞ」
「む、提督か。どうしたんだ？　散歩の時間か？　わかった、今から首輪を準備しよう。今日首輪を新調しておいたんだ」
　なぜこいつは俺がこいつの趣味に付き合うために電話を掛けたと思っているのだろうか
「あ、ちょっと待ってくれ今裸になるから」
　は？　やめろバカ！　お前電話越しとはいえ俺が若葉にそうさせているみたいじゃないか
「何を言っているんだ？　電話でとはいえ提督と言葉を交わすのだぞ裸になるのが道理というものだ」
　俺の方が然るべき常識をわきまえていないみたいな言い方するな。というかまず服を脱ぐのをやめろ
「フッどうやら司令官は駆逐艦のスピードを甘く見ているようだな。若葉はもう全裸だぞ、首輪も新調してばっちりだ」
　駆逐艦のスピードをそんなことに使うな！　ていうかお前確かルームシェアしてるやつがいなかったか？
「ところで一緒にこのワンコなりきりセットというものも買ったのだが犬耳はわかるがこのしっぽのようなものはどこに……あっ此処か？」
　もう後からかけ直そうかと思ったその時、ドアが開く音と同時にしばらくの沈黙の末ドアを開いたであろう人物が若葉に近づいてくる音が聞こえる。
「のう、若葉よ。今誰と電話しておるのじゃ？」

聞いたことのない声というか独特なしゃべり方だった。声色からして駆逐艦にしては少し年上な気がする。
というか、どういう状況なんだこれ。まず、若葉は全裸で首輪をつけてて犬耳までつけてる。そして目の前にはルームメイト、電話でしゃべってるのは俺。
うん、犯罪だな
「提督だ。この間話しただろう?」
おい、そこで俺の名前を出すな、勘違いされるだろうが
そして、そのルームメイトは若葉から電話を貸してもらうように言ってきた。俺と話がしたいらしい。
「のう、貴様が提督か。わらわは初春、若葉の……まあ姉みたいなもんじゃ」
すごくドスの利いた声で話しかけてくる。これは怒ってるね
「あ、はいそうです」
俺もあまりの怖さに敬語で答えてしまった。
やべぇよ、ほとんど俺のせいじゃないのに何か艦娘から説教される流れだぞこれ
「若葉は……その……分かっておるとは思うが癖のあるやつなのじゃが……まじめでいい子なのじゃ。わしも一緒に行けたらよいのじゃが、あいにくわしはもう他の提督の所に行くことが決まっているのでな……」
その声は、先ほどのドスの利いた声とは違いまるで何か諦めたような遠い空でも見ているときのような声だった。
どうやら説教ではなく、若葉に気に入られてしまった俺へのある意味激励のようなものだった。
なるほど、つまりもうすぐ離れてしまう若葉が心配なのだろう
「だからその……若葉をよろしく頼むのじゃ」
そこまで言うと時間を取って済まなかったと謝ると若葉に電話を返した。
「いい姉だろう?　私達の事をいつも心配してくれるんだ」
だったら、心配かけないようにその悪い癖直せよ。

しょっぱなからの若葉の発言に困惑しながらも用件を述べる。
初春の心労は俺では到底想像できないものだろうな、少しでも緩和剤になってやらねば。
「あのさ、今暇か？　ああ、無理しなくていいんだぞ。今日はその……疲れただろ？」
「フフフ、愚問だな。提督が私に用があるんだ。暇になったに決まっているだろう？」
若葉は、いそいそと何かを準備し始めているようだ。
「それに私の疲労を気にすることはないんだぞ？　私はお前の盾であり剣なんだ、私はいつかは壊れる運命、その時はまた新しく改良されたものを使うといい。それであなたが守れるのであれば私は満足だ」
俺は驚いてしまった。何故年端も行かないこの少女からそんな言葉が、さも当然のように出てくるのだろうと思ったからだ。
そもそも、ここに来てから違和感があったのだ。何故艦娘は出会って間もない俺たちのために命を懸けられるのだろうか？　鹿島教官が言っていた艦娘は生まれながらにして艦娘なのだと、だとするならば艦娘達は俺たちを
守って果てるために産まれてきたというのだろうか？　そんな考えは悲しすぎる。
ここで若葉に対して何といえばいいのだろうか？　ここで俺の考えを押し付けても若葉は従順にそれを守ろうとするだろう。そういうことではないということはわかっているんだけどな……
「……なぁ若葉、もしお前が死ぬなら俺も死ぬとか言ったらどうするんだ？」
なぜこんなことを聞いたのかわからない。なぜか口から出ていた。
「心中かそれも悪く……いや、悪いな。少し……いやだ」
「そっか、でもな俺はお前らに守られるんじゃないんだ。一緒に守るんだ。それを忘れるなよ」
「……ああ、わかった」
若葉は少し黙り込んだが、返事をくれた。今はまあこれで良しとするか。

「ところで司令官、散歩の準備が出来たそちらに向かいたいのだがどうすればいい？」
「ああ、その前にもう一ついいか？」
「なんだ？」
「服を着てから来い」

「ここ……よね？」
司令官から呼び出しを受けた叢雲は驚きを隠せなかった。
「ああ、叢雲殿。まさか本当に来ていただけるなんて恐縮であります」
「あら？　あきつ丸じゃない。いいのよ、久しぶりね」
取調室から出てきたのはあきつ丸、陸軍の揚陸艦だった。
「ええ、随分と大きくなられて……」
「その話はいいじゃない。それより……司令官は？」
叢雲は心配そうにあきつ丸に尋ねる。
「ああ、ではこちらに……」
あきつ丸に連れられて、取調室を進んでゆく叢雲。
「おい！　犯罪者！　叢雲殿が来てくださったぞ」
「おい叢雲！　俺の誤解を解いてくれ！　変態はこの若葉だけなんだ！」
司令官は若葉と一緒に取調室にいたのだ。若葉にリードをつけた状態で……
「全く……何がおかしいんだ？　司令官と夜の散歩をしていただけじゃないか」

夜なのだからお静かに

「しかし、叢雲殿は本当にこんな奴を司令官に選んだのでありますか？」

「おい、こんなやつとは何だ？言っておくが俺は提督になりたいと思ってここに来たんじゃないからな」

そもそも叢雲が俺がここに来るきっかけを作ったのは確かであった。叢雲が俺をあの町で見つけるようなことがなければ今も俺は一般人として暮らしていただろう。

今となってはもうどうでもよい話ではあるが・・・いやどうでもよくないないつか仕返ししてやる。

まあ、とにかく今はとにかく静かに暮らせればそれでよい。こぢんまりとした鎮守府で後方で活躍するくらいの奴になれればもうそれでよいというスタンスに変わりつつあった。

まあ、給料もいいみたいだしな。

話を聞いていると二人はまるで昔からの知り合いのような口ぶりだった。

どういった仲なのか気になるところだがそれよりも俺の冤罪についての弁明に期待が持てるのか気になるところだった

「いいかしらあきつ丸？　何度も言うようだけどこの子はそういう子だから」

「そうは言いますがな叢雲殿、この者はこの駆逐艦娘に首輪をつけて散歩と称していたのですぞ」

どうしてもこの若葉の特殊なプレイに知識のないあきつ丸からすればどう考えてもやばい奴なのは俺なのである。そのためどうしても俺は疑いの目を向けられている。

とはいえ、なぜ叢雲にその知識があるのかは、はなはだ疑問ではあるがこれ以上詮索しないことにしようと思う。何されるかわかったものではないからな。

「おい若葉！　お前もなんか言えよ。もとはといえばお前がまともな恰好でくれれば何も言われなかったんだからな」

「何を言っているんだ？　言われた通りに服は着てきたぞ？」
首輪とリードが余計なんだよ。
「しかし、私も自分の無知を詫びよう。まさか、この士官学校がペット禁止だったとは思いもしなくてな」
そうじゃないんだよなぁ。ほら見ろあきつ丸も何言ってんだこいつみたいな目で見てるぞ。お前みたいな特殊な奴を見たことのない奴はこういう時どう反応していいか困るんだからな。
「……つまり貴方は司令官としてこの駆逐艦娘の「遊び」に付き合っていただけということでありますか？」
「まあ、そういうことになるのかな？」
実際の所は俺が待ち合わせに若葉が現われたところでしばらくいつもの下りをしているところをあきつ丸に見つかったのである。
・・・あれ？もしかして俺若葉に侵食されている？いやそんなはずはない。

「はぁ、わかりました。信じることにするであります。しかし、そういうことは人目のない所でやっていただきたい」
「む、そうか……済まなかったな」
お、若葉が素直に反省したぞ？
「これからは司令官の椅子になることにする」
全然反省してなかったぞこいつ。

俺と若葉と叢雲は帰路についていた。
「全く！　突然来いとかいうものだから何事かと思ったら――――」
叢雲は相当ご立腹のようだ。それはそうだろう突然呼び出されたかと思ったら憲兵にお世話になっていたのだから
「でも、まさかホントに来てくれるとは思ってなかったぞ」

そういえばあの憲兵の……あきつ丸だったか？　あいつも艦娘のようだったがまるで叢雲と昔からの知り合いのようだった。
「なぁ叢雲、さっきの憲兵と知り合いなのか？」
「ああ、聞いてたのね。まぁ……そうね、私が小さいころ色々世話を焼いてくれたのよ」
叢雲は少し特殊な家系に生まれたようだった、小さいころに母親を亡くしたそうなのだが父親があまり家にいられなかったためその代わりに世話を焼いていたのがあきつ丸だったそうなのだ。
「ふーん、じゃあお前のそのお堅い性格はあいつの影響か？」
「違うわよ！　そういえば、あんた今日の訓練見に来てたわよね？いつからそんなに勉強熱心な奴になったの？」
「ああ、それなら途中で青葉ってやつに絡まれてだな」
ああそうだ、なんか大井に興味があるからって言ってたな。まあ、置いて来たわけだが
「ああ、青葉ね。それなら納得したわ、どうせあんたの事、取材したいとか言ってきたんでしょ？」
まあ、大体そんな感じであってる。そういえば若葉もあの時あったのだったか、まあその時は痴態を見せつけてしまったのだがまあ、うちの鎮守府に来れば毎日のように見るわけだからそこまで問題視することではないだろう。
「なぁ、その青葉なのだがあそこにいるぞ」
若葉の言う方向を見ると、青葉がいた。いや、確かにいたのだが……青葉は木に吊るされていた。
「何やってんだ？」
青葉は一瞬ビクッっとなって体が振るわせたが、俺の顔を確認する

と安心したようだった。
「ああ、司令官。やっぱり助けに来てくれたんですね？」
別にお前に会いに来たわけではない、ただの帰り道だ。だが何の帰り道かは言わないでおこう。ネタにされると困るでな。
「あら？　艦娘がこの時間に外にいるなんてどういうことなの？」
「げ、叢雲さん……」
何故か青葉は叢雲を見ていやな顔をしていた。
「消灯時間になって抜け出してるなんてかなりいい度胸ね」
「勘弁してくださいよ、叢雲さん。貴方の司令官のために私も働いてるんですよ？」
何を言うかこいつは……いつだってお前を動かしているものはお前の好奇心だろうが。
「でも無断で抜け出したのは本当よね？」
「はい」
青葉は叢雲になぜか頭が上がらないようだ。
「ところでお前面白い格好してるな」
「そんなこと言ってないで助けてくださいよ！」
青葉はじたばたしながら救助を要求する。
「司令官、帰るわよ。そいつは一晩ここに置いていきましょう」
なるほどこれが普段の行いの差というやつか。叢雲は青葉の事に一切構うことなく帰ろうとする。
「ちょっと！　お願いします置いてかないでください！　青葉殺されちゃいます！」
「誰にだ？」
「大井さんです！」
「憎い！　憎い

！　憎い！　憎い！　憎い！　憎い！　憎い！　憎い！　憎い！憎い！　憎い！　憎い！　憎い！　憎い！　憎い！　ニ喰い！　肉イ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！　ニクイ！ニクイ！　ニクイ！」

　大井は藁人形と金槌をもってさまよっていた。とても理性があるようには思えないが……

「私もちゃんと取材するつもりだったんですがね。流石に死にたくはないわけですよ」

　青葉は、逆さにつられたまま冷静に事の顛末を話し始める。

「ねぇ、大井は何をやってるんだ？」

「知りませんか？　俗にいう丑の刻参りってやつですよ」

　頭にろうそくを付けながら特定の時間に藁人形を木に打ち付けることで相手を呪い殺すやつである。

　そういえば人形の専門家が実験でやっていたな、呪う相手もいないのに……

「それでお取込みの最中でしたので、突撃取材をしましたがまともに答えてもらえずこのざまでして……」

　青葉よ、勇気と無謀は違うのだぞ。というかなぜあんな状態の大井に取材ができると思ったのだろうか？

「それで？　相手は誰よ？　想像はつくけども」

「相手？」
「決まってるじゃない。呪い殺す相手よ」
そうだった、あんなことをやってるってことは殺したくてたまらない憎たらしい相手がいるってことだよな？　そんな奴身に覚えが……
「俺か……」
「それはそうでしょうね。自分の大事な北上さんの心を奪ったわけですから」
いや、お前そんな冷静に言うなよ。当事者俺だぞ？
しかし、丑の刻参りは誰かに見られては効力がなくなるというからこれで安心……ではないなこれ。
毎日こんなことされてるんだと思うと俺も安心することができない。何とか解決できないものだろうか？
「ところで大井はなぜさまよっているのだ？」
若葉が当然の質問をする。大井の行動はまるで誰かを探しているようだった。
「ああ、それなんですが私大井さんに取材をする際に大井さんが私の声に無反応だったので、その……司令官が近くに来ているといってしまいまして……」
なぜこいつは余計なことしかしないのか？

多いに、歓迎しよう

「大丈夫です！　大井さんにつかまらないように発電機を全部修理して脱出すればいいんですから」
「じゃあお前が囮になれ」
「それは勘弁してください。あ、ごめんなさい！　だってほんとに来てるなんて思わないじゃないですか！」
　しょうがないだろ。色々あったんだ。
「……仕方ないな」
　若葉は立ち上がるとそのまま大井の方に向かって歩き出した。
「おい、若葉！　何をするつもりだ！」
「決まっているだろう？　大井を説得してくる。その間にここを離れろ。何、心配するなこの若葉に任せておけ」
　その顔は笑いながらまっすぐ戦場を見据える戦士のようだった。そして、大井の目の前に立ちはだかった。
「……誰よ？」
　大井のドスの利いた声に遠く離れた俺たちでも背筋に冷や汗をかいてしまった。
　だが、そんな大井に動揺することなく話を続ける。
「司令官を探しているのだろう？」
「……あいつの居場所を知っているの？」
「ああ、だがここにはいない。それは青葉がお前の気を引くためについた嘘だ」
「……そう、ところでその首輪は何？　まさかあいつが……」
「ああ、これは自分でつけた。私はあまり他の司令官には良い顔をされなくてな、こんな私の事を受け入れてくれたのはあいつが初めてなんだ。私の司令官はなんだかんだ文句を言いながら私に付き合ってくれるんだ」
「……」
「司令官には感謝しているんだ、こんな私を拾ってくれたのだからな。だから私は司令官にずっとついていくと誓った、この首輪はその証

だ」
　あっ、やべぇな。なんかむず痒い気分になってきた。まさか若葉がそんなことを思ってるとは思わなかったぞ。
「だからお前も私と同じ司令官の奴隷にならないか？」
　だからそういうこと言わないでいてくれたらなぁ。若葉は大井からかかと落としを喰らい地に伏せる。
「しかし、私にはお前のことがわからない。なぜおまえはそうやって司令官を嫌うのだ？」
「当然じゃない！　だってあいつは北上さんを奪ったのよ！」
「しかし、今までお前にはきちんと優しく接してくれた司令官もいたのではないか？　なぜそんな奴らまで一蹴してきたんだ？」
「……相容れるわけないじゃない、私達は、人間じゃないのよ！　ここに来てわかったでしょ？　私達は兵器になるために産まれてきたのよ！」
　どうやら、俺の中で大井に対して少し認識の間違いがあったようだ。俺は司令官の事を快く思っていないのは艦娘である自分が司令官に虐げられていたからだと思っていた。
　しかしそれは間違いだったようだ。
　大井は、きっと自分が何なのか不安だったのだろうしかしここに来て知ることになった、自分が戦うために産まれてきたと教えられた。
　そして、司令官という人間に対して距離を置くようになったのだろう。
「だから近づくな……か」
　だったら、そこは示さなくてはならないだろう。迷った艦を導いてやるのも司令官の役目なのだ。
「もういいぞ若葉、下がってろ」
「む、逃げなかったのか？」
「まあ、あのまま任せてても終わりそうになかったもんでな」
　俺は若葉の前に出る。大井も俺の存在に実は気付いていたらしい。
「やっぱりいたんじゃない。何？　また頭に喰らいに来たの？　今度は手加減できないわよ？」

「そうか……じゃあ手合わせしてみるか？　俺の事が殺したいほど憎かったんだろ？」
　若葉が慌てて俺の前に出ようとする。
「司令官、今の奴は危険だぞ」
　分かってる。でも、ここは司令官である俺がやんなきゃダメなんだ。
「かかって来いよ手加減はいらんぞ」

「どうだ？　結構やるだろ？」
「いや、地面に倒れながら言ってもしょうがないでしょう？」
　まあ、結構いいとこまで入ったんだけどな。やっぱつえーわ。きっと前の組織にいた時からいろいろ経験は積んでたんだろうな。
「ねえ、私の事舐めてたでしょう？　私の事倒そうと思えばいつでも止めはさせたはずでしょ？」
「まあ、お前を倒すことが目的じゃないからな」
「は？」
　俺は起き上がりその場に座り込む。
「どうだった？　俺も結構いけてただろう？」
「まあ、認めてやってもいいわね」
「お前はさ、人間である俺たちは兵器である自分たちとは相容れないと思ってるかもしれんがな、いるんだぞ世の中にはお前らの力や思いを受け止めてやれる奴がちゃんと存在するんだ」
「……それがあんただって言いたいの？　だから北上さんはあんたを選んだの？」
「まあ、そういう選択肢もあるということ。まあ北上が俺を選んだのは全く違う理由だと思うけど」
　まあ、最初はお前の元の仕事を知っていたからっていうのだったが……それはわからない。北上は何考えてるかわからないし少し苦手な部分はある。ひょっとしたらおもしろそうだと思ったからやって

来たとかそんな理由かもしれない。
「でも……そんな奴いるわけないじゃない。みんなあんたみたいなバカじゃないのよ」
「いるわよ」
　そこに入ってきたのは叢雲だった。
「いるわよ。私の知っている人に突然現れた艦娘の事を受け入れて何なら愛せる人がいるわ。自分の事を兵器と思おうが人間と思おうがそんなのはあなたの勝手、だってあなたは艦であり娘なんだもの。でもどちらにしたって共生しないと生きていけない、それは覚えておいて」
「……」
　叢雲は俺に駆け寄って肩を貸してくれた。「大丈夫？」とか言うと思ったが叢雲は何も言わずに帰り始めた。
　大井も一緒に連れて帰ろうかと思ったが、少し一人にしてやれと叢雲に言われてしまった。

「どうするかな？　あいつ」
「さぁ？　わからないわ。でも、少しくらいは前向きになってくれたんじゃないかしら」
「そうだな。私も司令官の艦隊に勧誘しておいたし、きっと大丈夫だろう」
　お前が勧誘したのは、自分の趣味だ。
「それにしてもあんたからあんな言葉が出てくるなんてね」
「何の事だ？」
「艦娘の力や思いを受け止められる人間がいるといってたでしょ？」
　ああ、確かにそんなことも言った。まあ、人間舐めてんじゃねぇぞみたいな意味合いもあったけどな。まあ、不意打ちで気絶させられた俺が言うのもなんだがな。
「それを聞いて少し安心したわ。私の目は多少は間違ってなかったん

だってね」
　多少は余計だこの野郎。ああ、そういえば……
「さっきの話本当か？　艦娘と恋をしたやつがいるって話」
「ああその話ね。ええ、本当よ」
　え？　マジでそんな奴いるのか？　愛せる奴とまでは言わなかったが……。そうか……そんな奴がいるんだな。どこの誰だか知らんが立派なもんだと思う、艦娘への偏見の多い中で艦娘を愛してしまったやつがいるんだな。俺にはどんなことが障害になるのかはわからんが、きっと大変だったんだろうということは俺にも大体察しがついた。
「私はあの二人を見て誓ったの、決して指揮の才に長けているとか数々の武勲を立てているとかそんなんじゃない、ちゃんと私達艦娘を対等にそして平等に接してくれるそんな人を司令官にするんだって。そのためなら艦隊指揮や書類仕事に不安があったりしたってかまわないわ。私がきっちりしごいてあげるけどね」
「でも、俺だって嫌いな奴はいるぞ？」
「そりゃ誰だって嫌いな奴くらいいるでしょう？　問題なのはそこに艦娘だからっていう壁がない事よ」
　少し……意外だな。叢雲がそんな風に思っていたとは。俺はなぜ俺みたいな成りあがる気のない奴に目を付けたんだろうと思っていた。見るからにプライドの高そうな叢雲は艦隊指揮や運営がうまい奴についてそいつとともに勝利を喜びたいとか思うやつだと考えいていた。だが実際は違ったようだ。
　しかし、その口ぶりからしてどうにもその二人の事を良く知っているようだ。こういうのって聞いてもいいものなのだろうか？
「それで？　それで？　そのお二人というのだ一体誰なんでしょう？
　青葉気になります！　その口ぶりからしてかなり近しい仲だったのでしょう？　教えてくださいよ！」
「お前……どうやって抜け出したんだ？」
　青葉は先ほどまで大井につるされていたはずなのになぜ抜け出せたのだろうか？　でもまあこいつならあの程度の縛り方でどうこう

出来るものでもないだろう。しかもこいつ唐突に話に入ってきて俺が聞きにくいことを平気で聞きやがる。
「はぁ、まああんたもうちの艦隊に来るのよね。まあいいわ教えてあげる。この世界に最初に現われた艦娘の事を知ってるかしら？」
　それは、青葉から聞いた。確か海に浮いてたんだっけ？
「それで、その当時の一海軍の少佐の男が彼女を拾ったの、それからその兵士は彼女が深海棲艦撃破のカギになると気付いた。でも、ある研究者達が彼女を調べ上げるために引き取るべきだと言ってきてね、まあ何されるかは大体想像がついたわ」
「ただの少佐でしかなかったその人はそれを断ることはできなかったわ。だから、その人は秘密裏に自分の作戦にその艦娘を入れることにしたの。そしたら作戦は大成功。当時初めて人類側が勝利した瞬間だったわ」
「それで、その栄誉を称えられたその男は無事昇格することに成功。その力で研究者たちの意見を突っぱねたの。そのあとの事は青葉が調べてるんじゃないの？」
　そうだ、確かそのあと艦娘が深海棲艦に対抗できるシステムを作るために尽力したんだったか。
「まあ、それも実は艦娘達がその時の研究者達のような連中に引き抜かれないようにするためのシステムでもあるんだけどね」
　そうか、こうやって艦娘であることが発覚したらすぐに海軍の監視下に置くことでそういうことを免れることができる。今まで普通に暮らしてきた女の子達を強制的に連れてきていることにもちゃんと理由があったということだ。
「しかし、よくそこまでご存知ですね。私でも調べるのに苦労したのに」
　青葉は悔しがる。自分が調べる事のできなかったその答えがこんなに近くにいたのだから。
「それはそうよ、多分私が一番その二人を一番近くで見てきたんだもの」
　そして、叢雲はかなりあっさりと答える。青葉ですら調べられない

位のトップシークレットを当たり前のように口にする。
「その二人は、私の両親。肉親ともいうわね。だから私は言ってしまえば艦娘と人間のハーフってことになるわね」

エロ本は、時に青春の象徴になりえる

あの夜からまあ何日か経ったが、お休みはなくなったわけですぐにまた講義をすることになった。

あの日の事は、叢雲があきつ丸を丸め込むことでどうにかなったらしい。自分がハーフであるという事実は黙っていてほしいということだったが青葉に伝えた時点でどうなのだろうか？

まあ、その時は宇宙の機密を守る装置を使って叢雲の秘密を守ってもらうことにしよう。大井はあれからあってないけれど北上とは何度か会うことがあり、北上曰く

「大井っち？　まあ、待ってあげなよ。がっつくと嫌われちゃうよ？」

と、言うことなのでしばらくそのことについて話すことなく、俺はしばらくは大人しく鹿島教官の講義を受けることにしていた

あー、疲れた。鹿島教官は俺の今まで休んでいた分を取り戻すためにいつもより張り切って講義を行っており、いつもなら6時には終わるはずなのに時刻はもう8時を回ろうとしていた。

おかげで、いつもより大変な講義になってしまった。「ここまで、明日までに暗記してきてくださいね」と念を押されどうしようもない怠さを感じながらも、俺が提督になるのを待っていてくれている奴らのために提督になるまでは頑張ろうと心に決めながら自分の部屋に戻るのだった。

「ああ、ちょっと待ってください」

部屋に戻ろうとする俺を鹿島教官が引き留める。

「何だよ？　これから俺は残りの時間を睡眠に充てるという重大な仕事が残っているんだけど？　あ、もしかしてこれから個人的な講義（意味深）でもするつもりなの？」

「ああ、貴方をこの時間まで拘束してしまったのでご一緒にご飯でもと思ったのですが、一緒に憲兵の所に行きたいようですね」

「ごめんなさい勘弁してください」

鹿島はニコリと笑う

「フフッ、では私の行きつけの所に行こうとしましょうか」

鹿島教官の行きつけかぁ、どんなところなんだろう。

まさか……いやまさかだよ。あの鹿島教官がいつも行っている店が中華料理屋だったとは……

確かにうまかったが、あの容姿端麗な鹿島教官がいつものツインテールの髪を後ろにまとめ、手袋を取って袖をまくった状態でこってこての大盛豚骨ラーメンをすする姿は何というか色々はかどるものがあった。

鹿島教官の意外な一面が見れたところで俺は自分の部屋に戻る。

いつもなら鍵をかけたはずの俺の部屋に何故か艦娘が居座っていて、たまにだが初雪や叢雲が勝手に入ってて俺の部屋でお茶を入れて勝手に飲んでいたりする。

そして、そのまま今日の訓練の内容についてや演習の内容などを教えてくれたりする。そんなこんなの内にいつの間にか俺の部屋はたまり場になっていた。

しかし、今日はもう艦娘寮が消灯のためうちにいることはないだろう。

今日はあの騒がしい奴らがいないと思うと少し寂しいな。

「やぁ、提督お疲れ様。ずいぶん遅かったね、講義が長引いたのかい？」

そんなことはなかった。しかし、今回はいつもとは少し事情が違う。

「……なんでいるんだ？　時雨」

忘れようものか、俺が起きたら襲われかけていたあの時雨だ。

「何でとは変なことを言うね提督。君に会いに来たに決まってるじゃないか、こう見えて僕は寂しがり屋で寂しいと死んじゃうんだよ？」

そんなことを言う時雨は俺の椅子の上でジャンプを読んでいた。

「さあ提督、疲れたんじゃないのかい？　僕が寝る前の読み聞かせをしてあげようじゃないか」

「それにしてもお前こんな時間までここにいていいのかよ。叢雲に怒られるんじゃないか？」
　叢雲は艦娘寮の寮艦の仕事もしてるらしいから、門限までに帰らないとそれはもうとんでもなく怒られるんだとか。
「ああ、大丈夫だよ、僕は艤装もない状態だからね。誰も僕の事なんか気にしないさ」
　そうなのか……あれ？　前は前の鎮守府が解体になったから来たって言ってたような？
「まあ、いいか。ってお前何やってんだ？」
「今日は一緒に寝ようかと思ってね。僕が寝る前の読み聞かせをしてあげようじゃないか。ドラゴンボールとハンターハンターどっちがいい？」
　とても寝かせるつもりのあるとは思えないチョイスに困惑しながらも寝る準備を始める。
「あ、やっぱりダークネスの方がいいかな。読み聞かせしてる途中にそのまま発情しても襲える相手がここにいるからね」
「いい加減にしろ！　北斗神拳奥義！」
　俺はすり寄ってきた時雨の両脇腹に指を入れ込む。
「ふふふ、残念だったね。僕はわき腹には強いんだ――――ひゃう!!」
　だったら脇に入れてやるまでだ、まあ誰にでも弱点はあるもんだ。
　時雨はそのまま飛び上がるように痙攣した。そんなに弱かったのか……新しい発見だな。
　そういえば俺は時雨のことを何も知らない。白露についても何かしら知っておきたい。
「なあ時雨？　ちょっと聞いてもいい？」

「何だい？　僕に興味があるのかい？」
時雨は俺の椅子に座りなおすと、俺の方をじっと見て答える。
うーん、なんか怖いな。だって、時雨瞬きすらせずにじっと俺のこと見てくるんだもん。しかも、よく見たら口は口角あげて笑ってるように見えるけど、目は笑ってないし。
ちょっと聞いてみようとしただけなのになんか変に緊張感が出てくる。これ下手に質問していいもんだろうか？
「お前さ、なんで俺の所に来たんだ？」
これは、あたりさわりのない質問をしたと思う。それと同時に時雨に聞いてみたかったところだ。
大井に頭を殴られて夢に白露が出てきた時、「私の妹をよろしくお願いします」と言われた。
しかし、白露にも謎が多いしなぜ時雨があの場にいたのかもわからない。見た感じ大井や山城の様に何かしてくるわけじゃ……襲われかけたが。
「なんだ、そんなこと？」
時雨は立ち上がるとベッドに座っている俺の膝の上に乗り俺の腕を愛おしそうに撫でる。
確かそこは俺が初めて時雨と出会った時に時雨に噛まれたところだ。
「僕はね、提督に必要とされているならそれでいいんだ。それだけで僕は幸せなんだよ」
「でもね、僕は使い物にならないどうしようもない奴だよ。でもそんな僕でも必要としてくれてる提督がいるって知って、君の所に来たのさ」
ふーん、自虐の部分は置いておくとして誰が俺に教えたんだ？　まあ、なんとなくわかるけれども
「でもお前現役で結構いろいろ頑張ってたんだろ？　それで使い物にならないは言いすぎなんじゃないの」
「そう……だね。これでも幸運艦とまで言われてたからね。でも僕にはもう……おっと、誰か来たみたいだ。悪いね、僕はもう出ていくよ。

ああ、いやいや、僕みたいなやつが君と一緒にいるのを見られたくないと思っただけさそれに、僕も他の艦娘といてあまりいい気分はしないからね」
時雨は俺の膝から降り、帰ろうとする。さっき一緒に寝るとか言ってたのに自由な奴だ。
引き留めようかと思ったが、今日は俺も疲れたからまた来てもらうことにしよう。きっとまた会えるだろうし。
そして時雨は入り口の所でくるりと俺の方を向く
「ああ、また会えるかはわからないよ。こういう職に就いたからには昨日会えた奴に明日また会えると思ったらいけないんだ。それに僕さっき死亡フラグのセリフみたいなこと言ってしまったみたいだし次に会った時には死体で発見されるかもしれないよ。・・・またね提督」
そして、ドアから時雨は出て行ってしまった。
ドアが完全にしまったことを確認した俺は鍵を掛けた。
そして、しばらくするとドアをカチャカチャ回す音が聞こえる。
「恐縮です、青葉です。今よろしいですかぁ？」
「よろしくないので帰りなさい」
俺はドアを閉める、抵抗する青葉。
「何するんですか!!　せっかくスクープを持ってきたというのに!!」
「今の時間帯に来る奴があるか!!　お前を連れ込んでることがバレたら俺まで叢雲に怒られるんだぞ！」

結局、入れることになってしまった。
「全く・・・早く帰れよな」
「何ですか貴方は!!レディに対してもっと紳士的であるべきだと主張します!!」
夜に男の部屋に押し入ってくる奴の事をレディとは俺は思わない。
というかこの間叢雲に痛い目に遭わされたばかりじゃなかったっけ？

そもそも、規律がなくてはならない軍においてこうも軍紀を乱されるのはダメなのでは？
「鹿島教官にセクハラしてる人に言われたくありませーん」
なんてこった、俺も軍紀を乱しておるとな？しかし、そんなことは知らん、記憶よ飛べ！
「ぐわっ！」
青葉にデコピンしてやった。こやつの頭位ならばこれで記憶も飛ぶだろう。
「ここは同じ穴の狢らしく仲良くしましょうよ」
お前と同じといわれると腹の立つことこのうえない。
そうはいってもよく俺の所に昼夜問わず遊びに来るものだ。艦娘はそんなに暇なのか？
俺はこんなに忙しいのに・・・。なんか不公平だと思います！
「それで？実際何しに来たんだ？」
「ええ、先ほど申しました通り。司令官からの依頼の情報が手に入りましたので・・・というのは建前で単純に司令官のお部屋にお邪魔したかったのとそれからついでに何かネタになるようなものでもないかと」
青葉は、そんなことを言いながら周りを見渡す。
「ではでは、まずはエロ本でも探しましょうかね」
「ちょっと待て」
俺は青葉を制止する。
「何ですか？あ！もしかして本当にあるんですか!?」
「いやないけども！」
俺はいったん青葉を正座させる。
「じゃあ何で止めるんですか？」
「まずいいか？言っておくがそれは男同士で始まるイベントなんだ。しかも、中学生のな」
全く、とんでもねぇ奴だ。バカテスを見てないのか。
「何を言いますか、今やあなたを慕う艦娘も増えてきました。となれば、皆が求めるものはあなたの情報です！その中でも特に需要がある

のはあなたの性癖！英語で言うとプロペンシティ!!」
「売る気なの!?俺のトップシークレットを金で売買する気なの!?」
そして青葉は俺のベッドの下を覗きだす。探照灯まで持参しやがって・・・。それはそんな風に使うもんじゃないだろう
「・・・あぁっ!!??司令官、何ですかこれは!!」
え？何？ほんとにあったの？ないよね？俺隠してないよね？
まさか俺が無意識に隠してたとか？こわ！無意識怖い！
「この黒い髪の毛は何ですか!!??」
青葉が見つけたのは黒い長い髪の毛。なんだよまるで浮気の証拠でも見つけたような場面じゃないか。
おそらくそれは、さっき来てた時雨の物だろう。
「司令官の部屋に出入りする髪の黒い艦娘は知っています。初雪ちゃん、北上さん、しかしこの髪質は最近・・・いえ、ついさっき抜けた髪の毛。今は二人とも艦娘寮にいるはず・・・さては司令官新しい女を作りましたね!!答えてください!!」
その青葉の目は嫉妬に狂った目・・・ではなく、新しいネタを見つけた好奇心にまみれた目だった。おそらくまたネタにするつもりだろう。
「ふふふ、タダでは教えないというわけですか・・・。では、取引しましょう」
「俺に取引とはいい度胸だな？まあ、いいだろう」
とは言え別に隠すような事じゃないんだがな・・・。
「・・・」
「・・・」
まあ、こうなるよな。
「どうしました？早くいってくださいよ」
「お前から言えよ。どうせあれだろ？言った瞬間何かしらの理由付けてはぐらかすつもりだろ？」
「ハハハ、マサカソンナ・・・」
おい、片言になってんぞこの野郎。
「・・・まあいいか、良いですよ。私はあなたの艦娘ですからね。それ

に栄えある最初の依頼ですからね」
「あれ？そんなこと話してたっけ？」
「覚えてないんですか？ほら、時雨さんの事ですよ。言ったでしょう？調べておくって」
　ああ、そいえばそんなことも言ってたかな？
「え？てことはあいつの事なんかわかったってことか？」
　あんな、変態であること以外謎な、あいつの事をこいつがこの短時間で調べたってことか？
「ええ、勿論です。まあ、少し裏の人たちに握らせたり。あまり世間体的によろしくない方法を使えば一発ですよ！」
　何が一発なんだ。お前は一発豚箱にでもぶち込まれろ！
「それによれば、時雨さんはかつて第一線を支えた艦娘の一人だったみたいですね。そのあまりの生存率の高さから幸運艦なんて呼ばれてたみたいですよ」
　なんだ、あいつ結構頼りにされてるじゃないか。あれだけ自虐っておいて・・・
　そんな奴が仲間になってくれるんなら心強いな。
　出来ればいろいろ聞いておきたい、そんなに頼りになるやつなら好みとか知っておいた方がいいだろう。あいつは会う機会ほとんどないからな
「で、他になんかないのか？好きなもんとかさ」
「はい？なんでそんなことが聞きたいんですか？」
「いや、もしそいつがうちに来るかもしれないだろ？そういう時に好感度上げとくのも提督の役目ってやつだよ」
　それにしても青葉も知らないのか・・・そんなすごい奴が今ここに来てるって。きっとびっくりするだろうな、そんなすごい奴が俺の所に来るんだから。
　すると、青葉は一瞬きょとんとしたが、青葉は少し深いため息をついた。
「・・・司令官。それは・・・無理ですよ」
「は？無理なんでだ？」

青葉は自分のメモ帳に挟まれた写真を取り出す。そして俺の前に見せた。
そこに写っていたのは一枚の書類だった。よく見るとそれは、時雨についての資料だった。
時雨のこまごまとした性能が書かれており、その戦果についても記述されていた。
しかし、一番に目を引いたのはそこではなかった。
「おい・・・これ、どういうことだ？」
時雨の資料の一番目立つところに大きな印鑑が押されていた。

白露型二番艦　時雨・・・轟沈

「どうやら、強力な敵艦隊と交戦して艦隊ごと全滅しているみたいですね。残っているのはほとんど半壊した機関部だけだったそうです。その時の司令官はその責を負われて辞任、今となってはその鎮守府は廃墟同然となっているみたいですね」
青葉は自分のメモ帳に写真をしまい込むとメモ帳をポケットにしまい込み俺の目を好奇心豊かな目で聞いてくる。
「さあ司令官！私の情報はすべて話しましたよ！今度は貴方に答えて貰う番です！この髪の毛は誰の何ですか!?」

私、若葉。今あなたの・・・

俺たちはあきつ丸の運転で走っていた。海が近くなっているのかカモメが飛びきれいな海が地平線の奥まで広がっている

「お前こんなでかい車に乗れるのな」

あきつ丸の乗る車両はあきつ丸の一見華奢な体つきからは想像できないほどごつい車だった。

これ絶対特別な免許いるだろ。

「もちろんであります。何なら車と付くものなら何でも乗れるでありますよ。三輪車とか」

「それ免許必要ないだろ！」

「冗談であります。しかし、ＳＬとかなら乗れるでありますよ」

それはもう、艦娘やめても食っていけるんじゃないか？

「ところで、あんな廃墟に何の用でありますか？」

「え？　何も聞かされてないの？」

あきつ丸は今回の件を何も知らないらしい。それなのに陸軍の車両をかっぱらったのか？

「ああ、貴方白露型の時雨って知ってるかしら？」

「ええ、はい。３年ほど前に実際にお会いしたことがあるであります。ですが時雨殿はもう……」

「その時雨が生きていたら？」

「ええ!?」

あきつ丸は驚いてハンドルを切ってしまう。

車体は思いっきり反対車線に行ってしまったがどうにか元の車線に戻る。

「おい！　死ぬかと思ったぞ！」

「いやあ、申し訳ない。叢雲殿がとんでもないこと言うもんだから驚いてしまったであります。まあ、もし乗用車が来ててもこの車両ならびくともしないであります。余裕でありますよ」

いや、反対車線の乗用車の事はどうなるんだ。当て逃げするつもりだったのかこいつ……

「この司令官がその時雨にあったっていうのよ。ついでに若葉もね」
ついでで片づけられる若葉……かわいそうに
こうなったのもすべては先日、青葉が突然俺の部屋を訪れそしてとんでもない事実を突きつけたからだった。

昨夜、突然始まった世にも奇妙な物語に俺と青葉は少し背中に冷や汗をかき始めていた。
書類に貼ってある写真を見る。確かに何度見ても写真の少女は時雨だった。
そしてその横には……轟沈？
これってどういう意味だっけ？
「言ってしまえば戦死です。もうこの世にいないって意味です」
じゃあさっき会ったのは？　一体誰なんだ？　さっきまでセクハラされて散々振り回されたあいつは？
「知りません」
「でもお前が持ってるそれ多分時雨のだぞ？」
青葉は窓を開け遠くに髪の毛を投げる。しかし、突然風が吹き自分の元に戻ってくる。
「どうするんですか司令官？　青葉呪われてしまいました。責任取ってください」
いわれのないことで責任を取る気はないぞ。始めはあまり信じなかった青葉、だったら何か他の証拠を出せと言われたので、時雨と初めて出会った時に一緒にいた若葉の事を思い出した。
夜中に電話を掛けるのもどうかと思ったが、
「若葉さんなら大丈夫ですよ。あの人貴方からの命令を２４時間体制で待ってるんですから」
と、言うことなので電話をかけてみる。
しばらくすると部屋のどこかから呼び出し音が聞こえてくる。
「若葉だ」

「今お前何処にいるんだ」
「お前の後ろだが？」
若葉は平然と俺の後ろで電話をもって待機していた。決して怖がらせるつもりはなくただそこにいて当然だとでも言いたげな顔でそこに座っていた。
もしかして艦娘はこういうことを普通に出来るのか？
「ついでに叢雲にもここに来る途中に電話で伝えておいた。「司令官の部屋に呼び出された、今夜はもう帰ってこないかもしれない」ってな」
おい、それ勘違いされる奴なんじゃ……
すると、大きな音と共に青葉が鍵をかけたはずのドアがひしゃげそのまま奥の方まで吹き飛ぶ。
そこから入ってきた叢雲は、殺意の波動に満ちていた
「さて、貴方達には二つの選択肢があるわ。二度と寝ないか永眠するか選びなさい」

俺と青葉は正座させられていた。俺は悪くないはずなのに……
「それで？　……どこまでいったのよ？」
「ん？　何の話？」
「とぼけんじゃないわよ！　夜分に司令官の部屋に艦娘が押しかけて何もないわけないじゃない！」
あ、あー、そういうこと。……あれぇ？　そういえば何もなかったぞ？　考えてみれば確かに何もないわけない。
大体、こういう時は親睦を深める（意味深）チャンスなのにイベントすら発現しなかった。
「あー、そうだった。あの雰囲気を利用して、つり橋効果で司令官襲えば青葉ルート確定だったのに……。青葉一生の不覚」
青葉も同じことを思っているようだ。いや、襲われたいとかじゃないからな。

「あー、大丈夫だ。何もなかったよ。うん、本当に不思議なことに何もなかったから安心してくれ」
「……本当に？」
疑り深いなぁ。まあ、疑われても仕方ないが。
「安心してください。悔しいことに本当に何もありませんでした。全く、司令官があんなおもしろ……怖いこと言うからですよ」
おい、何どさくさに紛れて自分は怖がってたように持っていこうとしてるんだ。もうどう頑張ったってそのルートには発展しないんだよ、あきらめろ。
「何よ怖い事って」
俺は、さっきここであったことを叢雲に話す。

「ああ、時雨か、確かにいたぞ。司令官と初めて出会った日の事だ、忘れるはずがない」
若葉ははっきりと断言した。青葉は少し考えると時雨に関する資料をすべて机の上に出す。
青葉は目を輝かせる。それは、幾度となく見た面白そうなネタを見つけた時の顔だ。
「まさかこんな所でネタが見つかるとは……。さてさて、まさかの運営の資料の偽造か？　それとも司令官に残った怨念が海の底から時雨さんを呼び寄せたのか？　ワクワクしますね司令官」
しないぞ。というか、いったいなんだ何だ最後のは？　なんでよりによって俺なんだよ。俺が何かしたみたいじゃないか。
今の所、青葉も俺も時雨は存在するということが前提で進んでいるがもし、いなかったらどうするつもりなのだろうか。
「まあ、もしウソだったら……なんかそれっぽい事流しときますよ」
真実を流せ真実を。すると、叢雲がその資料を見て青葉を睨む。
「ねぇ、まず聞くけど、この資料極秘って書いてあるように見えるんだ

けど？　ということは大本営のトップシークレットをなぜあなたが持っているのか聞きたいのだけれど？」
「いえ、それは……。まあ、そんなこと良いじゃないですか。そんなことより意見をくださいよ！　このままじゃ夜怖くて寝れなくなっちゃいます！」
　青葉は一生懸命にごまかすが、ごまかせていない。というかそれ本部から持ってきたのかよスゲーな。
「結論から言うと、私の知る限りそんな艦娘はこの士官学校にいないわ。青葉も知っているでしょう？」
　しかし、あの時確か時雨は言っていた。「自分の鎮守府が解体になったからここに来た」と。
　それを叢雲に聞いてみたところ。
「はぁ？　あんたそんなこと信じたの？」
　一蹴されてしまった。
「普通鎮守府が解体になったらそこにいた艦娘達は現存する他の鎮守府に再配属になるわ。間違ってもこの士官学校に戻ってきたりしないわよ」
　青葉は事前の情報を読み始める
「えー、白露型２番艦時雨。作戦行動中、敵潜水艦による奇襲を受け応戦し敵潜水艦の雷撃が左舷後部に命中。スリガオ海峡にて轟沈を確認と」
　青葉は、時雨の物と思われる、艤装の写った写真を見せる。それは、ほとんど半壊しておりもう原型がわからなくなる一歩手前の状態だった。
　機関部がむき出しになっておりその中身も一部熱で溶けていた。
「ふむ、しかしまさかネタが舞い降りてくるなんて……司令官は持ってますね」
「どうせまたガセとかじゃないだろうな？」
「何を言いますか！　これは本当に信頼できる筋からもらった情報です。間違いありません」
　その筋すらお前の場合は怪しいんだよなぁ。そういえば時雨と初

めて会った時若葉も一緒にいたことを思い出す。
「まずはっきり言っておきますが、同じ艦娘である私が断言します。まず艦娘のコアともいえるこの艤装がここまでやられているとまず航行は不可能です」
はっきりと青葉は言いきった。
艦娘には被害に応じて、小破、中破、大破、と分類され、大破になるともはや戦闘行為そのものが不可能となる。
「ここを見てください、燃料タンクが吹き飛んでいます。どんなド素人が見たってここが吹き飛んでたらもうはっきり言って終わりです」
だから、万が一にも生きている可能性はないと、そういいたいのだろう。
すると叢雲がどこかに電話を掛けだす。しばらく話していると、相手はあきつ丸のようだとわかった。
「ええ、ええ、いつも済まないわね」
そういって電話を切ると立ち上がって帰る準備を始めた。
「あきつ丸が車を出してくれることになったわ。どうにも煮え切らないようだから、確認に行くわよ」
突然そんなことを言い出す叢雲。
「明日は6時に此処を出るわよ。遅れたら置いていくわ」
そういうと、叢雲は帰ってしまった。

次の日の朝、しばらくするとあきつ丸の迎えが来た。
あきつ丸は敬礼をすると俺たちを案内してくれた。
「お待たせしましたであります。車はそこに駐めていますので適当に乗ってください」
外に置かれていたのは迷彩塗装の施されたトラック。まさかこれに乗って来たのか？
「いや、これ……いいのか？」

「ああ、陸軍から秘密でかっぱらってきたであります。上層部から何か言われるかもしれないでありますがクソ喰らえであります（ファック ユー）よ」
あきつ丸は鍵をくるくる回しながら笑っている。
「因みに今回の大移動は特別に許可されているけど、あくまで見学的な意味合いがあるから後でちゃんと口裏合わせなさいよね」
そうして俺たちはその廃墟となった鎮守府に向かうのだった。

「ねぇ司令官？　貴方その時雨と話したんでしょ？　何か特定できるようなこと言ってなかったの？」
ううむ、あの時の事はあまりよく思い出せない。なんせ2週間以上前の話なのだ。それにあの時にされたことのインパクトがでかすぎて会話なんてほとんど覚えていない。
しかし、これだけは覚えている。

「僕は幸せだった」

あの時の時雨の言葉が正しければこれから行く旧鎮守府には時雨の幸せがあるに違いなかった。

これって犯罪じゃないよな？

俺と青葉、そして叢雲とあきつ丸は旧鎮守府に来ていた。
解体され放置されてから、三年ほどたっているため目立った外傷は見られないものの、やはり人の手が入らなくなって老朽化しているというのは目に見えてわかる。
俺がここに来た目的は、写真に写っている時雨の艤装を探し出すこと。もう残っているのかすらわからないが、艤装の移送履歴に記入がなかったため、この資料を信じるのであれば時雨の艤装はまだここにあることになる。
「とりあえず目的を確認するぞ、まずはこの時雨の艤装を探すこと。もしなかったとしても、多分手掛かり位はあるだろ」
というわけで捜索は開始された。が、ここに来て問題が発生した。
「ここの鍵って誰が持ってるんだ？」
「「・・・・・・・」」
皆黙ってしまった。俺もうっかりしていたがなぜ戸締りがされていることに気付かなかったんだろうか？
とりあえず入り口のドアを調べてみる。
錆びついていて、もしかしたら鍵があっても開かなかったかもしれない。
施設は、外観だけ見れば煉瓦で出来ているようだが、中身は恐らく鉄筋コンクリート。
木造ならどこかに穴でもありそうだが・・・。
すると、青葉が屋根の上に登り始める。
「いや、足音消したり中に誰もいないかとか確認する必要ってあるの？」
「もう癖になってるんでしょうね。普段からああいうことしてるから」
きっと高い所に登り慣れているのであろうその動きはさながら・・・泥棒を思わせるようだった。
「司令官、ここ窓割れてますよ！ここから入れます！」

そういって青葉は中に入り一階のドアを開けた。

というわけで手分けして捜索開始。俺たちは二手に分かれて探すことにした。

青葉とあきつ丸は工廠を探し回っていた。

「そうはいっても、もう探す場所ないですね」

工廠の機械や器具はほとんど撤去されており、工廠とは思えないほど広々としていた。

青葉が捜索をしていると各艦娘の名前の書かれた棚を発見する。

恐らくそこに帰還した艦娘達が自らの艤装を置いていたのだろう。

「ええっと、し、し・・・あった。」

時雨の棚もそこにはあった。しかし艤装はそこにはなかった。

「まあ、そう簡単にはいきませんよね。あきつ丸さん！何かありました？」

しかし、返事はない。青葉は恐る恐るあきつ丸を探す。

すると、あきつ丸は何やらノートのようなものを見るのに真剣になっていた。

青葉は声をかけたがその真剣さの余りあきつ丸の耳に届かなかったのだろう。

「あきつ丸さん！」

青葉はあきつ丸の肩をたたくことでやっと気づいてもらえた。

「いやー、申し訳ないであります。実はこのようなものを見つけて・・・」

青葉はあきつ丸が見ていたものを見る。

「あれ？これって・・・」

一方、俺と叢雲はというと艦娘の宿舎に来ていた。というのも時雨の部屋を探せば何かわかるかもしれないと思ったからだ。
「とはいえ、これは・・・虱潰しに探すにしても多すぎないか？」
部屋が多いだけならまだしも、もう名前札も無いので時雨の部屋を探すのが難しくなっていた。
しかもほとんど、何も残っていないためどう頑張ってもそこが誰の部屋だったのかすら分からない。
「大丈夫よ、もしそこが時雨の部屋でそこに時雨の何かがあるのならきっとわかるわ」
もっと希望になるようなことを言ってくれ。全然励ましになってないぞ。
しかし、建付けが悪くなって開きにくくなっている上にいざ開いたと思ったらベッドすら撤去されてる始末。
俺は一体どうしたらよいのだろうか？ここから時雨の部屋を見つけ出せ？無理に決まってんだろ！
とりあえずすべての部屋を調べたがどこにも時雨の部屋と思われる部屋はなかった。
「今までの部屋の中で時雨っぽい部屋はあったか？」
「おかしいわね」
叢雲は青葉からもらった資料を真剣に眺める。
「そういえば、時雨は前線で戦うレベルの高練度艦だったのよね」
すると叢雲は何も言わず、艦娘の宿舎から離れて本館に向かう。
本館の奥に進むと客間の後に提督室があり、叢雲はどんどん進んでいきある場所で止まった。
その扉には、「秘書艦室」と書かれてあった。
「あのね、あんたがもし提督として着任した時は自分の執務をサポートする所謂秘書艦というものが必要になるの」
そしてその扉を開くと、その部屋にだけはなぜか机が残されておりその上に写真の通り燃料タンクの吹き飛んだ艤装が置いてあった。
これ以上上がらないほどに練度のあった時雨は、普段ここにいた司令官の秘書艦だったのだろう。

叢雲は艤装を調べる。今ではかすれてしまっているがそこには確かに「レグシ」と書かれていた。
「はぁ、これで決まりね」
叢雲はため息をつきながら艤装をもとの位置に戻す。
確かに、時雨の艤装がここにあるならば時雨はもう本当にこの世にいないのだろう。
じゃあ、あの時雨は何だったのか・・・
「時雨は戻ってきているわ」
「は?」
俺は耳を疑った。
「だって艤装がここにあるんだし、青葉の言う通りこの状態じゃもう・・・」
「じゃあ聞くけど、この艤装は誰が持ってきたのよ?」
誰がって、艦隊は全滅して・・・あれ?
「ここに書いてある通りなら時雨率いる艦隊は全滅してるのよ。それとも何?幸運にもこの穴だらけの艤装だけがここから遠く離れた海域からここに流れ着いたっていうの?」
幸運・・・、そういえばあいつは自分の事を幸運艦といっていた。そういうことも・・・あり得るのか?
「お二人とも、面白そうな話をしていますね」
ドアから現れたのは青葉とあきつ丸。その青葉は何やらノートのようなものを持っていた。
「実は工廠の方を漁っていたら面白そうなものがありましてね」
青葉が持っていたのは、艦娘の艤装の修復履歴だった。
「まあ、こんなものが残っているとは思わなかったでありますが・・・」
青葉はその修復履歴がまとめられたノートの最後のページをめくる。
最後のページに書かれていたのは、時雨の修復履歴だった。
日付を見ると、時雨が連合艦隊を率いて出発したおよそ三日後となっていた。
そして、その修復期間は三日にもおよびそして修復完了の印は押さ

れていなかった。
「なぜ沈んだはずの艦娘の艤装を修理しているのでしょうか？もしかして、ブラックジャックが死体の手術をしたように、弔いのつもりだったのでしょうか？ですがもし、幸運にもこの艤装だけが流れ着いたとしてもこの鎮守府の提督の辞職と解体が言い渡されるギリギリまでやらせるでしょうか？」
　青葉はペンを口元に当てて歩き回りながらまるで探偵のように自らの考えを述べていく。
「そういえば、もし時雨さんだけでも生きていれば提督の辞職だけは免れたかもしれないと聞きました。」
　つまり、もし時雨がこんな状態になりながらも生きて帰って来たんだとしたら・・・。時雨がどうにか復帰できるようにギリギリまで修理を粘った？
「じゃあ、時雨は生きてる？お化けじゃない？」
「まあ、まだお化けの方が確率としては高いわね」
　おいおい、俺がお化けに呪われていない可能性を否定しないでくれよ。
「もしそうだとしたらなぜ生きているのに轟沈判定を提出したのかわからないじゃない。自分から全滅したといって自分の立場を不利にしているのよ」
　ふむ、確かに時雨が生きているのなら生きていると報告すればまだどうにかなったかもしれない。
「そしてもう一つ、この鎮守府は解体されてから3年たってるわ。つまり時雨は3年間行方不明になってたってわけ。それなのになんでいまさらになって現れたのかよね」
　叢雲は考え込む。
「時雨はこの3年間どこで何をしていたのかしら？」

幸せっていいな

帰ってきた俺たちはとりあえずこれからの事を話し合う。
「それにはまずこの案件を片すことでありますな、まずは……」
あきつ丸は時雨の資料を俺に見せながらこれからの事を話す。
「まずこの資料を作った人間を、つまりここの提督だった者に話を……聞きたいところですが彼はもう一般人、軍が勝手に手出しできないであります。だからここはまずこのツッコミどころ満載の報告書に轟沈の印鑑を押した上層部の連中から絞っていくでありますか」
その時のあきつ丸はかなり悪い顔をしていた。まあ、確かにそういうことならあきつ丸の方が得意なのだろう。
つまり、ここからはもう俺たちにできることはないということだ。まあ、事の真相は時雨が出てきた時にでも聞こうじゃないか。
「時雨がそのまま出てきてくれれば話は早いんだけどね。何よりこの報告書の不備の証拠になるし」
まあ、そうなんだけどあいつがそう簡単に出てくるかな？
そもそもあいつは普段何処にいるんだ？　しかも基本俺一人の時にしか現れないし。
「この艤装どうする？　持ってきちゃったけど……」
「持っていきましょう。ここに置いておくわけにはいかないわ」
叢雲は壊れた時雨の艤装を持つと外に出ようとする。
すると、艤装からネジが零れ落ちる。
「これ相当傷んでるわね。どうにかして直せないかしら？」
「しかし、ここが解体されてからこの辺りの海域は少し物騒になりましたな」
3年前はこの辺りもちゃんと守られていたらしいがあの鎮守府が解体になってから深海棲艦の進攻が激しくなりこの近海にも現れるようになったらしい。
「いい？　あんたもちゃんとこの近海くらいは守れるようにならないとこうなるのよ」
おいおい、脅しかよ。これでも最近はちゃんとやってるんだぜ。

俺たちは士官学校の工廠に時雨の艤装を預ける。
「それじゃあ、とりあえずこれメンテナンスしておいてもらえないかしら」
「……これをですか？　まあ出来ることはしますけど」
工廠の人はかなり戸惑っていたがとりあえず保管しておいてくれるらしい。
しかし、疑問は残る。結局時雨は俺の前に現れたり消えたりして何がしたいのだろうか？
自分の存在が面倒につながるということを恐れているのだろうか？
何故、艤装があんなことになってまで帰ってこれたのだろうか？
しかし、そのすべては時雨に会った時に……少し聞きにくいな。
そんなことを思いながら帰路に就くのだった。

そして2週間がたったころ俺はあきつ丸に呼び出された。
「何で俺だけ呼ばれたの？」
「実はこの間の件なのでありますが……」
あきつ丸はあまり浮かない顔だった。
「まあ今回の騒動で色々とボロが出た上層部の連中がいて一斉検挙に移ったのでありますが、この資料について問い詰めたところある人物からまあ賄賂を受け取っていたことが分かったんですよ」
「ある人物って？」
あきつ丸は大きなため息をついた。
「艦娘の生態なんかに興味のある研究者たちであります。艦娘の存在が確認された当時から艦娘に関して研究しようとした組織が多数あったのでありますが、現元帥が作り出したシステムによってそれはかなり難しいものになっていたのであります」

「じゃあ、どうやったんだよ」
「本来あの手の連中は大概は何かしらの所から資金援助を極秘裏に受けているであります。深海棲艦や我々艦娘の存在は金になるでありますからな。研究により何かしらの成果が得られれば、その資金援助をした組織がもうかる仕組みになっているであります。我々の戦闘時のデータなんかも裏でどこに送られているかわからないであります」
「そいつらの目的は何なんだ？」
「さぁ？　もしかしたら我々の細胞とかで新しい生物兵器やクローンなんかを作るつもりなのかもしれませんな」
　あきつ丸は冗談交じりに笑っていた。
　しかし、そんな話を俺にされても困る。上層部に裏で賄賂してたやつがいたとかいう情報は、俺を直接呼び出して真っ先に伝えるようなものとは思えない。
「まぁまぁ、話を聞くであります。これは彼女の事にもつながるでありますからな」
「彼女って……まさか」
「そう、時雨殿の事であります。彼女の話も実は出てきたのでありますよ」
　時雨が……その上層部と研究者との賄賂に関係していた？　どういうこと？
「それは……」
「あきつ丸さん！　大変です！」
　突然入ってきたのは時雨の艤装を預けた工廠の従業員だった。
「時雨さんの艤装が消えてしまいました！」

「やっぱりお前が持って行ったんだな」
艤装の消失を聞いた俺たちはその犯人であろう時雨を探し回っていた。
壊れた艤装をもってたたずんでいる時雨を発見した。
「まあ、もともと僕の物だからね。でも、持ってきてくれてありがとう提督。ずっと探してたんだ」
時雨は自分の艤装をその場に置くとその上に座る。
「なぁ時雨、その……聞いてもいいか？」
「何だい提督？　もしかして僕に興味があるのかい？　なんでも聞いてよ」
何でも聞いてよいといわれたものの、やはり聞きにくい。彼女が轟沈判定の事とか、あきつ丸から聞いたこととか……まあ、まずはそこからだな。
「お前、あの鎮守府で何があったんだ？」
「……ああ、あれの事かい。じゃあ、僕が轟沈判定を食らってることも知ってるんだね。あれはね、間違いなんかじゃないんだよ。僕は確かに轟沈したよ。艦娘としてね」
艦娘として？　それって……
「僕はもう艦娘としての力は残ってないんだよ。ＨＰ０で戻ってきて出撃する事が出来ない。いわば、バグのようなものさ」
時雨は自分の事を「スクラップ」と呼んでいた。彼女はもう戦える体ではなかったということか。
「みんな必死に僕の艤装を直そうとしたんだ。でもだめだった。それで、僕の提督だった人は辞職を迫られたわけさ。僕は絶望したよ、結局僕が提督を辞任させたようなものさ。しかも、僕にはもう提督の役に立てるような力は何も残ってなかったからね」
時雨は自分の艤装から立ち上がるとそれを持ち上げる。その時、時雨の艤装からネジがポロポロと零れ落ちる。
「でも僕は幸せだったよ。結局最後には提督の役に立てて僕は幸せだったんだ」

「幸せ?・お前それ本気で言ってんのかよ?」
俺はあきつ丸から艤装の消失の話を聞いてから移動しながら少しだけ話を聞いた。それを聞いてお世辞にも時雨が幸せだっただなんて思えなかった。
「だってお前は売られたんだぞ!・大金と引き換えにお前は研究材料として研究機関に・・・お前それでも幸せだったっていうのかよ!」
時雨は少しキョトンとすると笑顔で言い放った。
「もちろん幸せだったさ。だって、提督が幸せになれるんだから」
「こんな僕でも提督の役に立てる最後の任務さ。嬉しかったなぁ、もう役に立てないと思ってた分満たされた思いだったよ。思わず泣いちゃったものさ」
「提督が提督でいられるうちに最後に役に立てるチャンスだったからね。喜んで受け入れたさ。そして連れていかれた。なんでも、どんなに傷ついた艦娘でも瞬時に治すことのできる薬を作ってたんだって。そのために僕の体は何度も傷つけられたさ」
「折られて、擦られて、抉られて、焼かれて、切られて、撃たれて、抜かれて、千切られて、除かれて、殴られて、捻られて、絞めつけられて、縛られて、爆ぜられて・・・何度も何度も同じ事の繰り返しさ。でも、僕は死ねないんだ。まあ、もともと死んだようなものだったからね」
「でも、それでも幸せだったんだ。だってこうやっている間も提督は幸せでいてくれるんだから」
それが、時雨の空白の3年間だった。
俺は言葉を失った。何と声をかけてよいかわからない。なんでそ

れで幸せを感じられるのかわからない。艦娘はみんなこうなのか？
「じゃあ何で俺の所に来たんだよ。お前にはその幸せでいてほしい提督がいたんだろ？」
「死んだんだよ。提督は死んでしまったんだ。仇を取ろうとも思ったけれど自分で死んだんじゃしょうがないよね。その時になって僕はそこにいる意味を失ったんだ。そんなときに君の事を教えてくれた奴がいたんだ。君ならこんな僕でも役に立ててくれるって」
　俺はそいつの事がなんとなくわかった。
「白露か？」
「知ってたんだね。いやぁ、ホントに腹が立ったよ。僕はこんなに何も出来ないのに艦娘である事すら出来ないっていうのに白露は何だって出来るっていうじゃないか」
　時雨はネジを拾い上げる。するとそのネジは時雨の腕位のサイズになった。
「艤装は僕の一部だからね、こんなことも出来るのさ。ねぇ提督、僕はもうどんな提督の役に立つこともないと思ってたんだよ。なんせ僕は艦娘の力を失った艦娘……いや、もう艦娘を名乗るわけにはいかないよね、今も戦ってる艦娘達に失礼だ。でも、こんな僕でも役に立ててくれる君がいてくれてよかったよ。だから、僕は君に幸せになってほしいんだ」
「幸せって、人によって違うっていうよね。不幸って言ってるやつは贅沢なんだよ、今の自分より不幸な奴は絶対にいてその人が不幸を感じてるとは限らない。なんで自分が人生の本当にどん底にいるってわかるのかわからないや」
「幸せはね、不幸を受け入れることだよ。提督」
「不条理を、誤射を、不都合を、裏切りを、理不尽を、まるで艦娘にとっての提督のごとく受け入れることで僕みたいに幸せになれる」
「僕は駆逐艦としての力は失ってしまったけれど、代わりにそんな幸運艦（幸せを運ぶ艦）に僕はなったんだ」
「僕にとっての幸せは君を幸せにすること。それさえできれば僕は満たされるんだ」

そして、時雨は持っていたネジを俺の胸に押し込んだ。

「ねぇ……提督、僕と同じ(一緒)に幸せになろうよ」

妹、妹、妹だ!!!

叢雲と合流したあきつ丸は事の次第を話す。
「艤装を持ち出したのは時雨の仕業ってことで間違いないの？」
「ほかに犯人なんていないでしょう。それと余談ですが時雨殿はあまり提督の事を良く思っていないと思うであります」
「どうして？」
「時雨殿は研究機関に大金で売られてしまったんでありますよ。提督殿も沈めてしまった仲間たちへの感情や辞任するときのネガティブになった精神に付け込まれたんでしょうな。「無職になった後の生活を支えてやる」とでも言われたのでありましょう」
その前提督も決して不真面目な提督ではなかった。しかし、時雨率いる艦隊を沈めてしまい自分の立場も失墜するところに声を掛けられたのだ。
「その司令官はどうなったの？」
「自殺しましたね。恐らく自分のやってしまった事に対して耐えきれなかったのでしょうな」
「……そう。しかし、まさかそんな手口で艦娘を攫っていくなんて……って、司令官は？　司令官の事を快く思ってないんだとしたらあいつを独りにしたら危ないんじゃないの？」
「あっ、まずいでありますな」

「お疲れ様、提督」
もう見慣れてしまったこの部屋にいるのはやはり白露だった。
こいつがここにいるということは俺はまた死んだか気を失ったんじゃ
「……分かってるよ、ごめんね色々と教えてあげられなくって。あんな事突然話したからってなかなか受け入れてもらえることじゃないからね。まさかこんなに早く事が進むなんて思わなかったよ」

「言い訳がましいかもしれないけれど」と申し訳なさそうな顔をする。
とりあえず時雨の事について話してほしいんだけど。というかちょっと今までよりも話の内容が重いんだけど、白露さん？
「時雨は……研究室で何されてたんだ？」
「まあ、艦娘の兵器開発だね。今回作ってたのは兵器というより回復アイテムって感じだけど」
回復アイテム？　艦娘の？
「なんでも艦娘の傷が瞬時に治るんだってすごいね。まあ、前の世界じゃあ高速修復材って言われてたけど。まあ、この世界ではまた好きなように呼ぶんじゃないの？」
高速修復材……そんなもん出来たらすごいことになるんじゃないか？
「まあ、そうだね。ある意味革命かもね。艦娘を物凄い速さで戦場に出せるんだから」
う―ん、で俺はその時雨に……刺されたよな？
じゃあ、俺はどうなってるんだ？　時雨にでかいネジで胸を貫かれて……また死んだのか？
「あいつ俺に何をしたんだ？　殺したの？」
殺されたら殺されたで別にいい、前も同じことあったし。
「そんなわけないじゃない。私の妹にそんな娘はいないよ。もしそんなことをする子なら私がメッ！　てしてるよ」
つまり躾けをするということか？　笑顔で言うな笑顔で。
「あれは一種のスキルみたいなものだよ。艦娘の力を失った時雨が代わりに自分で生み出した力だよ。あれを食らった人は時雨と同じで何もかもを失うけれども幸せに満たされている状態になる。満たされているからそれ以上何を得ようとも思わない。駆逐艦であることが出来なくなって今度は幸運艦として自分のそんな幸せを周りに運ぶんだよ。いや、押し付けるといってもいいかもね」
私がいなかったら今頃提督は幸せしか感じない廃人になってたかもねとドヤる白露。そもそもこうなったのお前のせいなんじゃないの？

「まあ、時雨にはもう一つ私からスキルを送ったけれどもうまく使ってくれるといいな」
　ん？　今なんか不穏ことを言ったような？
「そして時雨に私の一京２８５８兆０５１９億６７６３万３８６５個あるスキルのうちの一つを時雨にプレゼントしたの」
「お前そんなに持ってたのか……」
　時雨は確かに白露は何でも出来るって言ってたけれど、これやべぇな。
「フフッ、提督をゆりかごから宇宙の墓場までのイッチバンの白露だからね！」
　いや、そんな会社のキャッチコピーみたいに言われてもな……
「それで？　そのスキルって何なんだ？」
「現実をなかったことにするスキル。これがあればこの世のあらゆる事象から思想までなかったことにできるっていうものだよ。これで時雨の艤装を直して時雨自身も艦娘の力を取り戻せるんだよ。これで万事解決、流石白露ってことだね」
　ふーん、あれ？　でもあの感じだと艦娘の力を取り戻しているように見えなかったぞ？
「うーん、あくまで時雨は失ったままで君を幸せにしたいみたいだね」

　目を覚ますとそこは俺と時雨が初めて出会った医務室だった。
　慌てて胸を確認する。そこには刺されたネジも何もない。
「僕の幸せを受け入れてくれなかったんだね、提督。いや、もしかして

白露の仕業かな」
「すまねぇな、人の考えをそのまま受け入れるような奴じゃないからな。しかも、お前のちっぽけな幸せじゃ、俺は満足しないからな」
　すると時雨はにこりと笑うと俺の顔に自分の顔を近づけてきた。
「うん、やっぱりそうだよね。僕みたいな最底辺の幸せを受け入れてくれる人がいるなんて始めから思ってないよ。人は不幸に感じることでそれを乗り越えることを正義の様に思うし、みんなそうなりたいんだ」
「いや、そういうことが言いたいんじゃなくてな」
「いいんだよ、君がそういうと思ってもう別の方法を用意してある」
　おいおいおい今度は何をするつもりだよ？
「まず、君があきつ丸や青葉に僕の事を広めてくれたおかげで賄賂をもらってた連中は皆左遷か辞職になった。そのおかげで空いたポストを埋めるため役所は繰り上がりになる、うまくやれば君は初めからそれなりのポストに付けるはずさ」
　ん？　何？　そんなことになってるの？　……俺が二階級特進？
　まあ、俺二回くらい死んでる気がするからな。
「そして……はいこれ、あげるね」
　時雨はポケットから何かを出すと俺の手に握らせた。俺に渡されたのはＵＳＢメモリだった。
「何だこれ？」
「それは艦娘といろんな化学薬品と素材の相性なんかを調べたデータさ。その中には艦娘の傷を一瞬で癒すものまでデータとして入ってる。他の鎮守府……それどころか今海軍が喉から手が出るほど欲しがってるものさ。これを君が使えば君の艦隊の戦果は他とは比べ物にならないくらい上がるよ」
　……それってお前が実験台になった奴じゃないよな？　いや、まさかね。
「それは僕が実験台になって完成したんだ」
　……俺にどうしろっていうんだ？　時雨はこのつもりで俺に近づいてきたのか……

初めから時雨は自分の幸せを押し付けて俺が幸せになれないことをわかっていたようだ。自分の身を犠牲にして時雨が考えうる最大の物を俺に幸せの代わりとして与えるつもりらしい。
時雨は俺にまたがりさらにお互いの息が掛かるくらい顔を近づける。
「これがスクラップ（僕）の使い方さ提督。僕はこうなってしまったけれど立派に君の役に立てるんだ」
「ねぇ、提督？　君は今幸せかい？　幸せだよね？　幸せだと言ってよ」
時雨はすごくおびえている様子だった。恐らく時雨は心配なんだろう、俺がこれで幸せになってくれるかどうかが心配なんだろう。
「あー、うん。すごく幸せだな。うん」
「そう、幸せなんだ……。嬉しいなぁ、フフフ」
時雨は頬を赤くしてから場をビクンッと震わせる。今もしかして……イッた？
何？　もう性癖のレベルなの？　白露さんもう俺諦めていいかな？
時雨は俺から降りると、自分の艤装からネジを取り出した。
「フフフ……ふぅ。さて、僕にできるのはここまでかな。これで僕が君を幸せにするプランが完成する」
「おい、何をするつもりだよ」
時雨は、手のひらの上でネジを転がしながら椅子に座った。
「僕が存在しなかったことにする」
「お前それ白露からもらった……」
現実をなかったことにするスキル、白露はそれで艦娘の力を取り戻させるつもりであげたらしいが……
「それも聞いていたんだね。はぁ、ホントに皮肉が効いてるよね。すべてを失った僕に更に失わせる力をくれるなんて……」
やべぇ、白露の意図を完全に勘違いしてるんじゃないかコレ。
「でもね、失うことは決して不幸なだけとも限らないんだよ。幸せになるってことは、自分かもしくは他の誰かがその分の不幸を請け負っ

てるってことなんだ。それは失うことを望んでいたり、望んでなかったり、知っていたり、いつの間にか失ってたりすることもあるけれど。そして、その二つは決して引いても0にはならないんだ。たいていの場合不幸の方が大きい数字になるんだよ」
「今の僕ならロミオとジュリエットの物語をハッピーエンドにできる。でも、そのためには彼らは多くの物を失わないといけないんだ。失うことを受け入れた人だけが真の幸せを得られるということだよ」
「僕の幸せは、僕自身の消失で完成するんだ。僕がいなくなればこの一連の騒動でのことを実証できる証拠はなくなる。君がそのデータを誰からどうやって入手したのかもわからなくなる。君が昇進して、艦娘を高速で修復し戦場に出すことが出来る薬を手に入れたという結果だけが残るんだ」
「それに僕の体細胞は別の機関に送られた。そのうち僕の複製でも作るんじゃないかな？　僕みたいなのがいたらその子のマイナスイメージにしかならないからね」
　ととん、白露の意図とは外れた解釈をするなぁ。まあ、何をしろとは言わなかった白露にも責任ある気はするが……あれ？　これもしかして、時雨の事を白露から丸投げにされてるだけじゃね？
　そして時雨は、自分の手の上で弄んでいたネジを大きくさせる。
「それじゃあね。僕を幸せにしてくれて、ありがとう提督」
　そして、時雨は自分で自分の腹にネジを刺した。

君の好きにすればいいんじゃないかな？

「……なぁ、白露。ちょっと話があるんだが？　そういえば時雨はお前がその研究所から助け出したのか？」
「ううん、私はただ時雨に会いに行っただけだよ。お姉ちゃんと一緒に君のもとに来いって言ったんだよね。君はまだここに来てすらいなかったけれど君がここに来ることはわかっていたからね」
「それで時雨は？」
「行かないって言ったんだ。自分がここにいるのは自分の意志で提督の幸せのために此処にいるのだから邪魔をするなってさ。でも私はあの提督がもういないことを知ってたからそれを伝えたの、そしたら時雨は解剖用のメスで自分の胸を抉ったんだ」
　それでも時雨は死ねなかった。艦娘としての力もなくして提督もなくした。何もかもを失っても、それでも死ねないと時雨は白露に訴えた。
　時雨には、白露なら自分を殺してくれると思ったのだろう。
「それで？　お前はどうしたんだ？」
「殺すわけないじゃん、大事な妹だよ。まさか、自分の妹から実の姉に殺してくれって言われるだなんて思わなかったよ。私は大体何でも出来るけどまさかそんなこと言われるなんて……」
　白露は少し寂しそうな顔をする。
「時雨には私と一緒に君のもとに来ないかって言ってみたんだ。でも、時雨はそれもだめだって言ったんだ。もう艦娘の力は残ってない自分が新しい提督の所に行くことは出来ないって。でも、私は君の事を紹介したんだ。君なら時雨の事を受け入れてくれるって」
　全く、俺の事を勝手に話しやがって、まだ俺提督にもなってないんだぞ。
「というか俺は時雨を受け入れるなんて言ってないぞ」
「提督は絶対に時雨の事助けてくれるよ。まだあってなかったけれど提督の事はイッチバンよく知ってるからね」
　白露は俺の顔を見て微笑みながら言ってくる。……なんだよ、少し

かわいいって思ったじゃんか。
「それでそれから時雨とは？」
「もう一回会いに行ったらもう時雨はいなかったよ」
いなかった？　それって自分で抜け出したってことか？　研究所の連中は時雨を簡単に逃がしたのか？
「違うだろうね。だってあそこにはあの時点で研究者が３０人、警備員が１００人、時雨の世話をしてくれてた人が１０人くらいいたんだけどね、みんないなかったんだ」
「みんないなかった？　まさか……時雨が殺ったのか？」
白露は首を横に振る。
「違うよ、本当にもぬけの殻だったんだ。まるで突然人がいなくなったって感じだよ」
突然いなくった？　あれ？　それってもしかして……
「現実をなかったことにするスキル……」
研究所の連中を存在しなかったことにした？
「そうみたいだね。ちゃんと艦娘として復帰できるようにしてあげたのに……」
「いや、お前それ暴走しちゃってるじゃねーか！」
なんてもの与えてんだお前は。
「大丈夫、殺したんじゃなくって存在しなかったことにしたんだから誰もその人たちの事覚えてないよ」
そっちの方がよっぽど凶悪じゃねぇか。まあ、時雨にひどい事してたんだからそのくらい……いやダメだろ
……まあいい、そんなことよりも時雨の事だ。
「なぁ白露。時雨の事どうしたらいいんだ？　あれじゃかわいそうだ、あんなこと幸せだと思ってるなんてさ」
それを聞いた白露は何言ってんだこいつって顔をする。
「何言ってんの提督？」
ついでにご丁寧に口に出しやがった。
「提督はもしかして時雨が不幸だと思っているのかい？　あの子はいつだって幸せを感じていたんだよ。艦娘の力を失って絶望していた

時に、たとえ騙されてでもあの提督が自分の事を提督のために役にたててくれたって感じた時、時雨は本気で幸せを感じていたんだからね」
「あの子はそれ以上の幸せを知ろうとしない。もしそれ以上の幸せ知ってしまえばその幸せまで守らないといけなくなる。もしそれが失われたら不幸になる。それが今のあの子なんだよ」
「幸せなんて人によって違うものだよ、色も違うし、形も違うし、大きさも違う。あの子の幸せは少し他の人と違うかもしれないけれど、あれだって立派な幸せの形なんだよ。それで聞くけれど君は時雨の幸せを受け入れるの？　それとも「そんなの幸せじゃない！」って自分の考え（幸せ）を押し付けるの？」
　俺は……わからない。そんなことを言われも青二才の俺に正解を出せるわけがなかった。
「まさか提督は正解を出そうとしてるの？　もう、提督はかわいいなぁ。いい？　どんなすごい賢将だって正解を出せた人なんていないんだよ。正解かどうかはその後それを見た人たちが決める事なんだよ。その人たちはその時々の考えうる最適解を出したに過ぎないんだよ」
「だからそれがどんな正しい事じゃないっていわれたって少なくとも私達は貴方が正しかったって言うから」
　それはお前が艦娘だからじゃないか？
「そうだよ。私達は生まれながらにして提督の部下になることが決められているし提督も私達を部下にすることが決まってたようなもの。だから、私は艦娘として時雨のことをどうしたって構わない。もし、まかり間違って死んでしまったとしても私はあなたの事を正しかったというよ」
「でも……もし、私が姉としての意見を言わせてもらえるのなら……どうか時雨の事を助けてあげてください。よろしくお願いします」

「……何で止めるんだい？　提督」
「いや、これで止めない方がどうかしてるだろ？」
　俺はネジが時雨の腹に達する前に腕をつかむ形で止めていた。
「わからないなぁ、僕がいたって提督のためにならないんだよ。僕は提督のためになる力を……艦娘の力をすべて失ってしまった。君のそばにいたって意味はないんだよ」
「意味とかそんな小難しい事じゃないさ。じゃあ、こういえばいいか？　お前には利用価値があるって」
　俺は時雨の腕からネジを取り上げると時雨の前に椅子をもってきて座る。
　しかし、実は嘘である。白露にお願いされたからというわけでもない俺はただ単純にこいつの手の上で踊らされていたのが少し悔しかっただけだ。別に時雨がどうなっても構わないという意味ではもちろんないが何というか……単純になんだか腹が立つ。
　それはきっと俺の心の中でこんなのおかしいと思っているからだろう。
　でっち上げでも何かしらの時雨がまだここにいないといけない理由を作らないといけない。このままでは勝ち逃げみたいじゃないか。
「ふーん、僕にまだ利用価値があるのかい？　それで？」
「ん？　何？」
「僕にどんな利用価値があるっていうんだい？」
「それは……えーと」
　時雨には恐らく感情的になっても意味はない。あくまで理論的に時雨の幸せの定義に沿って時雨を会心させる必要がある。
「役に立つとかそんなのどうだっていいんだ！　お前に生きててほしいんだよ！」
　みたいの事を言っても、
「艦娘に提督の役に立てないのに生きろなんて君は提督として最低だ

ね。君には失望したよ。さようなら」
とか言われそうなのだから困ったものだ。
いや、会心というか納得させるといった方が正しいか。……正直めんどくさい。もっと柔軟に対応して生きることが出来ないのか？
しかし、どうしようか。秘書艦？　違うなぁ、それで納得するわけがないんだよなぁ。
「話をする前に確認だ。お前は俺の事を提督といっている時点で俺の艦娘、俺の部下ということだな？」
時雨は頷く。当然の事であるということらしい。
「じゃあさ、お前が俺から何命令されても文句は言わないわけだな？」
「うん、ナニ命令されても文句はないよ」
なんか、意思疎通に弊害があった気がするなぁ。まあいいや。
言質は取ったため、とりあえず提案するしかない。
俺はもしかしたらこれから叢雲たちに嫌われしまうかもしれないが、言わなければならない。
「お前さ、言ってたよな？　自分の代わりに誰かを幸福にする艦になったって。だからさ、その幸運艦になってみないか？」
俺の言葉に時雨は少しキョトンとした顔になった。
「どういう意味だい？」
「お前のその立ち位置と存在は海軍からしてもメディアには隠したいものだろうし、何かあった時の切り札になるだろ？　それにお前のその艦娘の力の代わりに手に入れたその力は俺の役に立つだろ？」
時雨の失う力は君の失敗や落ち度をなかったことにできる。仲間の艦娘が何かしても何もなかったことにできる。つまり……
「つまり……僕に汚れ仕事を押し付けるつもりかい？」
まあ……そういうことになるな。俺達の不幸を時雨に押し付けることで俺たちが幸せになる。
今回やったような暗躍をこれからも続けろと言っているのだ。最悪、みんなから嫌われる役回りになるかもしれない。
こんなこと叢雲に言ったら殺されてしまうだろう。
しかし、時雨が納得する形で生きてもらうにはこれしかない気がす

る。
「そっか……僕にもまだ……利用価値があったんだ。提督のために……生きれるんだ」
時雨の目尻から涙が込み上げてきた。そして涙はボロボロととめどなく流れ出す。
「……嬉しいよ。ありがとう……提督」

一体何が彼女をこうしてしまったのかはわからない。しかし、今回で分かったことはもし提督の役に立てなくなってしまったらこんなことになってしまうかもしれない艦娘もいるということだ。
いや、こいつが特別なんだと信じたい。・・・もしかして、白露型はみんなこう？

後日談というか・・・うんぬんかんぬん

「それって何も解決してなくない？」
「まぁ、そうだな。結局のところ問題を先延ばししただけだからな」
　叢雲と先日の事件についての報告をする。
「でも、あの場ではああするしかなかったんだよ。その場で自殺……じゃなくて自消？　される方が困るからな。とりあえずは生きる目的があることが大事なんだよ」
　時雨には経験値が足りないのだ。ああいった仕事を与えれば否応にでも人と関わることになる。それで時雨が少しでも変化してくれるのを待つしかない。
　俺だけじゃない、他の誰かをそして自分自身の幸せをもっとたくさん願えるようになってほしい。それが時雨にとっての不幸だとしてもだ。
　つまり、時が解決してくれるのを待つというわけだ。
「はぁ、人が心配して探してたら時雨とイチャイチャしてたなんてね。
　叢雲は大きなため息をつくとお茶をすする。
　というか、何がイチャイチャだ。あんなイチャイチャもうごめんだよ。
「それはそうと、今、上の連中は大騒ぎよ。時雨の存在が上層部でチラついたせいで何人かの人間が閑職に飛ばされたり解雇されたりしたわ。今はあきつ丸たちが隠し通そうとしてるけれどこの件で時雨が生きてるんじゃないかって勘づき始めてる」
「そいつらに時雨が見つかったらどうなるんだ？」
「……少なくとも快くは思わないでしょうね。時雨は海軍で人身売買が行われたという海軍の汚点の証拠となるんだもの」
　全く、困った奴らだ。今まで国のために戦ってたやつを自分たちの害になるからって叩き落そうとしやがって。あいつはもう戦う力も残ってないんだぞ。
　まあ、そいつらは時雨で甘い汁を吸っていた奴らだ。自業自得ってやつだな。

しかしそういうこともあり、あまり公式的な処置がとれないため寮にも入れてあげることも出来なかった。
結局、大淀さんが匿ってくれることになった。というかそもそも時雨は大淀さんの所に匿われていたらしい。普段時雨が何処にいるのかと思っていたら意外と身近なところで匿われていたようだ。
どうりで俺と時雨が初めて出会った時時雨の事を唯一知っていたわけだ。
何故匿ったのかと聞いてみると。
「人は伝説が好きなんです。たとえ沈んでしまってもそれだけは沈むことはありません。それは後に残る者たちにとってのあこがれや畏敬になります。特に数多の戦場から生還した駆逐艦の伝説なんてそうですよ。私もそんな伝説にあこがれる艦娘の一人なんです」
ということらしい。
しかし、まあ何というか。とりあえず一段落がついた感じだろうか。
そもそも俺はまだ正式に提督になっているわけですらないからもう少し落ち着いてからにしてほしかったが……
「何休もうとしてるのよ。あんたが時雨の自殺を止めてそんなことを言ったんだったらあんたには時雨の事をきちんと面倒見る義務があるわ。シャキッとしなさい」
叢雲からのきつい激励の言葉が飛んできた。それに関しては当然だと思っているが、時雨の過去についても色々としがらみが多いし難しいものである。
叢雲には研究所であったことに関しての一件はまだ話していない。また面倒を増やしたくはないのだ。
「大淀さんの部屋はここね。大淀さんはいないらしいわ」
ドアをノックすると時雨の声が聞こえる。
「入るわよ……あれ？　いない？」
確かに部屋の中から時雨の声が聞こえたはずなのに部屋に時雨の姿はなかった。
まさか……自分を消した？　嘘だろ今更そんなことをするなんて

……
「何をしてるんだい？　早く部屋に上がりなよ」
いつの間にか後ろに回られていた。時雨は俺達の背中を押して部屋の中に押し込む。

「今日は何をしに来たんだい？　提督は僕と一緒にいる事を望んだとはいえ、僕と一緒にいる所を見られるのは避けた方がいいと思うんだけど」
「ああ、それなんだけど。用があるのは俺じゃないんだ」
用があるのは叢雲なのだ。
「私は貴方に謝らないといけないわ。私の父は非人道的な連中から艦娘を守るために今のシステムを作ったのだけれど、そのシステムには穴があった。父の代わりに私が謝るわ」
叢雲は時雨の前で頭を下げた。
「謝ることはないさ、どれもこれも僕が望んだことなんだ」
「でも、貴方はそのせいで貴方は日の目を浴びる事が出来なくなってしまったのよ。これから自分の存在を隠さないといけないのよ。本当にそれでいいの？」
「僕にとっては提督が幸せでいてくれればそれでいいのさ。それに僕は雨だよ、もともと僕は日の目とは無縁の存在なんだよ。まあ、それでも僕に謝りたいのなら燃料や弾薬の代わりに毎週のジャンプ代をもらえればいいさ。これは僕の燃料代わりみたいなものだからね」
叢雲は俺に困ったように視線を送る。な？　こんな感じなんだよ。
「……はぁ、わかったわ」
「ん、ありがとう。そろそろお金が切れそうだったんだ」
時雨はジャンプを読み終わったらしくそれを本棚に直す。
「お金？　誰からもらってたんだ？」
「ああ、それなら白――――」

時雨がそこまで言いかけると大淀さんが戻ってきた。
「ああ、叢雲さん。あきつ丸さんが呼んでいますよ」
「え？　ああそう……」
叢雲は大淀さんに言われるがまま、部屋を出て行ってしまった。
何というか今白露って言いかけなかった？
「何？　お前もしかして白露からジャンプ代貰ってたの？」
「……」
目をそらすな。まあ、もしかして白露は結構妹を甘やかすのかなぁ？
「それで？　その後調子はどうなんだ？」
「うんそうだね。まさか、提督が僕が存在することを望むとは思ってなかったけれど、僕はこの通りさ」
……少し元気ないのかな？　何というか疲れが見える感じがする。
でもジャンプは読むんだな。
「ああ、少し……何というか白露と、喧嘩になってしまってね。まあ、僕が勝てる相手ではなかったんだけどね」
まあ、勝てないわな。何で喧嘩になったんだ？
「そもそもの発端は僕が提督に危害を加えたことを怒られてしまってね。白露型のマイナスイメージに繋がるような事をするなと言われてしまってね。まあ、そもそも存在自体がマイナスの僕には無理な話なんだけどね」
ああ、あのネジを差し込まれた時の事だろうか。
「それで僕はそもそも消えるつもりだったって言ったら……少し怒られちゃったんだ。まあ、せいぜい１０回死んだ程度かな？」
ん？　自分が消えることを怒られたのに１０回死んだの？　死んでほしくないから１０回死ねって怒られたの？　白露もよくわかんないなぁコレ。
しかし、そうか……白露と喧嘩したのか。なんだろうこういう時仲を取り持ってあげた方がいいのだろうか？
しかし、白露の気持ちもわからなくはない。白露はかなり長い間独りぼっちだったようで、俺は初対面であったが本人はかなり久しぶり

に俺と再会した時かなり嬉しそうだったし、時雨の事を本気で心配していた。
これは俺の予想だが、彼女はただもう一度姉妹達に会いたいだけなのだと思っている。
時雨はもう出撃できる体ではないが、白露にとってはもはやそれでいいのかもしれない。その証拠に時雨にはもう一度艦娘の力を取り戻すことを強要することは一切していない。
ただ、時雨に生きていてほしいのだ。たとえどんな姿でも、どんな考えをもっていたとしてもだ。
俺としてはその白露の気持ちを時雨に伝えるべきだと思った。
「いや、それは喧嘩した原因じゃないよ。その後、白露がサービスとか言って勝手にジャンプに色を付けたんだ。ふざけてると思わないかい？　ジャンプで色がついてていいのは表紙と巻頭カラーだけなんだ。それがわからないなんて僕の姉として恥ずかしいよ」
「ふざけてるのはお前らの方だよ」
後１０回くらい死んだ方がいいんじゃないか？　もう死なない体なんだろ？
何お前らチートみたいなやつらがアホみたいなことで喧嘩してんだ。
まあそれも、微笑ましい姉妹の姿だろうか？
……やっぱなんか違うか。

卒業できると思ったかダボが!!

「とうとう、あなたにも卒業が近づいてきましたね」
いつもの様に講義を受ける俺に突然そんなことを言い始める鹿島教官。
そうか……俺もそろそろ卒業か。
それにしてもここに来てから色々あったなぁ、いやホントに。他の提督たちよりもかなり奇天烈な経験をしているのではないだろうか？
叢雲に大井に……時雨の事。とりあえず時雨は一安心なのだろうか？　後は俺がここを出るまで大人しくしててくれればもうそれで安心できると思うのだが……
「何安心したような顔をしているのですか!!」
「え？　何？　どうしたの？」
俺はそんなことを考えていると鹿島教官に怒られる。
「まさか、貴方はこのまま卒業できると思っているのですか？」
え？　違うの？　もうこんなとこおさらばして、僻地ではぐれた深海棲艦狩りながら生活する物語がスタートするんじゃないの？
「きちんと提督になるには卒業試験としてこれから試験官として来てくださる提督との演習に勝っていただきます」
なるほど先輩提督に勝てと……うん、もうダメだ。俺は一生ここから出られないらしい。
「安心してください。新人のあなたに対してそこまで本物の編成で挑むわけがないでしょう」
まあ、それもそうか。しかし、考えてみたら俺のもとに来てくれる艦娘は何人いただろうか？
「ですからあなたにはまず、その試験官の方に挨拶に行っていただきます。失礼のないようにしてくださいね!!」
なんかヤバい奴が来るらしい・……とりあえず逃げるか。

しかし、一刻も早くここを出たい俺は仕方なくその先輩提督といわれる人の元へ向かう。
俺は普段は絶対に入らない場所にある扉の前に立つ。心なしか少し緊張してきた。
俺はとりあえず扉をノックする。
「入りたまえ」
女性の声だった、しかもかなり若い感じのまだ２０代前半なのではないかという声だった。
その年でこうして試験官としてくるということはもしかしたらかなりすごい提督なのかもしれないという勝手な想像をしながらドアを開いた。
「貴様やめるのじゃ！　わしは体まで許したわけではないぞ！」
「ああ、新人の子かい？　ちょっと待っててくれ。今、新人の艦娘の性能テストをしているんだ」
今俺が目の当たりにしているのは提督の恰好をした変態が艦娘を強姦している現場だった。
しかも、襲われている方の艦娘の声を聞いたことがある。確か、若葉の姉の……初春だったか。
「失礼しました」
俺はそっとドアを閉めるとその場を後にした。お願いだからこの人が試験官じゃありませんように。

「やぁ、やぁ、やぁ、君が新しく提督になる子だね。そうだね、きっとそうに決まってるさ。だって君の制服は士官学校の物だし、私の方にももうすでに君のデータベースはそろってるんだ。ほら、君の資料だよ、すごいよね君の個人情報丸わかりじゃないか、だから君の名前が「叔目（おめ）　是手（つなで）」君ということもわかっているよ。これから君の事をな

れなれしく「おめ君」と呼ぶことになってしまうけれど構わないよね。フフフ、これが先輩の特権というものさ。おっと、名前を名乗る必要があるかな？　私は「海督（かいてい）手提（てさげ）」気軽に　てさげん　と読んでくれればいいよ。しかし君のような優秀な提督予備軍の子にはもうすでに私の名前くらいわかってるんじゃないかな。失礼したよ、なんせもうすでに私のこの重巡クラスの艦娘達にも負けず劣らずのこの巨乳にちゃんと名札を付けているわけだからね。ああ、そうだ私としたことが本当に失礼したよ、君みたいな健全な男の子からすれば名前なんかより私のスリーサイズが気になるというものだよね。でも、残念ながら僕と君はまだそういった関係じゃないからお姉さんともう少し親密な関係になってからにしような。でも、私としてもスタイル抜群の艦娘には負けてないと思うんだ。うちのエース級重巡の高雄型なんて頭のおかしいくらいにスタイルがいいもんさ。私も何度も私自ら整備を担当しようとしたのにみんな恥ずかしがっちゃうんだ。可愛いものだろ？　そのくらい私は艦娘を愛しているのさ。彼女たちは女の子なんだよちゃんと愛されるべきだと思うんだよ、それが出来るのがきっと提督の力なんだと思うんだ。知っているかい？　適性のある提督たちは艦娘の存在にほとんど違和感を持たないんだよ。普通の人達からすれば彼女たちの存在は人間の姿を模した何かということなんだろうね。彼らは少し彼女たちを受け入れるのに少し時間がかかるのだろう。でも、彼らの事を責めるわけではないさ、おかしいのは私達の方なんだ。いきなりこの世にあらわれた人間のまねごとをする彼女たちの事をこんなにも普通に愛してしまえるのはきっと私達の方がおかしいんだろうね。でも私の話をここまで聞いてくれた君には、どうしてこんなにお喋りするのがヘタクソなグラマラスボディのおねぇさん提督が君の前に現われたのかという説明をしないといけないよね。事の始まりは私が気持ちよくお昼寝をしていた時の事なんだがね、突然たくさんの上司が総入れ替えになって皆がてんやわんやしている時にその渦中から逃れていた私にあのファッキン糞上司からお告げがあってね。本当にひどい上司なんだよ、屋上ですやすや寝ていたところに突然封筒を叩き付けたわけだか

らね。私は初めは封筒の中身を見た時はお見合い写真なのかと思ったわけだ。当然だよね、渡された封筒の中に男の人の写真入っていれば健全、容姿端麗、有眠有給で働く私のような女の子ならみなそう思うものさ。でも、よくよく話を聞いてみたら新しい階級になった私への新しい任務というじゃないか。私は緊急事態だと思ったものだよなんといったって私の艦娘達が私を執務に戻すための怒号の声を子守唄にお昼寝するという私の数少ない楽しみの一つを邪魔してまで新しい任務を私に届けてくれたんだ。そしたら、君も聞いての通り私に君が提督になるにふさわしい人間かどうかテストしろということだったんだわけだね。いやはや、本当につくづくひどい上司だよ、君も見てもらって分かるように私はコミュ障陰キャの人間不信なんだ。そんな私が性欲満載の新人の提督のもとに行けばこんな私では断れずにそれはもうどこぞの薄い本みたいに君にこの場で押し倒されて乱暴されちゃうというところまで矮小な私の脳みそで考えてしまったわけだ。まあ、そういう時には責任取ってもらって一緒に良い鎮守府を作っていこうというお話になるからこれはこれでハッピーエンドといえるよね。でもそんな私としては君がとても健全な男の子でよかったよ、それとももしかして幼女主義の男の子なのかな？　まあ、そんなことはどちらでもいいんだ、そういったことは君の艦娘達とやってくれたまえよ。　いやぁ、それにしても後輩が増えるのは嬉しいものだよ。なんせ私もかなり最近入った新参者でね、といってももう2，3年たつわけだがそれでも元帥殿に比べれば死ぬほど新参さ。でもいくら君が未来ある可愛い後輩だからといって手加減するわけにはいかないからね。それはもう死ぬほど頑張ってくれたまえ」

「一言でお願いします。先輩」

「ＫＩＬＬ　ＹＯＵ」

うーん、会話が出来ない。

どうやら、この人が俺の先輩提督であり俺の卒業試験官らしい。もう少しまともな奴はいなかったのか？

というか、なんか話の中で俺が名前よりもスリーサイズを気にする

変態みたいになってる気がするがきっと気のせいだろう。
しかし、そうか……鹿島先生が仲間を集めさせたのはそういった意味合いがあったのか。しかし、ここまで来たらやるしかない早くこんな所から脱出しよう。
「しかし、新人の子にセクハラするっていうのはどうなんです？」
「敬語なんて使わなくていいよ、君と私はほとんど同い年じゃないか。それにセクハラじゃないよ、君は本当にエッチだなぁ。これは一種の体調のチェックだよ、これは大事なことだよ。艦娘のむくみ一つ筋肉の緊張一つ見逃したらダメなんだ」
俺の目にはおっぱい揉んでるように見えたんだが？
「おっぱいのむくみをチェックしてたのさ」
「あんたほんとに提督かよ」
因みに、その揉まれていた初春は真っ白になって椅子に寝かされていた。これからの彼女の事を思うと何というか……いや、彼女は若葉の姉なのだきっと強く生きてくれるだろう。
「私は彼女たちを不思議なくらいに愛しているからね。君もそうじゃないかい？」
「うん、でもそれは艦娘にセクハラすることの免罪符にはならないよね？」
「そんなこと言う子には、卒業試験はうちの精鋭にします」
気分次第で編成を変えないでほしい。ほんとに何でこんな奴が提督やってるの？　いやマジでさ。いやこんな奴だからできるのか？
「とはいっても本当は私はまだ君の試験官が出来るほどの階級じゃなかったんだ。でもなぜかお上の連中が総辞職してね。仕方なく私が出てきたのさ、そしたら私も晴れて出世というわけさ」
「ふ～ん、そうなんですか」
うん、なんでだろうね。俺知らないぞ、うん。
「だから……そうだね。私は実はこの士官学校から新たにうちの鎮守府に受け入れてあげようと思ってね。その子達と戦ってもらおうと思うんだ。そっちの方が面白くないかい？　いや、フェアといった方

がいいかな？」

「それで？　どんな編成だったの？」
　何故かさっき話されたばかりの事がもうすでに皆に広まっており俺が帰った時には全員が俺の部屋に集合していた。
「あ、因みに伝えたのは青葉です」
　知ってるよ。他の奴だったらびっくりだよ。まあ、そんなことはいい。俺はありのままの事を伝えた。
　叢雲は固まってしまった。それを聞いていた他のみんなも固まってしまう。
　なんせあの戦艦様がいたのだ。しかもあの長門型である。航空巡洋艦？　とかいうのもいるらしい。
　そして自分たちの戦力を見返す。
「ええっと。もしかして青葉が最大火力ですか？」
「そうだな。重巡お前しかいないからな」
「「「……」」」
　皆がしばらく黙ってしまった。
「本当にこのままやるの？」
「マジムリゲー、引きこもるわ」
「このままいくのは由良も難しいと思います」
　でも、このままでは俺とここの艦娘達は一生ここから出られない。どうする？
「仕方ないわね、うちの方でコネを使ってみるわ。あっ、その試験官の名前教えてくれないかしら？　証拠隠滅のために閑職に飛ばすなり辞職させるなり消すなりするわね」
「あ、青葉が書類の偽造しますね」

「叢雲ダメだよ。こういう時はこの北上様に任せた方がいいよ、機密が漏れた時の処理は私達の専門だから」
　何でもうすでに皆俺がもうダメという事前提で話を進めているのか。全くここで諦めるような子に育てた覚えはないぞ。
「逆に十分な戦力もないのに戦うなんて無策な馬鹿に育てた覚えもないのだけれど？」
　心を読むな心を！
　しかし、こうなれば期日までに戦力を増やす必要があるな。そうでないとあの試験官の先輩の命が危ないぞ。
「戦力の増強ですか……」
　しかし、今更誰かを受け入れる事なんてできるだろうか？　特にこう……重巡クラスの人をだな。
「誰か知り合いいないの青葉？」
「うう、私にそれを頼みますか……。まあ、その……いないわけではないのですが、航空巡洋艦が二人ほど」
　何だよ、誰かいるのかよ。ゴシップにしか興味のないお前にそんな知り合いがいたとはな。
「いいじゃないか、航空巡洋艦。うちの戦力になってくれるなら願ったりかなったりだな」
　しかし、青葉はあまり良い顔をしていない。むしろ何故かあまり気の進まないようだ。
「その人は時雨さんの資料を集めてもらった人なんです」
　ん？　どういうことだ？
「あの……実は先日提督の元に持ってきた資料は私が手に入れたものではありません。自分だけで調査出来る範囲には限界がありますし、大本営のセキュリティーは思ったより厳重でした」
　まあ、さすがに大本営といったところだろう。青葉の技術にも限界はあったようだ。いや、発展途上といった方がいいだろうか？
「そもそもセキュリティーの穴とか以前にそもそも今どき紙の資料しか存在してないのがおかしいんですよ！」
「じゃあ、どうやったんだよ？」

「簡単ですよ。ああいった場所にネット上からではなく直で侵入できる……まあ、何といいますか工作員のような役割が出来る方に協力を依頼したんです。ですから今まで言っていなかったのですが、ここに来てから知り合った私の情報提供者がいるんですよ」
　なるほど、つまりそいつらにどうにか続きの調査をお願いするわけだな。しかも、大本営からこれを持ってこれるほどの技術がある。きっと青葉よりも信頼できるんじゃないか？
「じゃあ、お前から顔つなぎをしてくれればそれで済むんじゃないか？」
「それが出来れば苦労しないんですよねぇ」
　おいおい、どういうことだ？
「ああ、えっと、違うんですよ。ただその……ちょっともめ事がありまして、ちょっと会いにくいといいますか会いたくないといいますか」
　だってまさか、こんなことになるとは思わなかったじゃないですか!!　と最後には逆切れをかます始末。
「実は初めてあったはずなのに何故か無性に腹が立つとか言われてなぜか殴られましてね」
　青葉は目からハイライトを落としながら自分の頬をさする。
「ふーんそうか。それで何やったんだ？」
「何で私が何かやった事が前提何ですか！　ホントに初対面だったんですよ！」
　うーん、きっと前世でなんかしたんだろうな。悪いことはするもんじゃないね。
「ですから……司令官に行っていただいてもよろしいですか？」
　何で俺なんだよ。大体俺が関われるような奴じゃないだろ
「大丈夫ですよ。相手は艦娘ですから司令官ならすぐに打ち解けられますよ」
「何を根拠にそんなことを……」
　青葉が言うように彼女はここに来る前は軍で暗殺や工作員の仕事をしていたらしく、艦娘と発覚してからそのままここに来たらしい。
「まあ、このご時世ですから艦娘の方が稼げるんですよ」

正直、お前の話を聞いてる限りそいつに会いたいっていう気持ちが一ミリもわかないんだけど。
「それじゃあ、お願いしますね」
こちらの返事も聞かずにそのまま話を進め始めた。
「大丈夫です。私から顔つなぎをすると問答無用で殴り飛ばされますがここはうちの妹を使いましょう」
「相手は元軍人なんだろ？　流石に衣笠ちゃんがかわいそうだろ、お前が行けよ」
「私は殴られてもいいというんですか!?」
すったもんだあったがとりあえず次のアクションは決まったな。

故郷へ帰ろう

俺はその航空巡洋艦に会いに行くということだが、やはり青葉がついてくる必要があったようで俺の後ろに隠れるように付いて来ていた。

しかし、そのままその青葉は御用となり今現在青葉は粛清を受けていた。

「カントリーロード～♪　このみ～ち～ずっと～行けば～♪」

「え？　ちょっと持って!!　そんなの押し付けられたら青葉ただじゃ済まないので助け、嗚〟呼〟嗚〟呼〟嗚〟呼〟あぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

「ごめんなさい、熊野さん！　鈴谷さん、助けてください～！」

「あの町～へ～♪　続い～て～る～気がす～る～カントリーロード～♪」

その熊野と呼ばれる航空巡洋艦は青葉の言葉に全く反応することなく無表情で海老吊りになっている青葉に鉄板で焼かれたばかりのアツアツの神戸牛をフォークで突き刺し青葉の頬に押し付けていた。

何故かカントリー・ロードを歌いながら。

「何でカントリー・ロードなんだ？」

「熊野めちゃくちゃ道に迷うんだよね～。それであの歌にシンパシー感じちゃったんじゃないかな～」

俺の隣で青葉の叫びを眺めている鈴谷は青葉を全く助けるつもりはないようだった。

この二人は最上型重巡洋艦４姉妹の３番艦鈴谷と４番艦熊野だった。青葉はこの二人に会わせるつもりだったのだろうがどうも鈴谷の言うところによると熊野と青葉はそりが合わないらしい。

同じ重巡洋艦同士仲良くできないものかと思うのだが、それでも何というかまるで前世で何かしたんじゃないかってぐらいに熊野は青葉の事をこうして嫌っているのだ。でなければ初対面で顔面を殴ったりしないんじゃないかな？

しかし、今回こうして青葉が何とも言えない状態にあるのは決してそういった因縁とかではない。

そもそも鈴谷としては青葉とは仲良くしてほしいらしく。普段ならもうその辺にしときなよと青葉を助ける側に回る役をしていたらしい。

しかし、今回その鈴谷ですらそれを止めないのはあの時雨の資料が原因のようだった。

「私はあの資料を軍人時代のコネで手に入れましたの。それは知っておりますわよね？　私その時言いましたでしょう？　これをいたずらに流したり人に見せたりするなといいましたし、その意味も説明しましたわよね？」

どうやら、あの時雨の資料を俺たちに見せたことが原因だった。あの資料は極秘で、もし知られれば鈴谷や熊野たちもただでは済まないのだろう。

しかし、青葉としても時雨はもともとこの世にいないものとして資料に書いてあったため青葉も安心していたのだろう。

「今、軍の上層部がその時雨の噂でいっぱいになっていますわ。危うく私達が疑われかけたのですけれど？」

そう言いながら、アツアツの神戸牛ステーキを青葉のほっぺたに押し付ける。

「熱い！　それはもう本当に申し訳ないと思っておりま、アッツイ!!」

俺も本当は青葉を助けるつもりだったのだ。しかし、それを聞いてしまうと何というか……何も言えなくなってしまった。

というか、俺たちはこの二人を勧誘しに来たのに何をしているのだろう？

「私は貴方と初めて出会った時は無意識にあなたの事を叩いてしまったことを申し訳ないと思っていました。そのお詫びもかねてあなたの依頼を受けましたのに……かと思えば自分のした事を棚に上げて私達に艦としてあなた方の艦隊に合流しろですって？　冗談じゃありませんわ!!」

熊野たちは自分がこの件に関わっていることを完全に抹消するハメになったらしい。監視カメラの証拠を差し替え、青葉の資料を完全

に回収しすべて燃やした。
あきつ丸が収賄の証拠としてその資料を突き付けたため回収するのにかなり苦労したらしい。彼女たちは本当に肝を冷やしたらしく。まあ、こうして青葉にケジメを付けさせているわけだ。
しかし、そもそも青葉に時雨の情報を依頼したのは俺であり、俺にも非があるため青葉をどうにか助けてやりたいのだが……
「なぁ、もう許してやってくれないか？　あいつも別に悪気があってやったわけではないんだからさ」
「ダメですわ、こういう時はきちんとやっておかないといけませんわ」
そういいながら、ステーキを食べさせる。しかし、だんだんステーキが適温になってきたせいか普通に食べだす青葉。
「あー、ステーキ怖いわー。ものすごく怖いわー」
そして調子に乗り出す青葉。
「そうですか、あちらにできたてのを用意しておりますのでいくらでも食べさせてあげますわ」
「え？」
まあ、そのうち飽きるだろ。
「も、もう無理です……勘弁してください……。もう入らない……」
青葉ももう限界のようだ。流石に海老吊りの状態でステーキを10枚食べさせられればそりゃあ限界だろう。
因みに俺も一枚ごちそうになった。やはり適正な姿勢で適量食べるのが一番だな。
「でしたら、私の質問に答えていただけますか？　そうすれば解放して差し上げましょう」
「わかりました！　何でも答えます！」
その時の青葉は序盤で仲間を裏切り相手方に付こうとしたら即相手方に殺されるモブのような雰囲気を感じざるを得なかった。
そんな青葉を軽蔑の目で蔑む熊野は大きなため息をつきながら答える。
「時雨は本当にいたのですか？」
「……」

青葉は俺の方に視線を向けてくる。
「……」
俺は小刻みに横に振りバラさない様に伝える。
「いえ、残念ながらいませんでした。あきつ丸さんと調査しましたがその資料の不備から収賄を見抜いたわけですし……。確かにあの壊れた艤装は存在したわけですから」
「ですが、それでは収賄の理由がわかりませんわ。それに時雨さんが関わっているのだとしたら……」
「まあ、私は一般通過艦娘ですのでそこまでの事は伝えられていません。もしかしたら調査を続ければ何か見えてくるのかもしれませんが……」
「そうですか……」
青葉は、普通にうそをついた。あくまで真剣に紳士的に誠心誠意を持っているかのように見せながら答えて見せた。
今までの醜態を挽回するかのような立ち振る舞いだが、何分吊られているので格好がつかないのだが……
「どうしてそんなことを?」
青葉は時雨の事ついて興味を示した理由について聞き出そうとする。
熊野は鈴谷と目配せする。すると鈴谷が話し始めた。
「実はね、青葉が時雨の事についての情報を何の気なしに求めてきた時、私達の姉の最上が真っ先に反応したんだ。でも、どうしてそこまで興味を持ったのかわからなかったんだ。時雨がかつての前線を支えた伝説のような存在だっていうのは知っていたんだけど……」
彼女たちの姉が時雨に興味を? どうして? 疑問だけが頭をぐるぐる回っていく。
情報が足りないからどうしようもない。もしかしたらまた問題になるかもしれない。
彼女たちは元々軍人であり、何処とつながっているのかわからないから時雨を守るためにもあまり情報は渡さないほうがいい。
まあ、これが今の俺に出来る事だろう。勧誘どころではなくなって

しまったため、俺は青葉を連れていったんここから離れる算段を考える。
　すると、熊野が突然こんなことを言い始めた。
「そういえば貴方がたは卒業試験のために私達の力が必要なのですわよね？」
「ああ、そうだな。お前たちがいればすごく助かるぞ」
　熊野は「そうですか」というと、しばらく考え事をしたのち俺の方に近づいてきた。
「でしたら考えて差し上げなくもないですわよ？　条件を呑んでいただけるのでしたらですが」
　まさかの熊野自ら俺の部隊に来ることを考えてくれているらしい。まあ、願ったりかなったりだが・・・
「一緒に時雨さんの捜索を手伝っていただけたらですが・・・」
　そういうと、熊野はにこりと笑った。どうしてこうなったんだ？

くまののこのこげんきなこ

解放された青葉と俺はこれからの事を話し合う。
熊野の言うところによると。
「だって、あなた方としては私達の力が必要なんですわよね？　私としても最上の目的が知りたいですし最上が時雨に固執する理由も知りたいです」
ということらしい。
「鈴谷はどう思います？」
鈴谷は少し考えると笑顔でＯＫを出した。
「そうだね、妹達に秘密で何かしてるなんてだめだよね」
「そういうわけですので明日から時間厳守でお願いいたしますね」
何故だか俺たちの承諾を聞かずに話が進んでいる。困ったことになった。
まさか、時雨の事を探してるやつがいるなんてな。しかも、彼女たちは軍に属していたため時雨の事を軽率に漏らすわけにはいかない。
今回は彼女たちの事は諦めて、時雨の事を諦めてもらうしかない。
「まさか、熊野さんが時雨さんに興味を抱くとは……。何か裏がある気がしますね」
真剣に言っているが、目はキラキラしている。まあ、こいつはひどい目にあっているのにこれだから質が悪いんだよなぁ。
「はぁ、出来るだけ問題は起きないでほしいんだけどなぁ」
俺はこの卒業するかもしれないというときにまた何かに巻き込まれたらと思うと厄介だなと思うのであった。
そういうわけで俺は彼女達が諦めるまで彼女たちに付き合わなければならない。
時雨がほとぼりが冷めるまでこの寮で身を隠していてくれればいいが……。何なら誰かに頼んで匿ってもらうか……
そんなことを考えていた俺だったがさらに面倒なことになった。
熊野が行方不明になったらしい。
俺達は甘味処を待ち合わせ場所にしていた。と言うかさせられた

のだが、次の日時間通りに来た鈴谷が顔面蒼白でそう言ったのだ。
「行方不明ってなんだよ。ただの遅刻じゃないのか？」
「じゃあ、もし私よりも3時間も前に出たって言ったら？」
ちょっと何言っているのかわからない。3時間前ってお前らの寮からここまで20分もかからないだろう？
「熊野は目的地にたどり着けない謎の呪いにかかってるんだよ。いつもは私と一緒に行くんだけど……」
じゃあ、ここから寮までを探してみるか……
「そんなんじゃ見つからないよ。この一帯に捜査網を敷かないと最悪一生見つからないかも……」
なんだそれは……迷い牛にでも憑かれてるのか？　しかし、そこまで言うのなら探さないわけにはいかない。
俺は知り合いの暇な艦娘達に電話をすると何人かは手伝ってくれるといってくれた。
「じゃあ、俺達も……鈴谷？」
鈴谷は迷うことなく歩き始める。もしかしてもう目星がついているのか？
鈴谷についていくと着いたのは艦娘寮だった。すると鈴谷は玄関前にしゃがみ込み何かを探し始めた。
「トラッキングって知ってる？　足跡とかから特定の人や動物を追跡するんだけど……熊野は朝早く出て行ってるから朝霜で足跡がわかりやすくなってるね。熊野の靴は鈴谷のと一緒で……あった」
そういうと袖の内側からナイフが出てくる。彼女たちは全身にそういったものを隠し持っているらしい。
それで地面に目印を付けた。
「熊野の歩幅に目印を付けたからこれをたどっていけば熊野にたどり着けるよ」
そういうと鈴谷は俺にドヤ顔をする。可愛い顔していながらやはりこういった技術は彼女が軍のエージェントだったことがわかる。
「いや、毎回迷子になる熊野を追ってたら自然と身に付いたんだよ」
結構悲しい理由だった。もしかして毎回こんなことやってるのか

？
「正直怖いんだよね、海で迷子になったらこれ出来ないからさ……」
そんなこんなで俺たちは熊野の足跡を追う。
そして、いつの間にかこの艦娘寮の入り口まで戻ってきてしまっていた。熊野は艦娘寮を一周していたようだ。
「何で一周して戻ってきてるんだ？」
「提督これ見て、この辺りを何度も踏みつけてる。この辺りでしばらく停滞してたんだろうね」
もしかして、何か探していたのだろうか？
「これは多分結構歩いたのにいつの間にか元のところに戻ってきて困惑してるね。本人は目的地に向かってると思ってるみたいだから……」
鈴谷は一切驚くことなくそんな考察をし始めた。もう慣れたものなのだろう。
そしてようやく進んだ先もやはり目的地に向かっていなかった。
足跡をたどりながら鈴谷から時雨や最上の事について聞いてみる事にする。
「それで、お前らの姉の……最上だっけ？　なんで時雨の事を追ってるんだ？」
「それがわかんないんだよね。今までその名前を聞いたこともなかったのに……」
それは、つい最近の事何故か時雨の噂が上層部の間でささやかれ始めたころらしい。
完全に俺たちが時雨と関わったからだ。どうしよう俺達思いっきり関係者だ。
問題は最上が時雨をどうするつもりで探しているのかということだ。最上は元々軍の所属だったこともあり軍のそれも上層部とつながっている可能性も高い。しかも、このタイミングということは……もしかするかもしれない。
万が一も考え、出来るだけ早く、そして慎重にこいつらから離れる必要がある。

しかし、彼女たちにそれを教えないのはなぜだろう？　普通大人数で探した方が早いのではないだろうか？
「そうなんだよね、今までこんな事なかったのにいきなりこんな水臭いことされてもね……」
鈴谷はそんな寂しそうな話をケーキを食べながら話す。実はあんまりどうでも良いのでは？
「それじゃあ、お前らは最上に何かあったんじゃないかと思ったってこと？」
「うーん、まあ大体そういうことかな？」
ふーん、そうか……恐らくこいつらは時雨の事を本当に知らないのだろう。
しかし、時雨の事を知っている以上油断はできないが……
「それなら、普通に最上を探せばいいんじゃないか？」
「あー確かにそうかも」

俺たちが熊野の足跡をたどってたどり着いたのはなぜか演習場だった。それは、俺たちの集合場所とは全然違う方向だった。
「さて、聞き込みしますか」
鈴谷は熊野がここに来たかもしれないということに一切疑問を持つことなく中に入っていく。
「なぁ、本当にこんなところに来るか？　いくら何でも……」
「熊野ならあり得るんだよ。最近やっと車を目印に道を歩くのをやめてくれるようになったんだけど……」
何言ってんだ？　車を目印にしたところで車は移動するから……
鈴谷は死んだ目で演習場に入っていった。その目にはどれだけ熊野にそれを教え込むのが大変だったかを物語っていた。

それでも迷子になっているのだが……

演習場に入ると鈴谷は持ち前のフレンドリーさで皆に聞き込みを始める。

「お疲れ～、演習終わり？　ちょっと聞きたいんだけどさ、熊野見なかった？　……そうそう茶髪の女の子ね」

「やあやあ、ちびっ子達よ。熊野を見なかったかね？　……うん、また迷子なんだ」

恐らく、あの誰とでも気兼ねなく話せるあの性格も鈴谷の持ち味の一つなのだろう。熊野はまだよく知らないが何というか少し小難しい性格に感じたが……

しばらくすると鈴谷が戻ってくる。

「どうだった？　熊野はいたか？」

「ううん、いなかった。誰も見てないのかなぁ？」

すると、演習場の方からすごい音が聞こえてくる。多分誰かが演習をしているのだろう。

「鈴谷も訓練とかしたのか？　その……軍でエージェントやってたんだろう？」

すると鈴谷は俺の口を押さえる。そして、口に指をあてて「シィー」といってきた。

「ダメだよ提督。私達は一応海軍に知り合いのいる艦娘ってことになってるんだよね。エージェントだったことは秘密なんだ。訓練も一緒にやってるし」

まあ、確かにその方が一般から来たほうが多い艦娘の中には溶け込みやすいのだろう。もしかしてそのキャラも溶け込むために作ってるのか？　……いや、まさかな。

「でもお前ら軍人だったんだから。ここの訓練なんて結構余裕だったんじゃないか？」

「それ本気で言ってる？　いくら訓練受けてたからって海の上に立つのに慣れてるわけないじゃん。しかも、あんなでかい口径の兵器持っ

てだよ？　しかも、私航空巡洋艦じゃん？　他の子達よりもやらないといけないことが多いんだよね。艦載機飛ばしたりとかさ」
確かにその通りだ、みんなあまりにも普通に海の上に立つものだから割と簡単に出来るものだと思っていた。
そうだ、たしか航空巡洋艦は砲撃や雷撃のほかに偵察したり潜水艦も攻撃したり制空権取ったりと大変らしい、便利ではあるのだが……
「まあでも、艦載機飛ばすのは結構すぐにできたけどね、昔、私達敵の偵察に鷹を使ってたりしたんだよ。まあ、かなり古典的な方法だけどこれが結構私達の手になじんだんだよね。それに私達に丁寧に教えてくれた人がいたし」
「誰が教えたんだ？」
「それは……あっ！扶桑さん！　久しぶりー、何やってんの？」
鈴谷はずっと前からの知り合いのようですぐに駆け寄る。俺はその人物を知っていた。というかあまり思い出したくない人だった。

迷子の時は動かない事!!

「扶桑さん！　久しぶりー、何やってんの？」
「あら……鈴谷さん。久しぶりね……」
　なんとあの扶桑だった。俺は瞬時に周りを確認する。まさかこんなところで出くわすなんて……
「どうしたの提督？　挙動不審だよ」
「いや、山城が……」
「山城なら……あそこですよ」
　すると扶桑さんが演習場を指さす。指さした方向を見ると山城が演習を行っていた。
　しかし、様子がおかしい、山城は一人で戦っているのだ。相手は複数いるのにもかかわらずだ。
「何で一人で戦ってるんだ？」
「それが……分からないんです……。いつも一人で……私の事なんか気にしなくていいのに、私に必ず見ているようにって……」
　うーん、山城が何をしたいのかわからない。まあ、シスコンには厄介な奴しかいないことは大井の事でもう十分知っている。
「昔っからだよね。私達が一緒に組もうって言っても頑なに断るし……。あっそうそう、扶桑さん！　ここにいたんなら教えてほしいんだけどさ熊野を見なかった？」
「……ゴメンナサイね。見ていないわ……ゴメンナサイ……こんな欠陥品のポンコツはせめて誰かの役に立たないといけないのに……ゴメンナサイ」
　扶桑はメソメソと泣き出した。すると、俺の後ろに殺気を感じた。
「ネ・エ・サ・マ・ヲ・ナ・カ・シ・タ・ナ？」
　次の瞬間、俺の視界が揺れて気を失ってしまった。
「もう、同じ相手に何度もやられてるようじゃだめだよ提督」
　いやいや白露さんや。あれは不可抗力ですってば……ハッ！

俺が目を覚ますと鈴谷が山城に対して弁明をしていた。
「いや、違うんだよ。そういうつもりで言ったんじゃないよ。だから泣かないで！」
「ああ、また私のせいで提督にご迷惑を……」
「姉さま、ご安心ください。そもそもこの男がお姉さまに近づかなければいいのです。寝ているうちに今ここで始末しましょう」
ああ、これは……起きないとやばいな。
「あら、起きたのですか。これから止めを刺そうと思ったのに……」
危なかった。まあ、また白露にお世話になるだけだが……そういえば何か気になること言ってたような……？
「それで？　まだ姉さまを諦めていないのですか？」
「いやいやいやいや違うっての。俺はただ鈴谷の付き添いで……」
というかなんだこいつは？　俺の後ろにこっそり近づいて首を折るとか訓練されたアサシンだろうか？
「まあ、鈴谷から言わせてもらえば首折られて平気な提督も提督だけどね」
それは白露が……とは言えない。夢にしか現れない艦娘とか頭おかしいとか思われるし何より時雨に足がつく可能性があるかもしれない。
「はぁ、いいから姉さまに近づかないで頂戴」
うるせー、近づきたくて近づいたんじゃねーよ。というか、山城はさっき演習場で演習をしていたのではないのだろうか？
何でここにいるんだ？　そこまで考えて気付いた、山城はすでに大破していたのだ。
「なあ、お前もしかして……瞬さ……」
「股から引き裂くわよ？」
うーん、先ほど大破した奴のセリフじゃないな。
「ねえ、山城。そろそろ卒業しないとやばいんでしょう？　何をこだわってるのかわからないけどそろそろ考えないとやばいんじゃないの？」
鈴谷は冗談交じりに言っているが、実際ヤバいのであった。あの大

淀さんが俺にどうにかして引き入れてくれと泣きついてきたほどだからな。
山城と一緒に入った同期はもうすでに卒業し現役でバリバリ戦ってるのだ。
「なぁ、山城さんや。お前は何がしたいんだ？　とっととこんなとこ出て前線から離れながらやっていけばいいじゃねぇか」
「う、うるさいわね。あんたには関係ないでしょう？　姉さまは……私が幸せにするの……」
山城は小さくなりながら答える。山城には山城の何かがあるのだろう。
だがとりあえずは聞いておかないといけない。
「なあ、山城？　俺の部下になる気はないか？」

「いやー、なかなかいいマッスルスパークだったね」
「冗談じゃないよ」
何であいつは口より先に手が出るんだ。普通に断る方法を知らないのか？　全く……
「結局、熊野見つからなかったなぁ」
ああ、そういえば熊野を探しているのだった。扶桑姉妹がいたから完全に忘れていた。
「もう三隈に頼もうかなぁ。あーやだなぁ、何されるんだろうなぁ。もう「く・ま・り・ん・こ」したくないなぁ」
「何だくまりんこって」
「……提督のエッチ。責任取って」

「え!?」
すると、俺の携帯が鳴る。時雨からだった。おいおい、今はまずいって……
しばらく無視していれば切ってくれるだろうと思ったが、なかなかコールが止まず鈴谷に怪しまれてしまった。
「提督、出ないの？」
「あーうん。出るよ」
俺は仕方なく応答のボタンを押す。
「あー、もしもし？」
「もしもし、提督かい？　今、困っているんじゃないかと思ってね」
う～ん、鈴谷と一緒の今、お前と話している現状が困ったことなんだが……
「今何やってるんだ？」
「運動不足だったからね、ちょっと○ングフィット○ドベンチャーをね」
何やってんだお前は。みんながてんやわんやしてる時に一人だけ遊びやがって。
しかし、これが本来の女の子の姿なのではないのだろうか、むしろこうして楽しんでいる状況はかつての時雨を知る俺としては喜ぶべきだろう。
艦娘の束縛から解き放たれた彼女はある意味無敵の存在となったのだ。
「僕が狙われていることは知っているよ。そして君が僕のために僕を隠そうとしてくれていることも知ってるよ。だから……うん、僕は大丈夫だよ」
うん、いつもの時雨だから大丈夫なのかな？
「おう、気を付けろよ」
「うん、これから気を付けるよ。ああ、その前に君に伝言があるんだった、忘れる所だったよ」
「ん？　なんだ？」
「熊野は施設の道案内の看板の前にいるらしいよ」

「どーして、一人で行っちゃうのさ！　心配したんだよ！」
「その……申し訳ありませんわ。今度こそ行けると思ったのです」
鈴谷に結構こっぴどく怒られる熊野。
「イヤー助かりましたよ。あのままだと気まずくてやってられないところでしたよ」
「何で青葉がいるんだ？」
俺は時雨に教えてもらったため看板の前にいた熊野のもとに行けたのだが、実はその前に熊野の元には青葉がたどり着いていた。
恐らく俺がみんなに熊野の捜索をお願いしたから青葉が動いてくれたのだろう。
しかし、なぜ青葉がたどり着けたのだろう？
「熊野さんはどうやら道に迷った時は道案内の看板を見るようにしているようなのですが結局そこで2時間ほど立ち往生していたみたいですね」
青葉は熊野の迷子になった時の動向は調べ済みだったようだ。
「うっ、うっ、青葉に動向がバレるなんてエージェント失格ですわ」
「まあまあ、過ぎたことはいいからさ。ケーキでも食べよう？　提督が奢ってくれるってさ」
「……ん？」

「うん、それじゃあこれから気を付けるよ。それじゃあね。提督」
時雨は通話を切ると、持っていたスマホを地面に落とした。その手は血で汚れていた。
「いいのかい？　君の愛する提督でしょ？　嘘なんてついていいの？」

時雨の体は全身銃創や切創だらけになっており、ナイフや矢が胸や頭に刺さっていた。
「艦娘を引退してからしばらく研究所暮らしだったからね。運動不足を解消するという意味ではほとんど嘘はついていないよ？　いや、それよりも僕はもう提督の艦娘なんだ。それなのにこんなコーディネートじゃ提督に嫌われちゃうよ。どうしてくれるんだい？」
「はぁ、それだけ完全敗北しておいてよくそれだけ飄々としていられるよね。流石というべきかな？」
「・・・君は僕を捕まえに来たのかい？」
「・・・まあ、探すのには苦労したかな？　君はもう死んだと思っていたからね」
「事実君に殺されかけているんだけど？」
「そうかい？　あの地獄からただ一人だけ生還している君がそれで終わるだなんて思えないんだけど？　というかそもそも僕は君と戦うつもりはなかったんだけど……」
　時雨は立っていられなくなり、仰向けに倒れる。
「そういえば僕の名前思い出してくれたかい？　ほら、最上だよ。あの頃まだ僕は艦娘じゃなかったけれど結構君と会ってたんだよ？軍の関係者としてさ」
　時雨はもうろうとする意識の中で考えた。そして……
「……全然覚えてない」

ケーキは一日1ホール

「ご覧になって鈴谷。新作の和風パフェですわ！」
「なぁ、あのさ……」
「ねぇねぇ、これ見てよ！　このショートケーキ期間限定なんだって！　えっ⁉　これなんていうんだっけ？　……シュトーレンか！」
全く聞こえていない、一体いくつ食べるつもりなのだろうか？
「なあ、お前艦娘になったばっかりだろ？　そんなにたくさん食べてお金大丈夫なのかよ」
「え？　これ提督が奢ってくれるわけじゃないの？」
どうやらとんでもない誤算があったようだ。俺は鈴谷を問いただす。
「だって、青葉があの司令官は結構甘い人ですからスイーツくらい店ごと買いっとってくれますよって……」
「おい、青葉？」
目を泳がせる青葉。こいつは約束を取り付けるためにあることない事吹き込んだんじゃないか？
「……まあ、いいか。わかったよ、少しぐらいならいいよ」
「やったぁぁ!!　じゃあこれ全部食べていいんだね？」
「いいわけねーだろ!!」
人から奢ってもらうんだから少しは遠慮しろ。俺ら一応初対面だからな⁉
「ええ⁉　じゃあ、まさかこの中から厳選しないといけないの⁉」
ええ⁉　じゃないが？　まずこんなに食べたら色々とんでもないことになるだろ。まず何でこれケーキ2つも持ってきてんだよ。
「だってこれカロリー50％オフなんだよ！　つまり、二つ食べれるってことじゃん」
うーん、これはツッコミ入れた方が負けか？　とはいえこのままでは話が進まない。後で青葉はお説教するとしてどうにかして鈴谷とのケーキの話の妥協点を見つけないといけない。
「わかったよ、ただし半分は俺達に分ける約束をするならいいよ」

「いいよ、商談成立だね」
なーにが商談だ。というかこれ俺が払うのか？　俺まだ提督にすらなってないんだけど？
席に座ると鈴谷と熊野は、いろいろな事を愚痴りだした。
「いやぁ、私もねぇ。軍のために色々やって来たんだけど。やっぱ給料あるけど規制多いし自由少ないしでイヤになっちゃってさ。そしたら私艦娘の適性あるっていうじゃんだからこっちに来るついでになんかうちらが持ってる情報でお小遣い稼げないかなぁて思ってね」
いやそれ内部情報横流しして稼いでんのかよ。それ普通に大問題なんじゃ……
「大丈夫、本当にヤバい奴は教えてないしここの中でしかやってないから、外側に漏らしてるわけじゃないでしょ？　一応ここ軍だし」
「大丈夫なわけないだろ。普通に粛清もんだわ」
ホントにこんなことで海軍は大丈夫なのか？　これ内側から崩壊して人類負けるぞ。
「今回のようなことは特例ですわ。青葉にはもう二度と情報は渡しません、それで聞けば今回のクライアントはこの青葉の司令官というではありませんか。良いですの？　司令官たるもの自分の部下である艦娘の躾けはきちんとしなければなりません」
熊野は青葉をぎろりとにらむ。
「と・く・に！　この青葉は特に厳しい躾けが必要ですわ！　気を付けてくださいな、こいつは不確かな情報を皆にばらまくクソッたれ野郎ですわよ」
「ちがっ、ちがい……ますよ……」
はっきり否定できないところを見るに何か心の奥でつっかえるものがあるのだろう。そこは俺としても反省していただきたい。
「そういえば話変わるけどさ、提督って扶桑さん達と知り合いだったんだね」
知り合いというか……顔面を蹴られた思い出しかないが……
「まあ、そうだったのですわね。あの方たちにはお世話になりましたわ。航空機の扱いはあの方たちに教えていただきましたし」

なんだって？　あいつらがそんなことを？　え？　もしかしてひどい目にあってるのって俺だけなの？
「そうそう、特に最上が仲良かったよね」
「ふーん、最上とねぇ……」
もしかして最上はかなり物好きな変態かもしれない。そんな奴に狙われるなんて……いや時雨もかなりの変態だったか。類は友を呼ぶという奴だろうか？
「最上はいつもあのような方まで戦場に行くこと憂いていました。戦場で一番大事なことが抜けている人たちでしたから……」
「何だよそれ？」
「「意志」ですわ。どのような状況下であろうとどのような理不尽な任務であろうと、必ず生きて帰るという意志が大事なのですわ。その意志が極限状態で力を生むのです。そして……それが時雨が生きているかもしれないと最上が信じている理由ですの。時雨さんは……そういう方だったそうですから」
「え？　最上は時雨の事よく知ってるの？　お前ら最近艦娘になったんだろ？」
「え？　ええ、そうですわね。私達はよく存じませんが、最上は艦娘になる前に頻繁にあの鎮守府に用があって行っていたようですわ。まあ、主に視察といっていましたが……」
と、言うことは最上は時雨の顔も知ってる上にあいつがとんでもない幸運の持ち主の艦ということも知ってるわけか……。俺としては最上に時雨がまさかこの施設内にいるとは思わないでいてくれているというのが理想ではある。
もし、調べられたとしても時雨が前いた研究施設とかだろう。あそこは時雨曰く、もぬけの殻らしいから何かが見つかることはないだろう。
そこで行き詰っていてくれれば一番いいんだけどなぁ。まあ、たとえ見つかったとしても時雨は艦娘である事を捨ててまで生き残ったわけだからしぶとすぎるくらいにしぶといわけだからまだ何とかしそうな気がする。

「ですが、扶桑型の方達にはそれがありません。まるで死に場所を求めているような方たちでした……。本来あのような方たちは艦娘でなければ不適合者として戦場へは出さないのです。隊としてもそんな存在は逆に隊を危険にさらします」
そこまで言うと、しゃべりすぎてのどが渇いたのか注文していた紅茶を飲み始めた。紅茶の飲み方とかはよくわからんがなんだか様になっている気がする。もしかしたらいつもよく飲んでいるのだだろうか。
「……苦い」
そうでもなかった。
「扶桑さん達は散々性能が悪いだの不幸だの呼ばれてるけど本当の欠陥はそこなんだよねぇ。実際の所、山城さんはいつも誰かと組んで戦うような事してないんだよ。それは私達艦娘にとっても自殺行為だよ。死ぬために戦場に行くような人を最上は絶対に許さなかったからね」
なんか……話を聞く限り最上が悪い奴に思えない。まあ、その妹の話を聞いただけだから確信があるわけではないがそんな芯のあるやつがただ誰かの命令のためだけに時雨を狙うようには思えない。
「ですから、最上はいつも言っていましたわ彼女達を……「幸せ」にしてやりたいと」
ふーん、あんなやつのこと幸せにしたいねぇ。なんだよそれ滅茶苦茶お人よしじゃん。
でもなぁ、結局のところ最上がなんで時雨の事狙ってるのかわかんないなぁ。扶桑と山城の事はあまり関係なさそうだし……
結局こいつらにケーキ奢ってるだけの奴になっている。
「ああ、司令官。電話なってますよ?」
ホントだ。マナーモードにしてたから気付かなかった。
……また時雨からだ。ちょっと前に暫く電話はかけるなと言ったばかりなのに……いや、もしかして緊急事態か?
俺は店の外に出ると、電話を取った。
「なぁ、さっきも言ったけど今やばいからあんまり頻繁に掛けてくる

なって」
「ああ……うん。提督ゴメンね、声が聴きたかったんだ。提督も危険な事をしてるわけだし心配になっちゃって……」
「……大丈夫だ。俺を誰だと思ってるんだ？」
「うん、確かにそうだね。杞憂だったよ、僕の事は心配しなくていいから。今日の所は一度帰ったら？」
「そういうわけにはいかんさ。お前の事が気になるし」
「僕の事そこまで心配してくれてるんだね。嬉しいよ。でもそのままだと提督の体が心配だよ、もうすぐ卒業試験なんでしょ？　自分の身ぐらい自分で守れるさ」
「わかったよ。そこまで心配しなくてもお前の強さは身をもって知ってるから大丈夫だよ。ああ、ところでさ聞きたい事があるんだけどさ」
「ん？　なんだい？」
「お前は誰だ？　なんで時雨の電話番号からかけてきてんだ？」

「バレちゃった？」

白露型のエロ担当・・・いや、人それぞれか

電話をかけてきた少女はやはり時雨ではなかったようだ。俺でなきゃ見逃しちゃうね。

普通、こんな状況で時雨の電話番号から知らないやつがかけてきたらもっと緊迫した場面になるものじゃないだろうか？

「結構声マネ自信あったんだけどなぁ」

「いや、そういう問題じゃないだろ」

どうやら本気で落ち込んでるようだ。

「ねぇ、なんで時雨ちゃんじゃないってわかったの？　差し支えなければ聞いていい？」

やれやれ、この子は時雨の事を全然分かっていない。

「時雨はそんなに色気は無い」

声の主は確かに時雨に似ていたのだが、というかほぼ同じだったのだがなんというか……色気がありすぎる気がする。

いや、決して時雨に色気がないわけではない。しかし、いつも時雨の声を……というかさっき時雨の本物の声を聴いた俺からすれば直ぐにわかるというものだ。

この電話の少女は恐らく、寝ている俺を無理やり犯したりするやつじゃない。

なんというか、少し大人の余裕がある感じがするのだ。

それが、言葉の節々に出ていたからどうにも違和感があったのだ。

「それって、私が魅力的ってこと？　早々に艦娘を喜ばせるのが上手ね。でも、女の子に色気がないなんて言っちゃダメよ。特に時雨ちゃんああ見えてそういうのすごく敏感なんだからすぐに自殺……じゃなくて自失しちゃうわよ。この世から自分がいた痕跡がすべて消えるなんて怖いわよね」

お前艦娘かよ。まあ、当然かここに侵入できてるわけだし……

「私は白露から言われて提督に迷惑かけないように時雨ちゃんを逃がそうとしたの。本当は時雨ちゃんが待ち合わせ場所まで来る予定だったのだけれどなかなか来ないからこちらから迎えに来たら時雨

ちゃんがいないのよ。そこでたまたま落ちてた時雨ちゃんのスマホで最後にかけてた相手にかけたらこれまた偶然あなたにかかったわけね」

嘘をつくなよ。どう考えても俺にかけるつもりでかけてただろ？

「白露や時雨ちゃんから聞いていないと思うけれど私は白露型の三番艦のなんでも知ってるお姉さんの村雨よ。話せてうれしいわ、提督」

ふむ、また白露型か……

まあいいよ。白露型は突拍子もないところから現れることはよく知っている。そもそもこの士官学校に一人も白露型は在籍していないのだ。

つまり、俺の目の前に現れる白露型は訳アリの上にもし時雨の部屋にいるのなら侵入者ということになる。

それならそれで俺の下に妹をよこすなら一言連絡くれてもいいんじゃないんですかね、白露さん？

「まあまあ、いいじゃない。少し予定が早まっただけよ。というか狂ったというべきかしら？　あなたと接触するつもりはなかったのよ」

いや、しばらく白露型は御免だ。というかお前の姉のせいでこっちは散々振り回されたんだが？　それも現在進行形で。

「いや、あのさ。まだ心の準備が出来てなかったから……」

「あらいいのよ、心の準備なんてしなくても私を受け入れてくれるのならすぐにゴールよ」

ゴールってなんだ!?　もしかして絶望のか？　絶望がお前のゴールってか？

「うふふ、白露の言った通り面白い人ね。本当なら今すぐにでも会いたいんだけど今行けば普通に私、侵入者だからあまりよろしくないの。だから、電話越しで失礼したって事よ。安心して、私は誰かさんとは違って自分のエゴのために提督を巻き込んだりするような艦娘じゃないわ」
「……もしかして時雨の事怒ってる？」
「いえいえ、そんなまさか。提督のそばで提督を支えるための存在であるはずの艦娘が提督に迷惑をかけて、その上「史上最低の幸せ」をプレゼントするような艦娘が自分の姉であるなんてことをまさかまさか、怒ってるわけないじゃない」
　うん、これ以上の詮索はやめたほうがいいだろう。
「実をいうと最上さん達に感づかれる前から時雨ちゃんはしばらく私たち白露型で保護するつもりだったのよ。最上さんが時雨ちゃんのことを嗅ぎまわってることは知っていたから場所を確保したらすぐにでもここを移動するつもりだったのよ」
　ということは、俺は心配しなくても時雨は白露型のほうで逃がそうとしてくれていたということか。
「それで？　時雨がいなかったのか？」
「そうなのよねぇ。しかも、このスマホ血だらけだし、壁には戦った跡があるし、大淀さんに貸してもらってる部屋なのにもっときれいに使ってほしいわよね」
「ふーん……て、それ手遅れじゃねーか!!」
　時雨攫われてるじゃん。完全に最上の仕業じゃん、もうバレてるじゃん！
「やっぱり、そう思います？　しょうがないわね、新しい時雨を用意するしかないかぁ。ねぇ、ケモ耳のある時雨ちゃんなんてどう？」
　おい、早々にあきらめて替え玉用意しようとしてんじゃないよ。発想が怖いだろ。
「うふふ、冗談よ。たった二人の私の姉だもの、大切にしなきゃ」
　まあ、ほかにも言いたいことはあるけどそれは置いとくとして、俺に秘密で事件を解決しようとしていた白露型が俺に連絡を取ってき

たということは俺に何か頼みがあるということだろう。
「それで？　時雨を助け出してほしいのか？」
「まあまあ、話を聞いてくださいな。時雨ちゃんは無事よ、ピンピンしてるもの。でも、問題なのは最上さんの目的なのよね……ハァ」
村雨は大きなため息ついた。まあ、村雨からすれば時雨を逃がすために準備してたのにパァになったわけだからしょうがないのか？
「というか、お前は最上の目的を知っているのか？」
「ええ、私たちはそれを阻止するために時雨ちゃんを早めに逃がそうとしたんだもの。提督は最上さんに時雨ちゃんの命が狙われていると思っていたみたいだけど実はそうじゃないのよ。最上さんの本当の目的は時雨ちゃんの艦娘の力を失う代わりに手に入れた力よ。あなたも経験したでしょ？」
ああ、あの螺子みたいなのを胸に刺されたときか……。確かあの時は白露が守ってくれていたから事なきを得た感じだったが……
「あれを刺されれば例外なく今の時雨ちゃんと同じになってしまう。すべてを失ってしまうのよ、その代わり心は幸福で満たされる。貴方と出会った頃の時雨ちゃんはあなたを幸せにするためならこの世界のどんなものを失っても構わないというスタンスだったけれど少し変化があったみたい、でもやっぱりその効力は健在だから野放しにしておくには危険なのよね」
前々から思ってたがなんでそんなやつを最初によこしたんだ。もう少し優しめのやつからよこしてもよかったんじゃないか？　そのせいでみんなで大騒ぎしたんだぞ。
えーと、つまり最上は時雨を攫ってその力を使わせることが目的って事？
「いえいえ、あくまでお願い。正式な依頼としてお願いしに来たのよ。戦闘の跡があるけれど、多分時雨ちゃんが話も聞かずにおっぱじめたのね。最上さんはあくまで個人的にその力を必要としたの。それに時雨ちゃんはその提案を必ず受ける。最上さんはそこまで考えて接触したみたいね」
それで結局のところ最上は何のために時雨と接触したんだよ？

時雨の力を何の目的で使おうとしてるんだ？　遠回しに言わずに結論から言ってほしいものだ。
「時雨ちゃんの力はあくまで幸せを運ぶ力なの。つまるところ最上さんには幸せにしてあげたい人がいたんじゃないの？　例えその人がすべてを失うとしても幸せにしてあげたい人がいたんじゃないの？」
……俺には心当たりが一つしかなかった。

「普通そこまでダメージを受ければ艦娘でももう死んでるはずなんだ

けど……ふむ、どうやら君はお化けでもゾンビでもないみたいだね。君はまごうことなくあの時の幸運艦時雨だね」
「いやいや、ここまでやった後でその判断は遅くないかい？　まあ、実のところ僕もよくわからないんだ。僕は昔から死神にも天からの使いにも嫌われてるみたいだったからね」
　最上は床に胡坐をかいている。もう勝ったつもりでいるのかと思ったがセーラー服の中から明らかにキュロットの丈より長い刀ををとり左手に持っている。警戒態勢ではあるみたいだね。
「光栄だよ。あの一騎当千といわれた幸運艦時雨とこうしてまた出会うことが出来たんだからね。僕も艦娘だから、君の伝説の背中を追う存在になったのさ。そして、今の僕はお上の命令で僕っ娘キャラの君を始末しに来たわけだ。僕っ娘キャラはこの世に二人もいらない。君には消えてもらうよ」
　なんてこった、僕っ娘キャラのキャラ被りを気にして僕を消しに来たってのは予想外だったな。
　最上は地面に倒れた僕にそんなことをのたまう。いや、のたまうなんて初めて使ったんだけどね。
　しかしまあ、どうしようか……提督と僕がつながってることはバレてるみたいだし何とか提督だけは助けないといけない。
　最悪の場合、当初の予定通り僕が存在しなかった事にすればいいんだけどね。
「……まあ、冗談はさておき。本題に入ろうか？　君が軍の関係者ってことは僕を始末しに来たのかい？」
「もしそうだと言ったら？」
「大人しく始末されるよ。僕を最後まで艦娘として扱ってくれた提督に迷惑をかけるわけにはいかないからね」
　まあ、嘘だけどね。僕が大人しくやられるわけないじゃないか。例え負け戦でも相手も一緒に負かすのが僕なんだよ。
「まあ、始末しに来たのは冗談だよ、君の協力を得たいだけさ。昔の上司たちは君のせいで皆閑職に追いやられてたけれど、それに対してどうこう思う僕じゃないさ。そもそも君が僕の話も聞かずにそのでか

いネジを僕に投げ飛ばしたのがいけないんじゃないか」
「僕は悪くない」
　最上は僕に刺さった、ナイフや矢を引き抜きながら話す。助けるつもりなら少しくらい手心を加えてくれてもいいんじゃないかな？　結構痛いんだよ？　もう体は死んでいるけれど痛いものは痛いんだ。
「全く……君を探すのにどれだけ苦労したと思ってるんだい？　君を連れて行ったっていう研究所をやっと突き止めたと思ったらもぬけの殻だし、かと思ったら今度は突然出てきた時雨の轟沈書類が原因で軍の元上司たちがお縄になるし……。少しくらい何があったのか話してほしいな」
「……なんてことはないよ。あのほとんどの艦が沈んでしまった戦いの中で生き残った側になったってだけだよ」
「そんなことを聞いているんじゃないよ。どうやって生き残ったのかを聞いているんだ」
　……それはわからない。本当に何で生き残ってしまったのかわからない。
　でも少なくともその時僕自身は幸せではなかった。
「ふーん、伝説の幸運艦の名は伊達じゃないわけだ」
「ううん、たまたまだよ」
「それを幸運というんじゃないのかい」
　それは違う、幸運はいつだって何かの犠牲のもとになりたっている。でも、僕にはあのとき何を犠牲にこんな現象が起こったのか僕にはわからない。
　少なくとも僕は確かにあの時沈んだ。真夜中の燃える海で遠ざかっていく水面を見ていたことを覚えている。でもその記憶があるのに次に目を覚ました時には破壊された艤装と一緒に海岸に打ち上げられていた。
「……失望したかい？」
「何が？」
「僕の事調べたんだよね？　だったら僕の中には何も残ってないこと

くらい知ってるんでしょ？」
　あの時の僕の事をみんながどれだけ囃し立てていたのかはわからないけれど、あの時の僕はもういない。
　今の僕はただ失うことしか出来ないただの死にきれなかったバグみたいな存在だ。僕に何かしてあげられることがあるとは思えないな。
「ああ、調べたよ。君が艦娘の力を失ったこともその力の代わりに手に入れた力の事も知っている。でも、そんなのどうでもいいよ。問題なのは君がどんな状態でも「幸せ」を引き寄せるっていう君の特性が本物だってことだよ。それは君がここにいるということがすでに証明している」
　最上は僕の矢やナイフを抜き終わると僕の前で膝をついた。
「どうか僕に力を貸してもらえないかい？　君の幸せを分けてほしい奴がいるんだ」
「……相談する相手を間違えてるんじゃないかな？　僕は失うことしか出来ないんだよ？」
　まさか僕に誰かを幸せにするように頼まれるなんて思わなかった。僕には普通の人が欲しがる幸せなんて分けてあげられないんだけれど……
「それでいいさ。僕がやってほしいことは扶桑たちの艦娘の力を失わせること。それで、彼女たちは戦場に出なくて済む」
　……本当に僕の事調べたんだね。ほとんど誰にも言ったことないんだけど。
「艦娘はなりたくてなるものじゃない。運命がそうさせたんだ、逃げる事なんてできない。でも君は艦娘の運命に抗ってその上逃げることが出来た。君なら死に場所を求めてるあの二人を解放してあげられると思ったんだ」
「だから、そうなる前に彼女たちの力をなかったことにしたいっていうのかい？」
「うん、今までたくさん手を汚してきた僕だけど死んでほしくないやつだっているってことさ」

最上は静かにうなずく。ふーん、友達思いなんだね。僕には、どんなに強くたって活躍したってそんな風に思ってくれる奴なんていなかった。……まあいいさ。
「僕はこれでも追われる身で結構動くのも危険なんだ。そんな僕を使うってことはそれ相応の事をしてもらわないといけないんだけど？」
「うん、そうだよね。そういうと思った。だからこちらもそっちにとって良い事をしてあげようと思うんだ。交換条件ってやつさ」
フーン交換条件ね、悪いけれど僕にその手は利かないよ。僕にとって価値のあるものは提督の安全と幸せだけだからね。君が何を僕にくれるかは知らないけれど初めから交渉の余地はないというわけだね、残念だったね。
「実は僕は君の提督の卒業演習の相手の提督の所に所属しようと思っているんだ。つまり僕もそれに出るというわけだね」
「……」
「その演習で負けてあげる」

ハーレム主人公が女子寮に侵入するイベント的な奴

「おい青葉。急用だ行くぞ！」
俺は急いで青葉を呼びに来た。急がないと扶桑型の二人が危ない。
「どーしたんですか司令官？　私これから４つの中からケーキを選んで結局のところ運はその人次第であることを証明するための実験をするところだったのですが……」
俺はケーキをフォークで突き刺し青葉の口に押し込むと青葉を担いで店を出た。もしかしたら鈴谷や熊野に怪しまれたかもしれないが仕方ない。ことは急を要するのだ。
「ふぉっふぉふぉふぉ、ンぐ……ゴクン。ふー、何するんですか司令官！　ケーキというものは少しずつ味わうものなんですよ！」
いや、突っ込むところはそこじゃないと思うのだけれども……。
俺はここまでの経緯を説明した。
「なるほど……最上さんは扶桑さんたちを救いたかったわけですね」
「まあ、それで救われるのかはわからんがな。でも、時雨のあの力を不用意に使われるのはまずいだろ」
俺たちは急いで艦娘寮に向かった。
「これ俺が入ってもいいのか？」
「バレなきゃいいんです。バレたら溶鉱炉に投げ込まれますが……」
リスクが高すぎる……。まあ、仕方ないか。リスク背負ったんだから、間に合ってもらわないと困るぞ。
幸いにも今は昼間時でみんな訓練に行っているため艦娘たちは出払っている。
「扶桑の部屋はどこだ？」
「ここの階段を上って３階にあります。見つからないように慎重にいきましょう」
俺は静かにうなずくとこっそり廊下を歩く。すると、扉が開いた。
「あら、青葉じゃない。どうしたの？」
「あっ……大井さん」
大井が現れた。残念君の冒険はここで終わってしまった。

「何やってるの？　今は訓練中のはずでしょ？」
「ああ、いえ今は少し野暮用で……」
　俺はとっさにドアのすぐ横の壁に張り付き大井の死角に入る。大井はドアから出ていないため気づいていないがドアから少しでも出られたらアウトだ。
「大井さんこそなぜここに？」
「私は……ねぇ、少し聞きたいのだけどいい？　あいつは……今どうしてるの？」
「司令官の事ですか？　あー生きてますよ、今のところは」
　大井が少しでもそこから出たら死ぬけどな。
「そうじゃなくて……その、私の事何か言ってた？　その……あいつもうすぐここを出るっていうじゃない。でもその……私、あいつについて行っていいのかわからなくって。北上さんの行くところにならどこへでも行くつもりなのだけれど」
「……もしかして司令官と仲直りしたいんです？」
「ちがっ、そんなんじゃないわよ！　でも作戦の時にあいつとこのままだとその……よくないじゃない？　卒業演習の最初のミーティングにも行けなかったし……」
「大丈夫ですよ、司令官はあなたの事ちゃんと待ってます。ええ、そうですね。さっきまで喫茶店にいましたからもしかしたらそこにいるかもしれませんよ？」
「え？　今すぐ会えっていうの？　さすがにそれは……」
「ほらほら善は急げです。とっとと準備して司令官に会いに行ってください。私は部屋の外で待っていますから」
　青葉は大井を部屋に押し戻しそしてドアを閉めた。
「……ふぅ、ほら！　何をグズグズしてるんですか!?　早く行ってきてください！」
「お前・・・後で殺されるぞ？」
「しょうがないでしょ！　司令官がここにいるのがバレたら割とマジでシャレにならないんですから！　それに、大井さんのことを待っているのは本当なんでしょう？」

いつかはちゃんと大井と話す機会作らないとな。

俺は3階まで駆け上がる。

扶桑の部屋は開いており、こっそり部屋の中をのぞいてみる。

「いいかい山城？　君がなんで一人で今まで戦ってたのかは分かったけれど、君は不幸なんかじゃないよ？　ああ、勘違いしないでほしいな。これはお世辞なんかじゃないよ、だって君は幸せでもないんだから。不幸な奴の隣にはいつだったて幸せな奴がいるんだ。自分の不幸のおかげでこの世のどこかの誰かが幸せになっていてもらわないと不幸になり損だと思わないかい？」

「いや、その幸せ私に返せって思うわ」

……なんだこの状況は？　俺はてっきり時雨が扶桑型の二人を襲撃しに行ったものだと思い込んでいた。

というか、なんで時雨が山城に良くわからないことをレクチャーしてるんだ？

「君の不幸のおかげで幸せになるやつがいないと君は不幸にもなれないんだ。君は扶桑に君が勝つところを見てほしいんでしょ？　だったら自分の代わりに幸せに勝ってくれる奴を見つけなきゃ君は不幸に勝つことも出来ないよ？」

「でも私にそんな人なんて……」

「いるよ。君は君が思っているよりも君の身を案じている人はいるんだよ？　それじゃあ、幸運艦からのアドバイスはここまであとは自分でどうにかするんだね」

すると時雨は部屋を出た。そこで時雨は俺たちに気づく。

「ああ、提督。もしかして艦娘寮に侵入するとかいうハーレム恋愛漫

画のお約束のイベント中かい？」
　ああ、それならよかったのに。それなら少しくらい俺にとって良いイベントだったのに、俺にはただ単に命の危機が迫っただけだった。
「なぁ時雨？　何があったんだ？」
「ああ、通りががっただけだよ。彼女たちは何だかほうっておけない何かを感じたんだよ」
「嘘つくなよ。村雨から聞いたぞ？」
「・・・村雨にあったのかい？」
「いや、お前が部屋に忘れてた電話からかけてきたんだけど・・・」
　村雨に非はないだろう？
「はぁ、君に心配かけたくなかったんだ。いや、君の卒業演習で君に必ず勝たせてあげられるなんて言われたら断れないじゃないか」
　お前・・・そこまで俺の指揮を信用してないのか。まだ実践とか何もしていないけれども。
「逆に聞くけどいまの君の戦力で強力な演習相手を打ち破るほどの指揮ができるかい？」
「・・・無理です」
　いやいけないこともない気はするが・・・戦艦とかがいればなぁ。
「それで扶桑型の部屋にお邪魔したわけさ。それで聞いたんだ。どうして、一人で勝つことにこだわるんだってね」
「君はもしかして不幸な中に身を置き続けることを頑張ってるとか思っているのかい？　ひとりでいることを誰にも理解されないことをかっこいいとか思っているのかい？　たとえ今不幸だったとしてもその先にハッピーエンドが無いんだったら不幸でいる意味がないじゃないか。それなら不幸なんて無い方がいい、君は不幸を持て余しているよ」
「嫌な不幸なら逃げればいいのさ。報われない不幸を背負っているくらいなら全部捨てて逃げるべきだ。扶桑の不幸も君の不幸も僕が受け止めてあげる……。だから……幸せになろう？　僕なら君を幸せにしてあげられる」
　おいおい、色々言い過ぎだろ。言及しないでいいところには突っ込

まなくていいだろうに。
「それで？　なんて答えたんだ？」
時雨曰く、山城は即答したらしい。
「……違う。幸せとかそんなんじゃない。私は姉様に教えたいの、こんな私でも勝てるって。私が勝てば姉様にもきっとできるって、不幸でも、欠陥があっても、才能がなくても、性格が悪くても、出来損ないな私でも勝てるのだから姉さまならきっとやれるって証明しないといけないの!!　それに……あんたじゃ、姉さまを幸せにできない。姉さまを幸せにできるのは私だけだから」
「もし、扶桑たちが行き場のない不幸をもて余しているんだったら僕が解放してあげたんだけど、あれなら少し刺激を与えて軌道をずらしてやればいい」
山城はそのためにいつも一人で戦ってたのか？　自分の内気な姉に希望を持たせるために？
なんだか初めて山城の心の内を聞いた気がする。
「彼女にはちゃんと戦う理由が存在した。最上は見誤ったみたいだね」
「でも、一緒に戦ってくれるやつがいなかったら駄目じゃないか？」
「最上のところにでも行くんじゃないのかな？　仲は良かったみたいだし、そもそもこれは最上が二人の身を案じての事だったわけだから、その気持ちは・・・きっと二人にも伝わってたんじゃないかな？」
時雨は、すがすがしい顔でそんなことを言った。だが俺には何となくわかってる。
「お前自分の求めてるものじゃなかったからめんどくさくなって最上に押し付けただけだろ？」
「・・・まあ、そんなことないさ」
まったく、どちらにしろ最上に何かしらの仕返しをされるのではないだろうか？
「その時は一緒だよ、提督」

どうして俺を巻き込むんですかねぇ。なんで初対面の最上にしょっぱなから怒られないといけないんだ？

次の日、俺は食堂で朝飯を食っていた。
結局、当初の目的であった戦力の増強は果たせていない。
そもそも本当に俺に提督としての適性などあったのだろうか？
どうしてほかの人より苦労してる気がする。
もうこれここのお偉いさん殴ってやめようかなぁ。そもそも提督になったところで世界救う気なんてこれっぽっちもないしなぁ。
そこまで考えたところでふと周りを見るとみんなが俺のほうを見ている。えっ？　もしかして口に出てた？　ヤバくね？
そこで俺の後ろに誰かが立っているのに気づく。
その人は俺のことを鬼のような形相でにらんでいた。
「・・・ええと、何か用ですか山城さん？」
やっぱりこういうことって適性の高い提督の遭遇するイベントじゃないと思うんだよな。

海に行くときは日焼け止めの上から防護服を着ること

「……えーと？　ちょっと待ってて」
俺は山城を席に待たせるとトイレに向かった。
本当に用を足しに来たわけじゃない。助けを呼ぶためだ、もしかしたらこの後あの悪魔超人からルール無用のデスマッチを組まされることになるかもしれない。
とりあえず青葉に連絡するしかない。
「もしもし、司令官ですか？」
「もしもし青葉？　ちょっと困ったことになったんだ。助けてくれないか？」
「あー、すみません。今少し忙しくてですね」
なんだろうか？　というか、結局昨日あの後青葉はどうなったのだろうか？
確か大井の面倒を片付けるためにあの場に残ってくれたんだったか……
「できればこっちが助けてほしい……あっ！　熊野さん!!　待って!!
違うんです!!　決してこの青葉悪意があって嘘をついたわけでは……だから焼き土下座は勘弁してください!!　青葉はまだステーキにはーー」
そこで電話が切れてしまった。うん、何が起こっているかよくわからないが……うん、青葉はソロモンの狼と呼ばれた不死身の艦娘だからきっと無事に戻ってくるだろう。
そういえばそもそも事の発端は時雨だ。山城が俺のところに現れたことを伝えなければならない。
「おい、時雨！　大変なんだ！」
しかし、通話中になっているのに向こうから返事がこない。
「……時雨？　どうしたんだ？」
「ねぇ提督？　僕の声って色気無いかい？」

……？　どうしたんだろう？　なぜ突然そんなことを言うんだろう？
「提督、村雨の声と比べて色気が無いって言ったそうじゃないか。それは本当かい？　答えてほしいな」
　あ、そういえばそんなこと言った気がする。村雨……あいつ時雨に密告しやがったのか！
「そ、そんなことより山城が俺のところに……」
「そんなこと？　僕の乙女心が傷ついた話はそんなことで片付くのかい？　君のその何気ない一言で自分の妹からマウントとられた姉の気持ちが理解できるのかい？」
　ヤバい、時雨がめんどくさいモードに入ってる。
「ああ、いいんだ。この際だからはっきりさせよう。村雨から聞いたけれど君結構いろんな艦娘から慕われているみたいじゃないか。みんなを集めて一体誰が好きなのか公言してもらったほうがギクシャクしなくていいんと思うよ？　うん、そうしよう」
「わかったよ！　謝るからこれ以上俺の事いじめないで！」
「いじめる？　おいおい、提督？　僕は君のためを思って言ってるんだ。僕には悪意なんて一つもないし危害を加えようとしたことなんて一度もない。あと勘違いしているようだから言っておくけど村雨は僕なんかよりよっぽど情熱的で積極的だ。気を付けることだね。ああ、これから僕は傷ついた心を癒すために傷心旅行に行こうと思うんだ。それから姉として村雨に姉の威厳を叩き込むことにするよ。それじゃあね、提督」
　そうして電話は切れてしまった。どうして……
　そもそも山城はどうして俺のところに来たのだろう？
　すると、俺のスマホにみたことのない電話番号から着信が入った。俺は恐る恐る着信ボタンを押す。
「随分と長いおトイレですね？　迎えに行きましょうか？」
「ど、どうして俺の番号を？」
　相手は山城だった。もう何が起こっているかわからない。
「最上から聞きました」

あいつかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!

俺が戻ってくると律義に俺がいたところの真正面の席に座っていた。

凄い、何が凄いって圧が凄い。

「……えっと？　俺に何か用か？」

「何もしゃべらないで」

「はい……」

山城はしばらく顔を手で覆ってうつむいていた。そして、俺のほうを見る。うーん、美人なのに眉間にしわが寄り俺をにらみつけている。

え？　何？　もしかして俺殺されるの？　あ、昨日の時雨が俺のところの時雨だってバレたのか？

「ああ、いやあれはほとんど俺は知らなかったって言うか……」

「……何の話よ？」

どうやら違うようだ。だったらなんだ？

山城はしばらく黙ると意を決したように話し始める。

「これまでのことはその……悪かったと思ってるわ。私も姉さまを守るのに必死だったの。あなたのことは最上に聞いたわ、あなたなら私みたいな艦でもちゃんと戦力として使ってもらえるかもしれないって」

話を要約すると、最上に相談に行ったところ俺のことを紹介されたらしい。

よりによって、今まで何度も扶桑に近づいてはぶっ飛ばしてきた提督というだけあってはじめは山城も嫌がったらしいが、

「この提督はすごいんだよ！　かつて最前線で活躍した伝説の駆逐艦が頼った提督だからね。きっと君のことも勝利に導いてくれるはずさ」
と言われたそうだ。
あらゆるところに誇張や意図的な情報の欠落が見えるこの最上のセリフを信じた山城は俺のことを頼りに来たらしい。
「何があったとかは聞かないでほしいの。でも……私はどうしても姉さまに勝利を届けないといけない。どんなに情けない役でも、汚れ役でも、不幸な役でもいい……だから私を勝たせてください。お願いします」
山城は深々と頭を下げた。頭を下げているからよくわからないが心なしかすすり泣く声が聞こえる。
きっと今まで山城はこんな風に誰かを頼ったりすることはなかったのだろう。ずっと一人でやってきた彼女がこうやって誰かに頭を下げるという行動自体が山城にとっての成長だったのかもしれない。
そんな一部始終を実はこっそりのぞいてたりした自分は彼女のお願いを断ることはできなかった。たとえそれが最上の思惑通りだったとしてもだ。

「というわけで紹介するぞ。山城だ。仲良くしてやってくれ」
「ほんとに戦艦を勧誘できたの!?」
叢雲に山城を紹介したところこの反応である。
「いやまあ、色々あってな……」
本当にいろいろあったのだ説明するのは難しい。
ほかの艦娘たちもよい感じに士気が上がったのではないだろうか？
「これで少しは勝率が上がったわね。早速作戦を立てましょう」

「あの……」
「なに？」
　山城が叢雲に話しかける。
「喜んでもらっているところ悪いけれど私はあんまり戦力にならないの、バランスも悪いし、速力も低いし、命中率も悪いし……だから私のことは囮くらいにしか……」
　山城の最後の言葉は殆ど聞こえなかった。お前それ自分で言ってダメージ受けてないか？
　うーん、しかし初対面相手だとこんなに小さくなるんだな。俺にプロレス技をかけていた時の山城はどこに行ったのだろうか。
　叢雲は山城にデコピンをする。
「何言ってるのよ。あんたは戦艦なんだから私たちの後ろで堂々とそのデカい砲を撃ちまくってりゃいいのよ」
「それにそこまで何かあるんだったら艤装に問題がある可能性もあるわね、知り合いに見てもらいましょうか？　まあ、それを決めるのは司令官だけど」
　全く異論はなかった。その知り合いというのは誰なのか気になるが……
「ああ、あとそれとあなたの弱点は作戦会議で私達に全部言いなさい そこは私たちがカバーしてあげる」
「・・・ありがとう」
　山城は静かにお礼を言った。

運はしょうがないとしてその他のことはどうにかなるのでは？

山城はそもそも一人で戦っていたため作戦会議というもの自体が初めてではあったものの良い感じに会議は進んでいた。

ふむ、艦隊全体の雰囲気は良い感じなのではないのだろうか？　このまま順調にいけば山城はこの艦隊でよい関係を築いていけるかもしれない。

俺はそんな風に思いながら作戦会議を始めようとする彼女たちを後目に部屋を出ようとした。うん、僕ができることはここまでだ、今日はとろけるまで寝よう。

「あんたどこに行くの？」

叢雲に肩をつかまれる。

「なぁ、勘弁してくれよ。今日はとりあえずお前らで親睦深めてさ。いいだろ？　お願いだよ、疲れたんだよ」

関わる艦娘が一人増えるたびにトラブルが増えていく気持ちがお前にわかるか？

「ダメに決まってるでしょ！　そもそも全員集まってないじゃない！　ちゃんと集合かけたの？」

確かに全員集まっていない。青葉はさっきの電話で故人になってるみたいだし北上さんはなんで来てないのかわかんないし……

「あ、提督。遅れてごめんね」

やってきたのは北上だった。それとその後ろに隠れるように大井がついてきていた。

「いや、大井っちがさ。何があったのかわからないけど作戦会議に顔を出したいって言ったんだよ。ほら大井っち、提督と仲直りしたいんでしょ？」

「いや、別に仲直りしたいとかじゃ……。私はただ北上さんだけだと心配でついてきただけです」

まあいいさ。会議に顔を出してくれるだけでも進展だからな。

そういうと大井だけ逃げるように行ってしまった。
「大井っちそういえば青葉が何とかかんとかって言ってたけど青葉はどうしたの？」
青葉は……もう、いないんだ。思えばいい奴だったのだが……
「あら、お邪魔しますわ。へぇ、こんなところで作戦会議でやってるんですの？」
「ヤッホー提督。青葉回収してもらいに来たよ」
鈴谷と熊野が青葉の襟首をつかんで引きずりながら入ってきた。
「あら提督、昨日ぶりですわね。あなた先日はよくも嘘をついてくれましたわね。事の顛末はすべて最上から聞きました」
状況は大体察した。最上が時雨の事を見つけたせいで時雨の存在も時雨と俺達とのつながりもすべてバレたということだ。
「悪かったよ。謝るから青葉のことを許してやってくれないか？　時雨は色々危ない存在だから隠さないといけなかったんだ」
「ええ、存じておりますわ。あなた初めから私たちのことを疑っていらしたのでしょう？」
「まあ……そうだな」
あーこれは怒らせちゃったかな？　まあ、仕方ないか。
「見直しましたわ」
「え？」
「青葉の提督というからどんなクズ野郎かと思っておりましたが……あなたは思ったより仲間思いのようですわ。それに本人には口が裂けても言えませんが青葉のことも。情報のためならプライバシーもデリカシーもないあの青葉が自分の利益になりもしないのに危険を顧みず誰かのために嘘をつくなんて思ってもみませんでした。こんな人になら協力してあげてもいいと思いましたの」
「それじゃあ……」
「ええ、今回はあなたの演習に助太刀いたしましょう。で・す・が、青葉と組むのは今回限りですわ!!　青葉と共闘なんて考えただけで背中に寒気がしますの。だから、今回だけですわ!!」
「まあ、鈴谷はどっちでもいいけどね。熊野は考えすぎだよ」

そして、熊野は青葉をその辺に捨てると作戦会議中の艦娘達の中に入っていった。
「で？　これだけ集まってるのに司令官だけサボるつもりじゃないわよね？」
「……わかったよ」
渋々と俺はみんなが待つ席に向かった。
そうして、卒業演習のための作戦会議が始まった、のだが……

「青葉は重巡ですから山城さんの隣で守りを固めたほうが良いと思います」
「ちょっと！　何故私の隣に青葉がついているんですの!?　青葉は艦隊の肉壁として名誉の戦死を遂げるポジションのほうがお似合いですわ！」
「演習で死者を出さないでくださいよ！　司令官、うちの艦隊の中にすでに敵がいます。助けてください！」
「そうだぞ、熊野。皆の肉壁となるのはこの若葉の役割だぞ！　訂正してくれ！」
「いえ、そういうことを言ってほしいわけじゃないんですよ」

「あ！　初雪ちゃんだね？　鈴谷だよ、よろしくね」
「あ、あぁ、よろしく、お願い、します」
「それ何やってるの？　ゲーム？　鈴谷にも教えてよ！」
「ああ、助けて……北上さん」
「ちょっと、鈴谷？　駄目だよ初めからそんな陽キャ全開でいったら戸惑っちゃうでしょ？」
「あ！　そうなの？　ごめんね、初雪ちゃん」
「あ、いえ、大丈夫です……」

「みなさんお疲れ様です。お茶と軽食をどうぞ……あの、叢雲さん？　大井さんと山城さん喧嘩してるんですか？　お互いににらみ合って……」
「ああ、由良。いや……多分そんなんじゃないと思うわよ」
「……（なんでこの人こんなににらんでくるの？　わ、私何かしたかしら？）」
「……（あ、やっぱり私みたいなポンコツがここにいることが嫌なのね……。ごめんなさい、これが終わったらここから消えていなくなりますから……）」
「先は長そうね……」

え？　これ俺がまとめんの？　無理じゃね？
そもそも、あんな癖の強い奴らを一つの組織としてまとめようと思うこと自体が間違いだったんだ。
「ねぇ、俺やっぱり提督の才能無いんじゃないの？」
「はぁ、何言ってんのよ。あんたは私が認めた司令官なんだから胸を張りなさい」
「はあ、とりあえず。山城の艤装はお前の知り合いってやつらに任せてるけど大丈夫なのか？」
「ええ、腕はいいのだから多分大丈夫……のはず……」
どうにもその腕のいい整備士とやらも艦娘らしい。叢雲は生まれながらにしてこういった軍の関係者や一部の艦娘に知り合いがいて助かっている。一部の施設は顔パスというから驚きである。マジで

お前なんなんだ？
「演習では沈まんはずだから作戦名は「ガンガン行こうぜ！」だ！　攻撃はすべてこの若葉が受けよう」
「ダメですよ！　きちんと守備も大事ですから「みんなガンバレ」で行くべきです！」
お前らどんだけドラクエ好きなんだよ!?　ドラクエでしか作戦名決められないの？
聞いた話だとそういった座学は鹿島教官の姉である、香取教官の担当だったはずだ。まさか、香取先生はドラクエ好きだったのか？
しかし、叢雲曰くこいつらは香取先生の授業中ほとんど寝てただけで、そのたびに先生からギガデインを食らっていたらしい。
ふむ、俺ですら真面目に受けていたというのにこいつらは……。ん？　何か寒気が……
まあいい、とりあえず戦力の確認だ。
まず、最大火力の出せる山城なのだが……
「止まってる的に百発百中で外してるわね……。ここまで来たら才能ね」
叢雲の正直過ぎてぐうの音も出ない感想に山城は膝を抱えて顔をうずめたまま動かなくなってしまった。
「グズでごめんなさい、鈍臭くてごめんなさい、無駄にデカくてごめんなさい、運が悪くてごめんなさい、存在してててごめんなさい、生きてごめんなさい、無駄に酸素吸っててごめんなさい、ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」
ああ、これはしばらくはだめだ。叢雲も、もう少し柔らかい言い方はできないのか？
「できてないものはできてないんだから仕方ないじゃない」
うーん、そうなんだけどさぁ。叢雲は言葉が足りないのだ。叢雲はただ貶したいわけではない、卒業演習まで時間がない中そういった慰めをしている暇はないということだ。
今の山城は、ただ大きな水柱を作るだけの艦ということになってい

る。
「あー、山城？」
「……フフフ、笑いなさいよ。所詮私は艦隊のスクラップよ、私なんていない方が勝率は上がるわ。いいの、私は姉様とまた一緒にいられればそれで……」
そんな山城の隣に俺は座った。
「お前は勝てるのなら囮にでもなる覚悟があるって言ったな？　あれは嘘だったのか？　扶桑に勝ちの報告をしたいって言ったのは嘘だったのか？」
「そんなわけないじゃない！　勝てるのなら勝ちたいわよ！　でも……こんな私がいたら、勝てるものも勝てないわよ……」
俺はそんな山城の両頬をつかんで無理やり俺のほうを向かせる。
「言っておくが使えるか使えないか決めるのは俺の役目だ。お前が決めることじゃない！　でも、そうやって座り込んで相手の的になるような奴はお前じゃなくても用なしになるぞ？　それでもいいのか？」
山城は首を横に振るも俺に疑問を投げつける。
「……あるの？　私を使って……それでも勝てる方法があるの？」
「……ああ。一応はある。ただ、結構つらい役になるぞ？　いいのか？」
そんな俺の質問に山城は即答した。
「ええ、いいわ。私が勝てるというのなら喜んで不幸になる」
俺はその言葉を聞くとすぐに動いた。
「あー叢雲？　さっき言ってた知り合いは開発作業もできるか？」
「ええ、もちろんよ。何？　今から会いに行くの？」
俺は、山城と叢雲を連れて叢雲の知り合いに会いに行くことにした。